鹿角市文化財調査資料　16

新斗米館跡

鹿角市新斗米館跡第Ⅱ次発掘調査報告書

1981－3

秋田県鹿角市教育委員会

新斗米館跡第Ⅱ次発掘調査　正 誤 表

3ページ	2行目	軽石流堆積物，か　→　軽石流堆積物か
	22行目	段丘面である(内藤1966)鳥越面の →　段丘面である鳥越面(内藤1966)の
5ページ	4行目	待　→　侍
	6行目	成立を　→　成立と
	24行目	式部大輔助隆の成田太郎助広 →　式部大輔助隆の長男成田太郎助広
6ページ	2行目	鹿角郡二て　→　鹿角郡ニて
	10行目	小枝指圧左馬助　→　小枝指左馬助
	10行目	召出返れ　→　召返され
	13行目	先ず似て，　→　先ず以て，
	18行目	詠された。　→　誅された。
	23行目	働きから　→　動きから
	24行目	制左されるまでは，　→　制圧されるまでは，
	25行目	保守すべし，　→　保守すべく，
	28行目	然らてむる　→　然らしむる
	29行目	伝えよう。　→　云えよう。
	31行目	四国の　→　四囲の
7ページ	17行目	鬼ニ　→　崩ニ
	19行目	長中城　→　長牛城
	19行目	鬼　→　崩

序

鹿角市は，秋田県における埋蔵文化財の宝庫の１つであり，重要な地域でありますが，近年東北縦貫自動車道その他の開発事業に伴い，これらの貴重な遺跡が消滅しつつあります。特に館跡は絶好の土取場として，その消滅が急速に進む状況であり，館の調査・保護が急がれております。

新斗米館は，鹿角四十二館の１つでありますが，土取り計画があり，土地所有者と協義を重ねた結果，発掘調査を実施し，記録保存する事になったものです。

新斗米館からは，多数の遺構が検出され，貴重な資料を得る事ができました。本書が，いささかでも文化財保護及び研究の一助となれば幸いに存じます。

最後に，調査について御指導・御協力をいただいた関係各位に対し，心から感謝申し上げます。

昭和56年３月

秋田県鹿角市教育委員会 教育長

柳　沢　源　一

例　　言

1．本報告書は，鹿角市花輪字新斗米に所在する新斗米館跡の第Ⅱ次発掘調査報告書である。

2．本報告書の執筆は各調査員，調査補助員の分担により，文責は各々の文末に明記してある。

3．陶磁器の鑑定は金沢大学助教授　佐々木達夫氏，銅鏡の鑑定は秋田県立博物館々長　奈良修介氏，石質鑑定は，秋田県立十和田高校教諭　鎌田健一氏にお願いした。

4．本報告書の文中，用語の主たるものは統一するように努めたが，数次にわたり使用されるものは簡略されている場合もある。なお図版，表等で下記のような記号を用いた。

ＳＢ------竪穴住居跡　　ＳＭ------土室状遺構

ＳＴ------竪穴遺構　　ＳＫ------土坑

ＳＲ------円形竪穴遺構　　ＳＤ------溝状遺構

ＳＫＡ---カマド遺構

5．本報告書に使用した図版のスケールについては，各々に示している。それがないものは縮尺不同である。なお写真図版は任意の縮尺とした。

6．発掘調査・報告書作成にあたっては，下記の方々から御指導・御助言をいただいた。（敬称略）

小林達夫（国学院大学助教授），鈴木克彦（青森県立郷土館）

工藤清泰（浪岡町教育委員会），工藤竹久（八戸市教育委員会）

本堂寿一（北上市教育委員会），昆野　靖，石川長喜（岩手県教育委員会），磯村朝次郎（秋田県立博物館）

岩見誠夫，桜田　隆（秋田県教育委員会）

本　文　目　次

序
例　言
本文目次

第Ⅰ章　本遺跡の自然環境 …… 1
　1．遺跡の位置と立地 …… 1
　2．遺跡付近の地形・地質 …… 3

第Ⅱ章　本遺跡の歴史的環境 …… 5

第Ⅲ章　調査の概要 …… 8
　1．調査に至る経過 …… 8
　2．調査要項 …… 8
　3．調査方法 …… 9
　4．調査経過 …… 9

第Ⅳ章　検出遺構 …… 12
　1．古代の遺構 …… 12
　2．中世の遺構 …… 15

第Ⅴ章　出土遺物 …… 67
　1．陶磁器 …… 67
　2．土器・土製品 …… 69
　3．金属器 …… 72
　4．石器・石製品 …… 82

第Ⅵ章　まとめ …… 86

参考文献 …… 88

第Ⅰ章　本遺跡の自然環境

1．遺跡の位置と立地（図1～3）

鹿角盆地を北流する米代川の右岸には，奥羽山脈の西麓から半島状にのびた舌状台地が数多く発達している。これらの舌状台地先端部には，自然地形を巧みに利用した館跡が構築されている。新斗米館もこの1つであり，すぐ北には小平下館，300 m北西には小技指館，すぐ南東には小平館がある。

新斗米館は多郭連続式で，台地先端から高市集落の背後まで7個の郭状の地形が並んでいるが，館が密集している地域であり，どこからどこまでが新斗米館なのかははっきりしていない。

今回の発掘区のⅠ郭は，その西側の郭（Ⅱ郭），東側の郭（Ⅴ郭）と空堀で隔てられ，さらに北側と南側に土塁及び空堀があり，従来から本館と考えられてきたところである。Ⅰ郭は，東西に長く，東西120 m南北40mの規模であり，標高149 m，付近水田からの比高が20mである。

（秋元信夫）

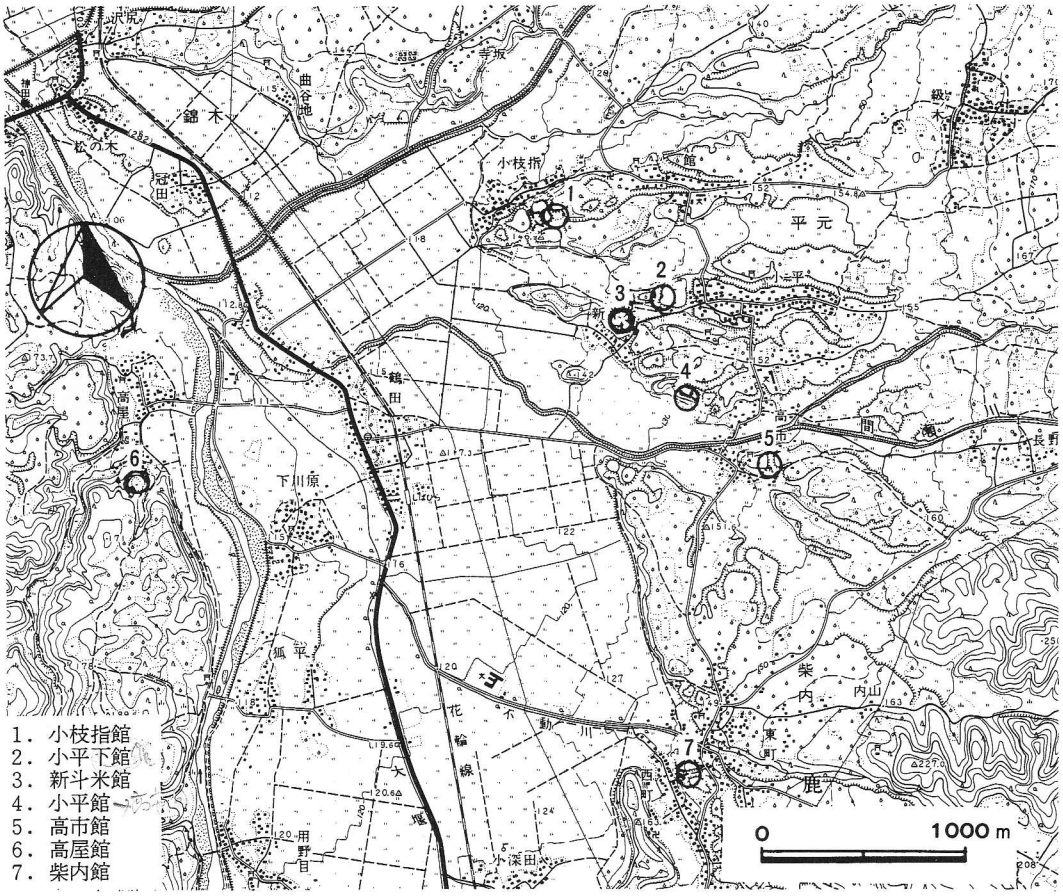


図1．新斗米館位置図

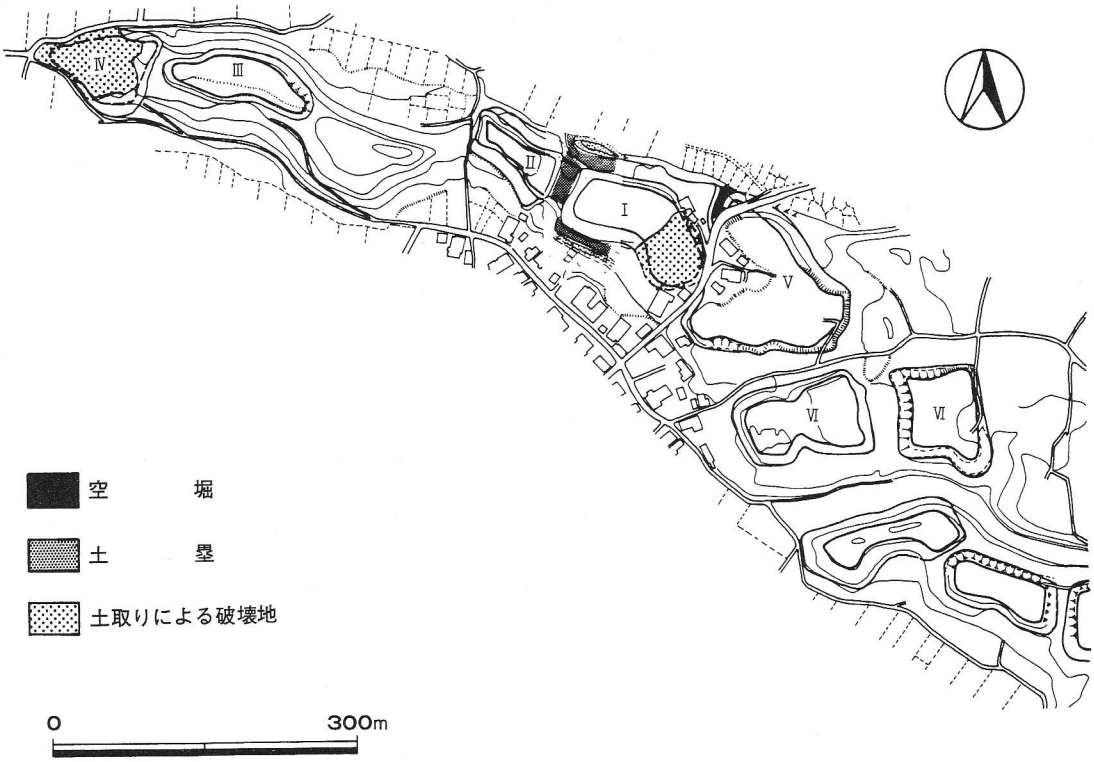


図2．新斗米館全体図

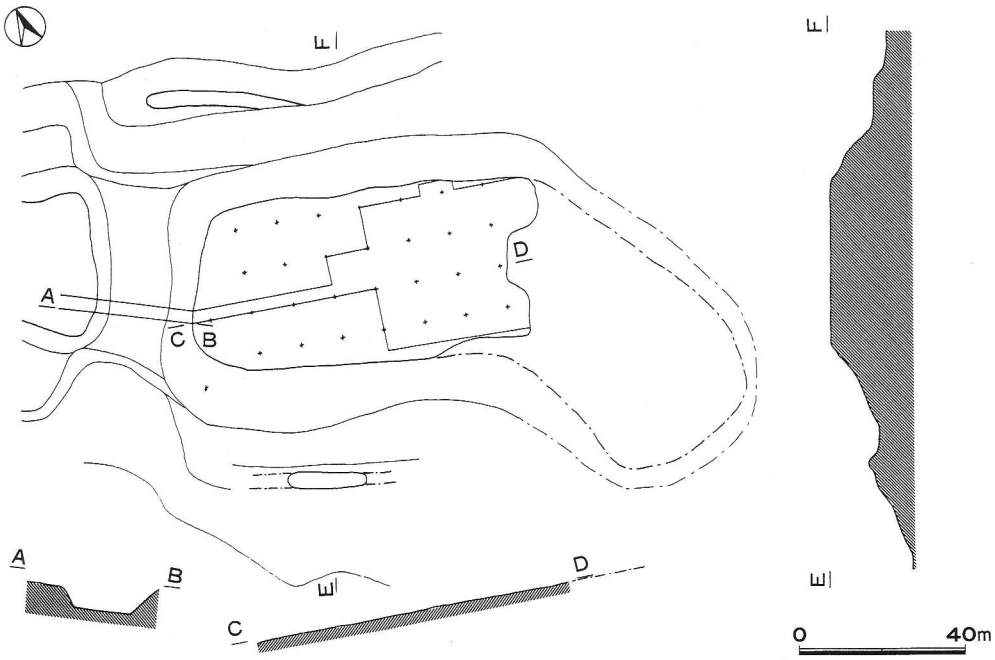


図3．グリッド配置と発掘区

2．遺跡付近の地形・地質

花輪盆地の東側に脊染山地，西側に丘陵地帯，盆地内に十和田火山起源の軽石流堆積物，からなる段丘が分布する。脊染山地は第三紀中新世の堆積物および火成岩類（一部で古生代二畳紀層もある）を主とする地層で盆地の東側に900～10 000mの山地を形成している。南部では特に火山性砕屑物の他に脊染山地を起源とし，米代川にそそぐ支流の形成した扇状地形が発達している。段丘は内藤（1968年）によって，高位段丘，中位段丘，低位段丘の三段丘に分けられる。十和田火山起源の軽石は中位面形成後，低位面が形成する前に流入したと考えられ，古いほうから高市軽石質火山灰（高市Pa と略す），鳥越Pa，串ケ野Pa，（いずれも火砕流堆積物），大湯降下火山灰が流入したものである。

新斗米遺跡は盆地のほぼ中央部に位置する。地形から，鳥越Pa によって形成された鳥越段丘面上に位置する。鳥越面は花輪盆地全域にわたって散在しており，とくに米代川，大湯川などの河川の開析をまぬがれた周辺部に多く分布する。縄文土器が多く発掘されるのもこの面上である。本地域の段丘は高度150m台で，盆地内では最も低い。

高市Pa

後述する鳥越Pa とともに十和田火山起源の火山灰層中では最大起模のもので，鳥越Pa とともに鳥越面を形成する。盆地内では高市西方～小坂に厚く分布する。白色～灰白色，無層理軽石質火山灰で，中に火山礫を含む。鳥越Pa とは角閃石を含まないことで区別されるが産状外観とも区別しにくい。青森県東部の大不動軽石流堆積物に対比される。

鳥越Pa

産状，外観ともに高市Pa に酷似し，全く区別がつかない。角閃石を含むことと，地層の上下関係から区別される。岩質は灰白色の火山灰，砂質火山灰，数cm～人頭大の軽石を含む。現在の花輪盆地の主要な段丘面である（内藤1966）鳥越面の分布に一致する。特に本層の厚く堆積する関上付近では水中淘汰を受けた二次堆積物が上部にのる。重鉱物組成上，角閃石を含むことで高市Pa と区別される。本層は青森県東部における八戸火山灰層（大地1964）に対比される。

申ケ野Pa

大湯Pl とともに，下位の各火山灰層の浸食面上に重なって堆積している。このことから降下火山灰層とも考えられる。岩質はくずれやすい黄褐色の軽石を主とし，粒径1cm～数mmの岩片，火山礫を多く含む。高市，鳥越Pa より岩質部が多くマグマの成分が，より塩基性になったものと考えられる。青森県東部では中川，その他によれば南部軽石層と一連のもので，年代は，8600±250年前と推定される。

大湯Pl　（軽石質降下火山灰）

十和田湖南東の外輪山壁では粒径数cm～20cm程度の軽石からなる数mの堆積物であるが盆地内ではストーンサークル面の黒色土をおおう降下火山灰で，色は黄～淡黄色，厚さ数cm，砂質火山灰である。浸食面にそって薄くはさまれていることから降下堆積物と推定される。

次に本地域の地形，地質の特徴を２，３ふれる。

本地域の中央を南北方向に米代川が流れ，この川に沿って右側にたてに長く段丘面が生じている。この面が鳥越段丘面で，現在畑地などに利用されており，沖積地の上の広大な平地形を形成している。館はこうした段丘面が沖積地にくちばし状に伸びた部分に数多くみられる。

すなわち南北方向に侵食をうけただけでなく，東西方向にマセ川などの支流によってうけた侵食によってこのようなくちばし状段丘が形成されたものと考えられる。北方の寺坂，申ケ野，雁府では，古い方から高市Pa，申ケ野Paという順に堆積した段丘面が形成されるが，新斗米では申ケ野Paは見い出されない，すなわち，鳥越Paの上に直接黒色土がのった地層を示す。鳥越Paの上部は褐色～黄褐色の火山灰，(いわゆるローム）であるが下部は写真にあるように，灰白色～白色の軽石，火山礫を多く含んだ層である。

大別すると以上の層からできているが，黒色土の下の黄褐色～褐色火山灰層は，黒色土中の水分によって鉄分などが下位の火山灰層にしみ込んだものと考えられ，申ケ野Paと似ているが，それより固結度が大きく，明らかに鳥越Paの変色したものである。厚さは１m程度である。そして，下の灰白色の軽石質火山灰と砂質火山灰の互層に漸移していく。

最後に，本地域の館，特有の凹地形（人為的に堀ったとみられる）の問題，土砂の運ばれた場所等の諸問題については，未解決のままである。今後の調査を待ちたい。

（鎌田健一）

第Ⅱ章　新斗米館の歴史的環境

新斗米館の歴史的背景については，今のところ拠るべき資料に乏しく，殆どこれを明らかにすることができない。

従来，『鹿角由来記』その他の類本に，「鹿角四十二館に待四十二人居候事」とある項のなかに，一，新斗米村，新斗米左近領知本名奈良，館有，と記載されていることが唯一の拠り所となってきた。しかし鹿角由来記そのものが寛文（1616～1672）以後の成立を考えられるのでこれを直ちに歴史的事実とはなし難いものがある。ただこの近世写本から云い得ることは，少くとも江戸初期の時点で，中世の鹿角にいわゆる四十二館が分布していたこと，新斗米館は四十二館の一つに数えられていたこと，館主は奈良氏の支族で村名の新斗米を名乗っていたこと，の伝承が人々に信じられていたという点である。

新斗米氏の本名奈良氏は，古くから安保・成田・秋元氏とともに鹿角四氏と称されてきた。『鹿角由来記』などに先立ち，この四氏の鹿角郡領知について記したものに，天文五（1536）年『津軽郡中名字』があり，「鹿角三百町ハ四人ノ国人也所謂奈良・成田・阿部・秋元四人ナリ。奈良ハ大湯・小坂・小平・小江刺四人ニ分ル」云々としている。

関東武士団である四氏が鹿角に所領を得たのは，どのような経緯によるものか，それぞれ，その庶流や被官を所領地へ下して経営に当たらせたのはいつだったのか大まかに鎌倉時代後半といわれながら，くわしくはわかっていない。安保・成田氏については文保二（1318）年関東下知状（『安保文書』），正中二（1325）年安保信阿譲状案，暦応二（1339）年成田基員譲状案（『八坂神社文書』）に鹿角郡所領のことがみえるが，奈良・秋元氏に関するこのような文書は見当たらない。したがって奈良氏の場合，奈良氏単独に所領を得たものか，あるいは成田氏の一族として鹿角へ下り，その後に独立的形態をとるに至ったものか，疑問の残るところである。

奈良氏の出身は，旧武蔵国幡羅郡成田邑より起った成田氏の出，『成田系図』によれば式部大輔助隆の成田太郎助広，二男は別府二郎行隆，三男は奈良三郎高長，四男は玉井四郎助実と名のり，代々成田四家と称された。この時期『吾妻鏡』承久の乱の条に鎌倉方として奈良兵衛尉・奈良五郎・奈良左近将監等の名が見えることで知られる。

鹿角奈良氏は，『鹿角由来記』によると惣領は大湯村を領し，一族分かれて新斗米村，小平村，小枝指村，草木村，瀬田石村，芦名沢村に住し，それぞれに館を有したという。新斗米館からみて，大湯館は北東約6000ｍを距て，その間に草木丸館，小枝指館，小平館が置かれ，小平館の西端下モ館は80ｍの至近距離で新斗米館に隣接している。

この奈良一族が史書に散見するのは，永禄（1558～1569）から天正（1573～1591）へかけて

の時期に集中する。

『鹿角由来集』によると「一，鹿角郡二て永祿元年六月秋田城之助殿親近季比内郡ノ主浅利殿ヲ頼鹿角郡之侍ニ見参被成度と被仰候而浅利殿御才覚ニ鹿角五人之侍共ニ見参ニ可参と同心申候浅利殿被仰候者御同心之上ハ互ニ両境ニ而見参可然と被仰候而則鹿角より大湯四良左衛門小平彦四郎柴内弥治郎花輪中務大里豊前土深井ヲ越候而秋田よりハ近季名代大高筑前方より小枝指小治郎ニ脇指引出物ニ被仕候」。「一，永祿八年七月頃鹿角侍ニ廻文ニ加判仕候仁大里備中花輪柴内相模守此三人安保衆と申候尾去之安保左衛門太夫小平大湯此者共ニ御座候」。「小枝指左馬助近季戦ニ津軽エ落申候信直公御召本知小枝指被下候事」。即ち永祿年間の秋田愛季による鹿角侵攻に際し，奈良一族は惣領大湯をはじめ小平，小枝指各氏が秋田方に与し，のち小枝指圧左馬助は南部方に転じて，一時津軽に落ちたが，戦後信直に召出返れ本領小枝指村を安堵されたと伝えられる。

天正期においても，大湯氏は再び秋田愛季と款を通じ，天正十三（1585）年と推定される年に愛季から大湯氏に宛てて「先ず似て，その郡より一勢力を与力申され候て然る可し，当方よりも，近々鉄砲射ち共，差越す可し」云々の書状が送られている（『青森県史』）。一方，天正十六（1588）年における南部方の大館城攻略軍のなかに，大湯四郎左衛門同五兵衛尉の名がみえる（『奥羽永慶軍記』）。天正十九（1591）年，大湯四郎左衛門昌次は大湯鹿倉城に籠城して大光寺正親の包囲軍と戦い，のち九戸城に入って奥州仕置軍に抗し，捕えられて九戸政実らと栗原郡三迫に詠された。『大湯氏系図』によれば，昌次の子次郎右衛門昌吉，彦右衛門昌致は共に津軽へ出奔し，また昌次の兄で大湯2000石の嫡系彦六（五兵衛ともいう）昌忠家は，その子多門之助正邦が正保（1644～1647）年中に夭折し絶家したと伝えられる。この経緯のなかに新斗米氏，小平氏らの名はあらわれないが，いずれ戦国興亡のなかで惣領家大湯氏と運命を共にしながら，鹿角を去ったのであろう。

これらの働きから，室町・織豊期において鹿角四氏とくに奈良・安保両氏は，天正十九年奥州仕置軍に制左されるまでは，鎌倉以来の鹿角の地士として，久しく繰り返された南部氏，浅利氏，秋田氏の鹿角侵略の手から，相伝の土地を保守すべし，時には和し，時には抗し，絶えず権謀術策の渦中にあったことを示しているように思われる。

新斗米館が，史書にその名を留めることのない小館であったにしても，相当の規模のもとに郭を営み，壕を堀り，塁を固め，防備堅固の跡を偲ばせているのは，かかる状況の然らてむるところと伝えよう。また，新斗米館から北に小平館，小枝指館と続き，南に高市館，柴内館，乳牛館と極めて近距離のうちに相接しているのは，鹿角四氏がその移住以来同族的結束をつよめながら，協力して四国の侵略勢力に相対してきたことを物語るものでなかろうか。

この度発掘調査の行われた主郭と推定されるⅠ郭の南側，最上位面から５ｍ下がった腰郭の

一角に八幡神社が鎮座している。その縁起は明らかでないが，おそらく館神として古くから祀られていたものと思われる。小平，小枝指，丸館の各村も館神として適当の位置に八幡神社が祀られており，瀬田石村の八幡神社は館跡からやや離れた村内に鎮守として祀られている。大湯館に八幡神社が残らないのは，大湯氏以後幾度か知行主の交替があったからであろう。

新斗米館の使用がいつに始まり，いつに終わったかは大きな課題であるが，鹿角四十二館の他の館と同様，まだ十分明らかではない。上限については，第一次的に古代チャシとして構築されたものが，第二次第三次利用として中世豪族の館に改造された可能性のあること，このことは特に舌状台地先端部を占める館の場合に考慮しなければならないことのように思われる。下限について，この度の調査において出土した陶磁器・鉄製品・中国銭や無銘銭の多くが，昭和三十年に行なわれた小枝指七ツ館発掘調査の際の出土品と年代的にほぼ共通しており，七ツ館の年代が室町・桃山時代頃まで降るものとされたこと（東京大学東洋文化研究所『館址』）と相俟って，新斗米館もまたこの時代まで使用されたことはほぼ間違いない。

天正二十（1592）年六月に書上げられた「南部大膳大夫分国之内諸城破却共書上之事」にみられる四十八カ城中破却三十六カ城のなかには鹿角の館名は見えず，存置十二城の内に毛馬内城と花輪城の二つがあげられている。いわゆる鹿角四十二館の大半は，それ以前に破却されていたのであろう。一方，『鹿角由来集』には「一，天正十九年辛卯九戸陣落居之時浅野弾正御家来内山助右衛門被仰付南部中館門ニ廻被申候時分長牛城先年桧山陳ニ而得勝利候由被仰付館ニ御座候」「一，慶長十一年夏桜庭安房守追而館崩御廻シ被成候先年内山助右衛門廻候時急用ニ付罷発リ相残所有之付安房被遺候（中略）鹿角毛馬内花輪城長中城三つ不門被指置候事」と記されているので，実際には鹿角における館の破却作業が，天正から慶長へと数次にわたって行なわれたことも想像できる。

（安村二郎）

第Ⅲ章　調　査　の　概　要

1．調査に至る経過

新斗米館跡の頂部は畑地として使用されていたが，南端部の斜面が急で畑作作業が困難であるということから，土地所有者は地盤を下げて耕作を容易にするとともに畑地面積の拡大を図り，土建業者に土取りを依頼，昭和54年２月末に着手した。

同年３月，これを市立花輪小学校校長安村二郎氏が発見，市教育委員会へ連絡した。市教育委員会では，ただちに土地所有者と協議を重ね，発掘調査を実施し記録保存することで協議が成立した。しかしながら調査員の確保等の問題で，昭和54年８月２日から13日までのわずか12日間の調査であり，土取り対象面積の1/20をも消化できなかった。

市教育委員会では遺跡の重要性から残存部の調査を計画，昭和55年８月18日から10月17日の２カ月の予定で第Ⅱ次発掘調査を実施し記録保存を図ることにした。

2．調査要項

1．遺跡名　　新斗米館跡

2．所在地　　秋田県鹿角市花輪字新斗米62番地

3．調査期間　　昭和55年８月18～昭和55年11月17日

4．発掘対象面積　3000㎡

5．発掘調査面積　1600㎡

6．調査主体者　鹿角市教育委員会

7．調査担当者　鹿角市教育委員会　社会教育課

8．調査参加者

調査指導員　富樫泰時（秋田県教育庁文化課　学芸主事）

調査員　　安村二郎（鹿角市立花輪小学校　校長）

大里勝蔵（秋田県立十和田高校　教諭）

鎌田健一（秋田県立十和田高校　教諭）

調査補助員　佐藤　樹（鹿角考古学研究会々員）

菊池　明（鹿角考古学研究会々員）

豊口育子（十和田高校社会科クラブＯＢ）

古川孝政（札幌商科大学生）

及川　昭（秋田大学生）

保坂二美子（秋田大学生）

佐々木郁子（秋田大学生）

佐々木真由美（秋田大学生）

作業員　佐藤英樹，佐藤フミエ，宮沢カヨ，柳沢ミエ，柳沢トシエ，柳沢テル，柳沢ヤス，柳沢光子，安保ヨシノ，苗代沢良子，三上トヨ，関　栄子，苗代沢ノブ，石井ヨシエ，柳沢泰子，美濃山スミ，宮沢イサエ，成田チギ，柳沢愛子，柳沢トミ

9．社会教育課

課長　晴沢　久

〃　阿部雄治（昭和55年12月退職）

文化財係長　柳沢悦郎（庶務担当）

柳沢兌衛（昭和55年7月市史編さん事務局へ）

主事　秋元信夫（調査担当）

臨職　目時キミ子

10．調査協力機関　秋田県教育委員会，鹿角市農林課，鹿角市土地改良課，鹿角市建設課，

3．調査方法

調査対象区は従来から本館と考えられていたところである。このため，館に伴う遺構の検出及び防禦施設の解明に主眼がおかれた。

グリッドの設定は，地形を考慮してN－79°－Wを基準線とし，10m四方を1単位とした。さらに南北方向（北から南へ）をアルファベット，東西方向（西から東へ）を算用数字とし，アルファベットと算用数字の組み合わせで各々のグリッドを呼ぶことにした。

発掘の方法は分層発掘を主体にグリッド方式とトレンチ方式を併用した。遺構内遺物は，地点の図化，レベル実測，写真撮影の後取り上げた。

遺構等の実測は簡易遣り方測量を用い，遺構は1/20，カマド及び微細図は1/10の縮尺で図化した。

調査は東側から進めたが，約半分ほどで予定調査期日の大半を使いはたしたため，残存部中央（Dライン）に4m幅のトレンチを設定，遺構の確認に努めた。また，Ⅰ郭とⅡ郭間に同幅のトレンチを設け，空掘の土層観察及び遺物の出土状況を観察した。

4．調査経過

8月18日から3日間，器材運搬及び休息所の製作等環境整備を行なった。8月21日より東側から草刈りを開始，土取りにより遺構が確認されていた部分の粗掘も併行して行なった。発掘区は原野化しており，草は1mの高さにも達し，草刈りには2週間の日数を要した。草刈り後ただちにグリッド設定し，東側から粗掘りを継続した。この間，調査補助員を中心に東側から遺構の精査，実測等を実施したが，多数の遺構に追いつかず，9月16日から全員で遺構の精査，実測を行なった。9月24日から月末にかけ，Ⅰ郭，Ⅱ郭間の空堀に設定した幅4mのトレンチ

掘りを実施した。トレンチ内からの出土遺物はなく，土層の記録をし，空掘りの調査を打ちきった。10月に入り，確認された遺構数は30を越え，10人前後での調査の限界を感じ初めた。10月27日，調査費が底をつき作業継続の危機に至る。調査は全体の半分にも達しておらないことから調査継続を調査員が主張，協議の結果，調査員・補助員で調査を継続することになった。11月に入り，雪の中で遺構の精査，実測を実施，11月中旬に至り，全掘を断念，未掘区中央に４ｍのトレンチを設定，遺構確認を行なうこととした。11月25日，調査終了を決定，11月26日休息所の解体，器材の運搬を行ない３カ月の調査を終了した。

（秋元信夫）

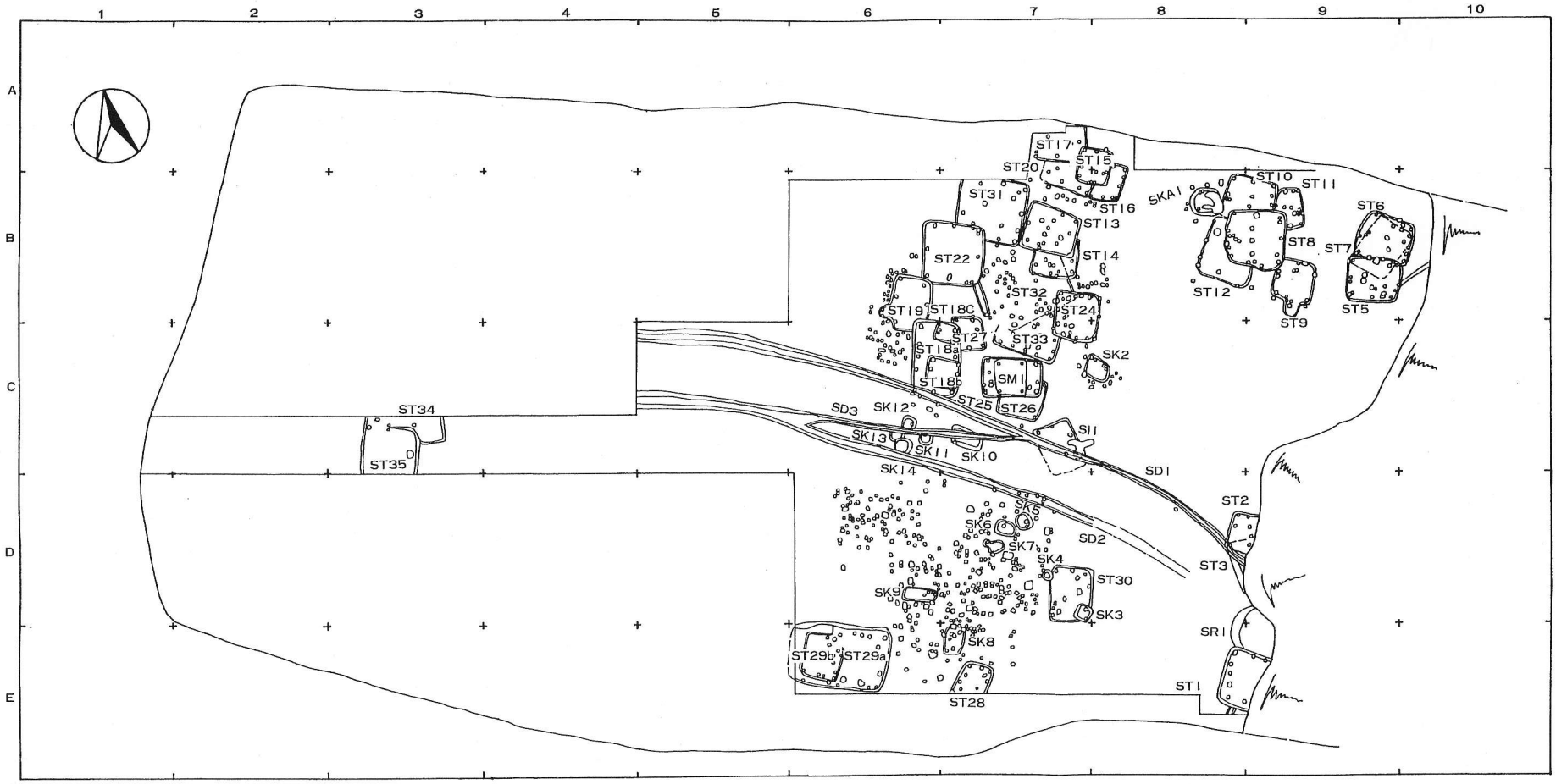

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
A
B
C
D
E
ST17
ST15
ST20
ST31
ST16
ST13
ST14
ST22
ST32
ST24
ST19
ST18c
ST27
ST33
ST18a
ST18b
SM1
ST25
ST26
SK2
SD3
SK12
SK13
SK11
SK10
SK14
SI1
SD1
SD2
SK5
SK6
SK7
SK4
ST30
SK3
SK9
SK8
ST29b
ST29a
ST28
ST1
SR1
ST3
ST2
ST34
ST35
SKA1
ST10
ST11
ST8
ST7
ST6
ST12
ST9
ST5
0
20m

図4．遺 構 配 置 図

第Ⅳ章　検　出　遺　構

発掘区内において検出された遺構は古代の竪穴住居跡１軒，カマド遺構１基，中世の竪穴遺構35基，円形竪穴遺構１基，土室状遺構１基，柱穴（堀立柱建物跡と思われる）300 以上，溝状遺構３条及び土坑13基である。

竪穴遺構は，その用途・性格等の定説はなく，従来，住居，倉庫，簡易宿舎（臨時的住居）などと考えられてきたものである。本書では方形の竪穴で柱穴を有するものを全て竪穴遺構として述べる。また土室状遺構は，方形で柱穴を有しているという点では竪穴遺構に含まれるが，堀込みが非常に深い事や底面がやや末広がりになる事等差異がみられる事から区別した。カマド遺構とは径1.8ｍ，深18cmの円形の竪穴の東壁側にカマドを有するものである。

これらの遺構は（図４）のような配置であり，郭を二分するように東西に走る二条の溝の北側には，大小の竪穴遺構が重複し構築されている。また溝のすぐ南側には数軒の堀立柱建物跡を形成すると思われる300以上の柱穴があり，最南端にも数基の竪穴遺構が検出された。

１．古代の遺構

第１号竪穴住居跡（ＳＩ１）　（図５・６）

〈遺構の位置と確認〉　発掘区ほぼ中央（Ｃ，Ｄ－７グリッド）に位置し，第１，４号溝と重複関係にあるが，１号溝より古く，４号溝より新しい。

〈形態〉　(3.4) ×2.6ｍの方形を呈する（南壁側は中央ベルトのため未発掘）。主軸方向はＮ－71°－Ｅである。

〈壁・床〉　壁はゆるやかな立ち上がりを呈し，壁高は東壁14.6cm，西壁15.7cm，北壁11.4cmである。床面は木の根による攪乱のため若干凹凸があり，床中央部を第１号溝により破壊されている。

〈柱穴（ピット）〉５個のピットを確認した。床面の攪乱及び南壁側未発掘のため全貌は明らかでない。

〈覆土〉　５層に区分した。自然堆積と考えられる。

〈カマド〉　東壁中央より南壁寄りに位置する。保存状態は良くなく，右袖部は第１号溝により，その大部分を消失している。袖部は粘土主体に構築されている。煙道部は90×32cmの堀り方が検出されたのみである。燃焼部は良く焼けており，長期の使用が考えられる。

〈出土遺物〉　カマド及びカマド付近より土師器甕の破片21点，自然石３点が出土した。

出土遺物から，本遺構は平安時代中～末期の住居跡と考えられる。

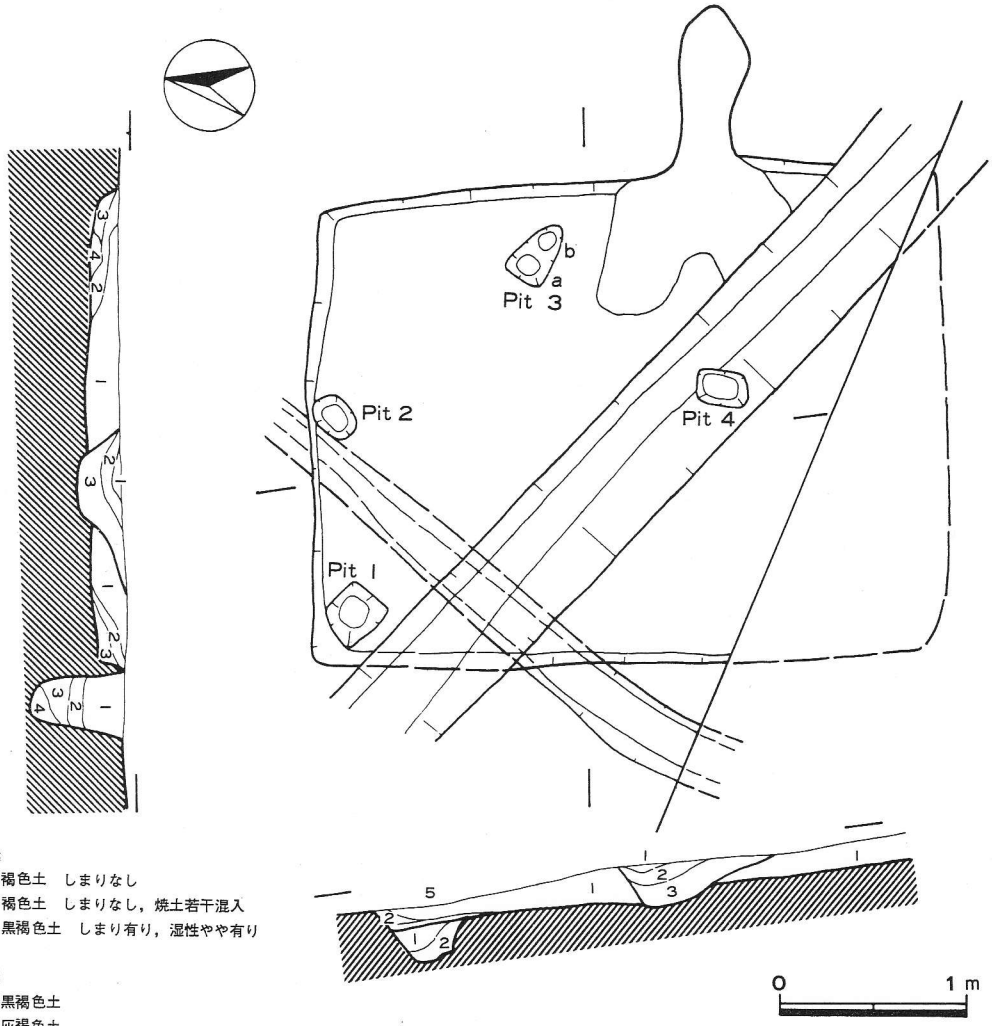


図５．第１号竪穴住居跡

１号溝

１層　褐色土　しまりなし
２層　褐色土　しまりなし，焼土若干混入
３層　黒褐色土　しまり有り，湿性やや有り

４号溝

１層　黒褐色土
２層　灰褐色土
３層　淡黄褐色土
４層　黒褐色土

１号竪穴住居跡

１層　褐色土　　ローム粒，小礫混入
２層　黒褐色土
３層　淡褐色土　ローム粒混入
４層　灰色粘土　粘性，しまり有り，焼土若干混入
５層　灰褐色土　炭化物混入

５．第１号竪穴住居跡

第１号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：m）

Pit No.	1	2	3 a　3 b	4
平面形	方　形	楕円形	不　整　形	方　形
規　模	30×26	26×20	36　×　22	28×20
深　さ	15.8	24.5	45.5　47.3	42.7

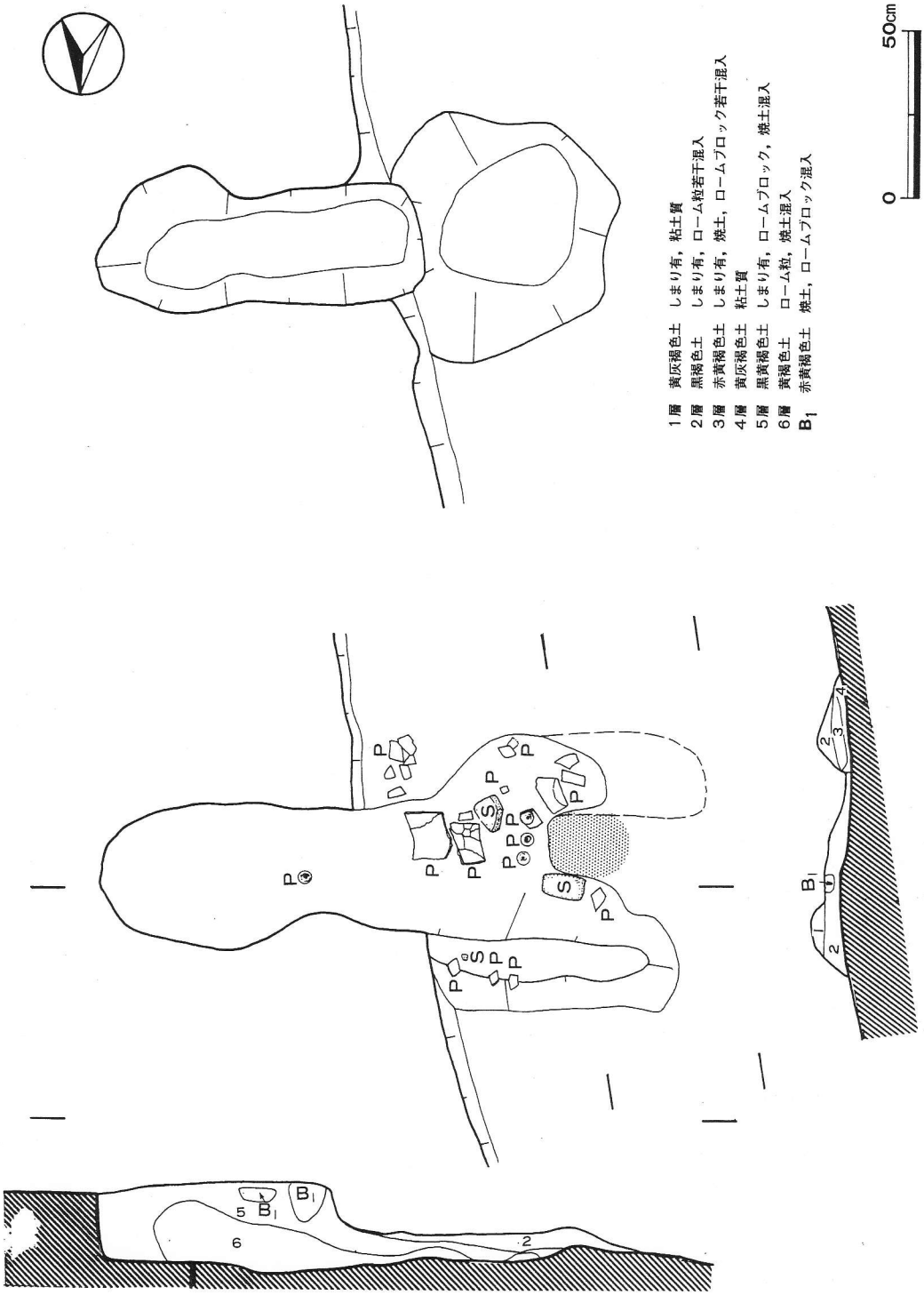


図6．第1号竪穴住居跡カマド

第１号カマド遺構（ＳＫＡＩ）　（図７）

〈遺構の位置と確認〉　発掘区北東部（Ｂ－８グリッド）に位置し，第８～12号竪穴遺構が近接している。

〈形態〉　径1.8ｍの円形を呈する竪穴の東壁側にカマドが構築されている。円形竪穴の面積は1.5㎡である。

〈壁・床〉　壁はなだらかな立上がりを呈し，床も中央部にいくにつれ深くなり全体として鍋底状の断面を呈する。中央部で18cmの深さである。

〈柱穴（ピット）〉遺構内に４個，遺構外近傍に９個のピットが検出された。方形または偶丸方形のピットがほとんどである。

〈覆土〉　３層に区分した。自然堆積を呈する。

〈カマド〉　東壁側に位置する。保存状態は良くなく，遺構の東側半分には袖部のくずれたものと思われる粘土が堆積している。煙道部は短かく，やや急な立ち上がりを呈する。

〈出土遺物〉　カマド内外より13片の土師器片及び自然石４点が出土した。土師器はいずれも甕の小破片である。

本遺構は小規模であり，平面プランも円形であるという事から住居跡とは考えられない。カマドを有し，使用の痕跡があることから炊事場的遺構と考えられる。出土遺物が土師器のみであることから，平安時代の遺構と考えられる。

第１号カマド遺構ピット一覧表（単位cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
平面形	方　形	楕円形	方　形	方　形	方　形	方　形	方　形	不整方形	隅丸方形	不整形
規　模	21×21	11× 6	21×19	18×15	15×13	22×21	21×21	15×13	17×15	16×14
深　さ	23.7	5.0	33.8	8.4	16.9	26.2	47.6	23.5	7.4	10.3
ピット番号	11	12	13							
平面形	隅丸方形	方　形	不整方形							
規　模	19×18	22×20	30×28							
深　さ	23.8	12.5	46.8							

（秋元信夫）

２．中世の遺構

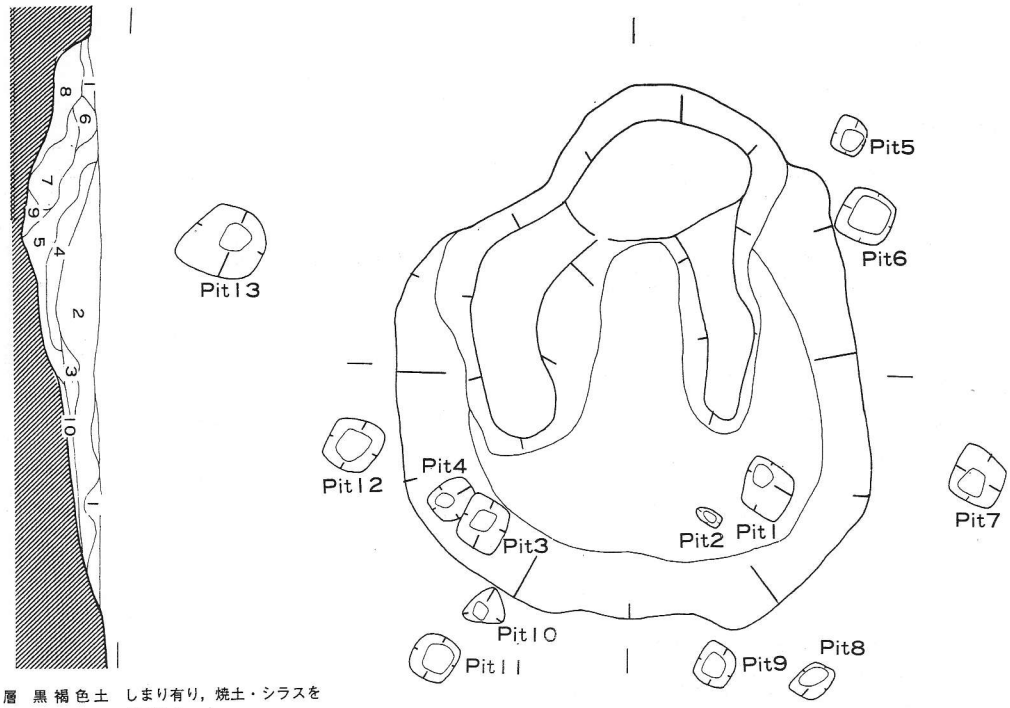
(1)　竪穴遺構

第１号竪穴遺構（ＳＴ１）　（図８）

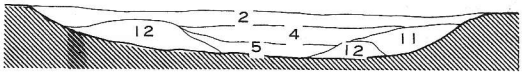
〈遺構の位置と確認〉　発掘区最南東端にあたるＥ－８，９グリッドに位置する。第１号円形竪穴遺構と重複関係にあるが，本遺構の方が新しい。東壁側は土取りにより消失している。

〈形態〉1.81ｍを一辺とする方形を呈する。

〈壁・床〉　壁はほぼ垂直な立ち上りを呈し，壁高は西壁38.1cm，南壁41.3cm，北壁46.9cmである。東壁は土取りのため不明である。床は平担で堅くしまっている。



1層　黒褐色土　しまり有り，焼土・シラスを若干混入
2層　灰褐色土　しまり有り，粘土を多量混入
3層　暗灰褐色土　ややしまり有り，浮石及びローム粒若干混入
4層　黒灰褐色土　しまり有り，浮石及びローム粒若干混入
5層　灰褐色土　ややしまり有り，粘土及び焼土混入
6層　橙褐色土　しまり大，ローム粒及び焼土混入
7層　赤褐色焼土　しまり大
8層　黄褐色土　しまり有り，浮石を若干混入
9層　灰白色土　砂質



10層　黄褐色土　ローム粒を多量混入
11層　灰白色土　粘土を多量混入，焼土若干混入
12層　灰白色粘土　しまり有り

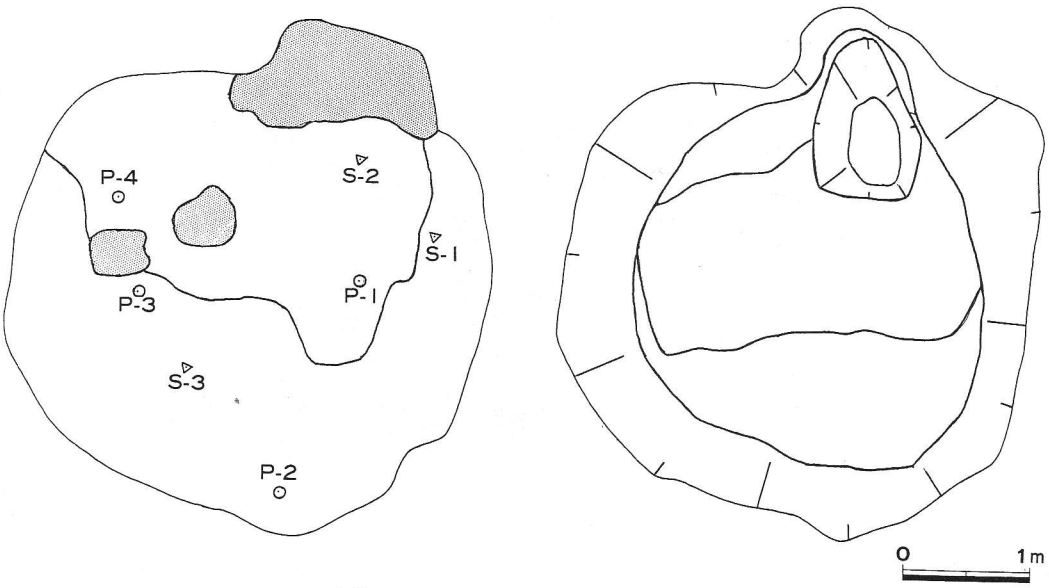
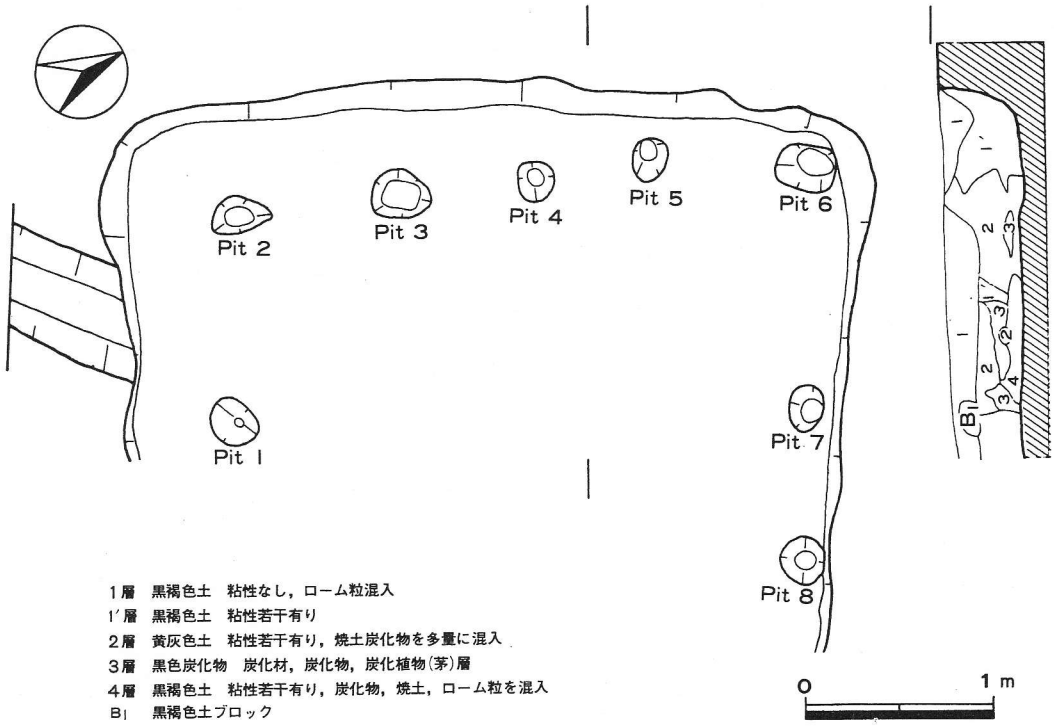


図7．カマド遺構


Pit 1
Pit 2
Pit 3
Pit 4
Pit 5
Pit 6
Pit 7
Pit 8
1層　黒褐色土　粘性なし，ローム粒混入
1′層　黒褐色土　粘性若干有り
2層　黄灰色土　粘性若干有り，焼土炭化物を多量に混入
3層　黒色炭化物　炭化材，炭化物，炭化植物(茅)層
4層　黒褐色土　粘性若干有り，炭化物，焼土，ローム粒を混入
B1　黒褐色土ブロック
0
1 m

S-1
S-2
S-3
S-4

図8．第1号竪穴遺構

〈付属施設〉　南壁西寄りより南西方向に幅52cm，深さ約42cmの溝がのびている。

〈柱穴（ピット）〉　ピットは８個検出された。いずれも壁際であり，西壁際には等間隔に５個のピットが配置している。

〈覆土〉　５層に区分した。１層は自然堆積，２～４層は人為堆積である。３層は炭化物層であり，多量の炭化材，炭化したカヤが混入し，２層には多量の橙色焼土を混入している。

〈出土遺物〉　自然石４点が出土したのみである。

本遺構は焼失家屋であり，覆土堆積状態から土をかけることにより火を消した事が予想できる。

第１号竪穴遺構ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8
平面形	楕円形	楕円形	楕円形	円　形	円　形	楕円形	楕円形	円　形
規　模	26×24	34×20	32×24	20×20	22×18	32×22	28×18	24×24
深　さ	66.8	58.7	32.3	72.3	44.3	70.6	50.9	52.5

第２号竪穴遺構（ＳＴ２）　（図９）

〈遺構の位置と確認〉　発掘区最東端（Ｄ－８，９グリッド）Ⅲ層（地山）で確認された。第３号竪穴遺構，第１号溝と重複関係にあり，本遺構は第３号竪穴遺構より新しく，第１号溝より古い。東壁側は土取りにより消失している。

〈形態〉　2.73ｍを一辺とする方形を呈する。

〈壁・床〉　壁はほぼ垂直な立ち上がりを呈し，壁高は西壁12.9cm，南壁17.5cm，北壁15.0cmである。東壁は土取りのため不明である。床はほぼ平担で堅くしまっている。

〈付属施設〉　なし

〈柱穴（ピット）〉　７個のピットが検出された。西壁際に等間隔に３個のピットが配置されている。

〈覆土〉　３層に区分した。自然堆積を呈する。

〈出土遺物〉　１層より鉄製品（図39－３）１点，砥石（図41－３）１点，自然石１点，床面より20cm大の自然石３点を出土した。

第２号竪穴遺構ピット一覧表（単位cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7
平面形	不整楕円形	不整楕円形	方　形	方　形	方　形	不整方形	不整楕円形
規　模	19×13	13× 9	19×17	23×20	22×20	23×19	22×17
深　さ	29.2	18.3	19.3	12.0	16.0	36.3	33.0

第３号竪穴遺構（ＳＴ３）　（図９）

〈遺構の位置と確認〉　発掘区最東端（Ｄ－８，９グリッド）に位置する。第２号竪穴遺構，第１号溝と重複関係にあり，本遺構が最も古い。大部分が土取りにより消失しており，西壁の一部が残存するだけで全貌はほとんどつかめない。

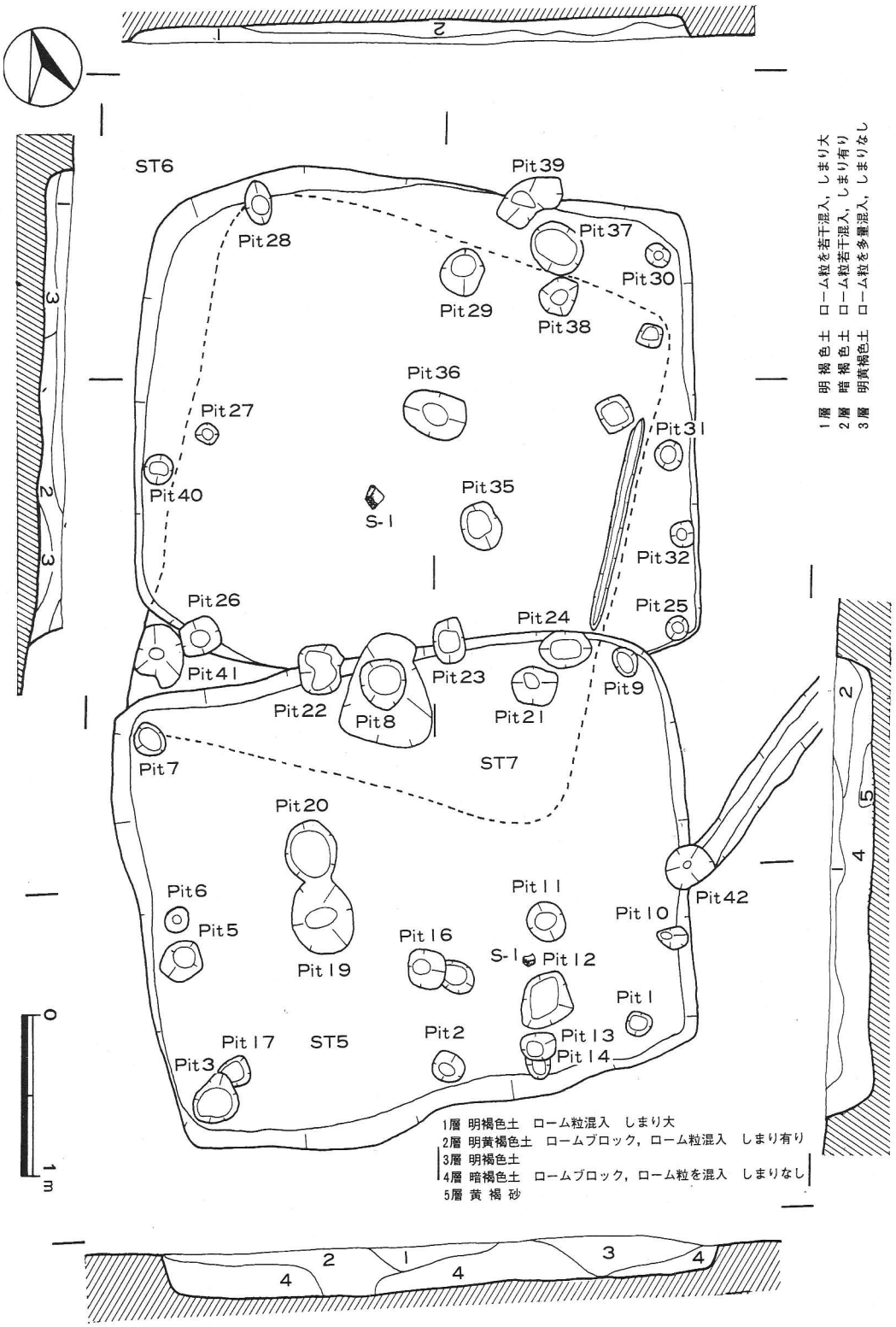


図10. 第5・6・7号竪穴遺構

第6号竪穴遺構（ＳＴ６）　（図10）

〈遺構の位置と確認〉　発掘区北東端であるＢ－９，10グリッドに位置する。第５，７号竪穴遺構と重複関係にあり，本遺構は第５号竪穴遺構より古く，第７号竪穴遺構より新しい。

〈形態〉　3.51×3.15ｍの方形を呈する。主軸方向はＮ－63°－Ｗで，面積は9.48㎡である。

〈壁・床〉　西壁はやや緩やかな立ち上がりを呈し，他の３壁はほぼ垂直な立ち上がりを呈する。壁高は東壁12.5cm，西壁6.0cm，南壁16.1cm，北壁11.0cmである。床は西側で西高東低の緩やかな傾斜を呈し，他はほぼ平担である。

〈付属施設〉　なし

〈柱穴（ピット）〉　本遺構に付随すると思われるピットは９個検出された。いずれも壁際に位置する。Pit 25，31，30，23，26，40などの壁隅及びその中間に位置するピットが主なる柱穴と思われる。西壁側は攪乱のため規則的な柱列が確認できなかった。

〈覆土〉　３層に区分した。自然堆積を呈する。

〈出土遺物〉　床面中央より砥石（図42－３）１点が出土した。

第7号竪穴遺構（ＳＴ７）　（図10）

〈遺構の位置と確認〉　発掘区最北東端であるＢ－９，10グリッドに位置する。第５，６号竪穴遺構と重複関係にあり，本遺構が最も古い。

〈形態〉　3.40×2.82ｍの方形を呈する。主軸方向はＮ－42°－Ｅで，面積は9.56㎡である。

〈壁・床〉　ほとんどの壁は第５，６号竪穴遺構により破壊されており，北西壁の一部が残存するのみである。床は第６号竪穴遺構と同レベルである。南西壁側床面は第５号竪穴遺構により破壊されている。

〈付属施設〉　南東壁に一部周溝がみられる。幅７～８cm，深さ２～３cm，長さ137cmを計る。

〈柱穴（ピット）〉　本遺構に付随するピットとしてはPit 41，27，28，29，38，33，34，21，22，41が考えられる。

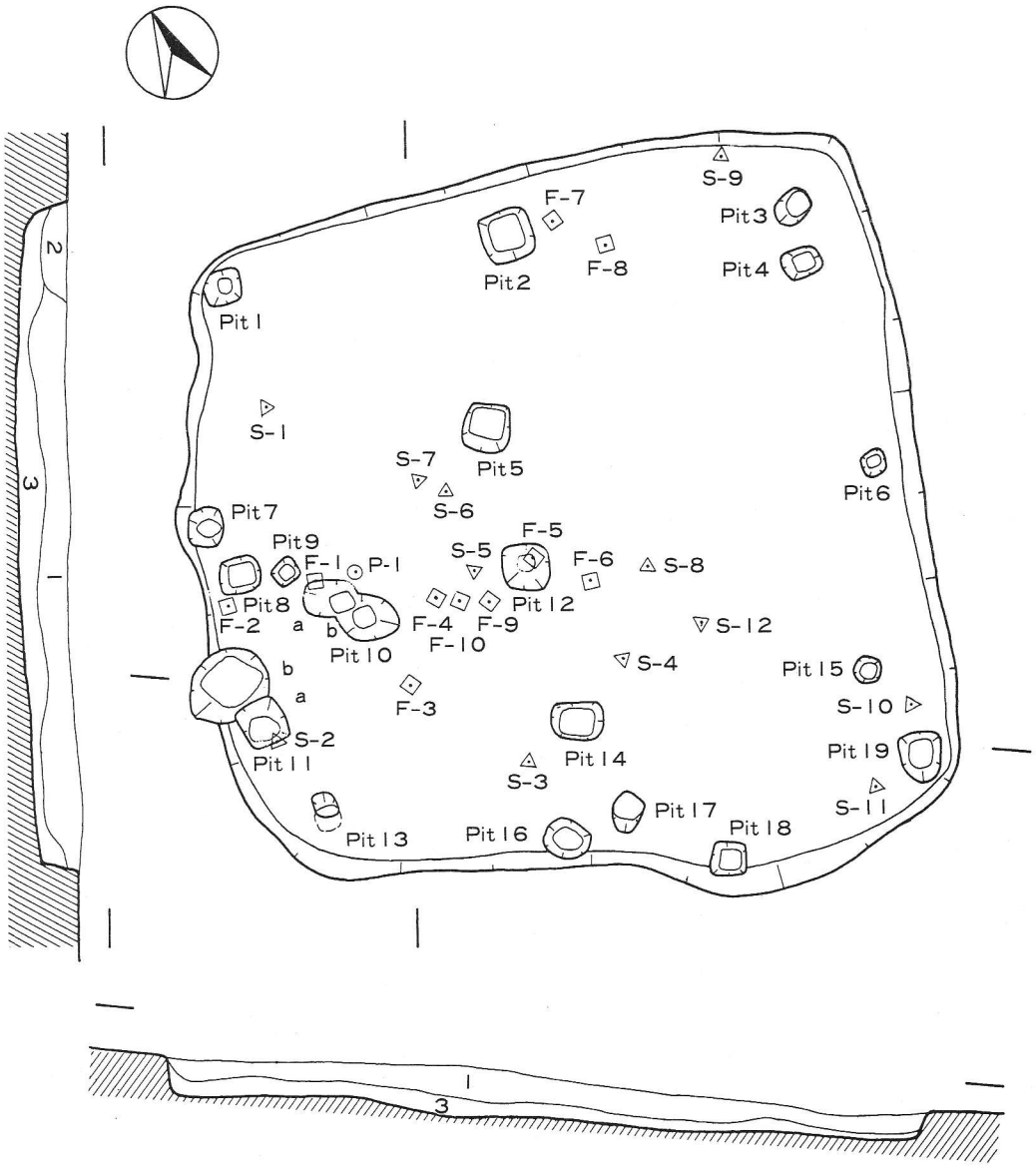
〈出土遺物〉　なし

第8号竪穴遺構（ＳＴ８）　（図11）

〈遺構の位置と確認〉　Ｂ－８，９グリッドに位置する。第９，10，11，12号竪穴遺構と重複関係にあり，本遺構が最も新しい。本遺構東側に第５～７号竪穴遺構がある。

〈形態〉　4.06×3.86ｍの方形を呈する。主軸方向はＮ－26°－Ｅで，面積は13.20ｍである。

〈壁・床〉　壁はほぼ垂直な立ち上がりを呈し，壁高は東壁31.0cm，西壁11.9cm，南壁20.4cm北壁24.4cmである。床はほぼ平担で堅くしまっている。



1層　黒褐色土　ややしまり有り，ローム粒混入
2層　黒黄褐色土　硬くしまり大，ロームブロック混入
3層　黒 褐 色 土　1層より黒い，ややしまり有り，ローム粒若干混入

0　1m

図11．第8号竪穴遺構

〈付属施設〉　なし

〈柱穴（ピット）〉　壁隅及び壁際中間のピットが主なる柱穴と考えられる。

〈覆土〉　３層に区分した。自然堆積を呈する。

〈出土遺物〉　床面より褐釉陶磁器片１点，刀子（図37－Ｂ），ノミ状鉄製品（図38－17），鍵（図38－14），薬匙（図40－２），針（図38－13），砥石（図42－２）をそれぞれ１点ずつ出土した。また床直上からは，美濃皿（図35－15）１点，台石１点を出土した。第１層からは鉄釘（図38－７）１点，無文銭１点，鉄滓３点の出土があった。

第８～12号竪穴遺構ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10 a	10 b	11 a
平面形	方　形	方　形	不整方形	方　形	方　形	円　形	方　形	方　形	方　形	不整円形	不整円形	方　形
規　模	18×18	28×26	20×12	20×16	26×26	12×12	18×18	22×18	14×14	26×24	30×26	26×24
深　さ	54.3	75.9	63.8	45.7	57.2	37.3	49.4	57.4	27.9	52.9	54.9	52.2
Pit No.	11 b	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
平面形	円　形	方　形	円　形	方　形	円　形	円　形	円　形	方　形	方　形	不整楕円形	不整円形	方　形
規　模	42×38	26×26	20×12	28×22	14×12	24×20	22×16	18×18	28×22	34×20	28×24	26×24
深　さ	24.1	64.3	56.8	57.7	35.7	62.0	62.2	29.9	52.0	59.7	25.0	15.4
Pit No.	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34
平面形	方　形	方　形	方　形	方　形	方　形	不整楕円形	円　形	方　形	方　形	方　形	方　形	楕円形
規　模	42×42	34×30	26×20	24×24	26×26	24×14	20×18	26×25	30×25	23×22	20×17	19×14
深　さ		63.4	30.5	19.6	52.5	9.3	26.9	24.7	19.5	70.4	29.5	11.8
Pit No.	35 a	35 b	36	37	38	39	40	41	42 a	42 b	43	44
平面形	方　形	方　形	方　形	不整方形	方　形	円　形	方　形	不整円形	方　形	方　形	円　形	方　形
規　模	18×18	21×18	17×16	59×34	18×15	35×30	35×31	26×22	15×14	15×14	36×34	26×21
深　さ	13.4	16.0	12.2	33.8		22.8	28.7	41.4	32.8	10.7	73.7	46.0
Pit No.	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56
平面形	方　形	方　形	方　形	楕円形	方　形	不整方形	方　形	不整楕円形	方　形	楕円形	方　形	不整楕円形
規　模	25×23	21×19	24×24	21×15	13×12	25×20	20×20	50×30	18×18	33×28	20×13	30×17
深　さ	43.6	57.2	61.8	25.2	13.6	72.3	19.6		31.5	29.8	22.3	28.4
Pit No.	57	58	59	60	61	62						
平面形	円　形	不整楕円形	方　形	不方整円形	方　形	不整円形						
規　模	16×10	47×30	29×28	19×13	19×17	24×19						
深　さ	25.2	54.1	65.6	21.1	19.4	35.2						

第９号竪穴遺構（ＳＴ９）　（図12）

〈遺構の位置と確認〉　Ｂ－８，９グリッドに位置する。第８号竪穴遺構と重複関係にあり，本遺構が古い。

〈形態〉　2.76×2.67ｍの方形を呈する。主軸方向はＮ－28°－Ｅで，面積は6.76㎡である。

〈壁・床〉　壁はほぼ垂直な立ち上がりを呈し，壁高は東壁37.4cm，西壁36.7cm，南壁32.7cm北壁32.8cmである。床はほぼ平担で堅くしまっている。

〈付属施設〉　南壁東側に緩やかな傾斜をもつ1.04×0.88ｍの出入口と思われる張出し部が検出された。

〈柱穴（ピット）〉　本遺構に付随するピットはPit 19，28～41の16個である。Pit 40，41は本遺構近傍から検出されたもので，南壁両端にそれぞれ近接している。

〈覆土〉　4層に区分した。人為堆積と思われる。

〈出土遺物〉　自然石1点のみの出土である。

第10号竪穴遺構（ＳＴ10）　（図13）

〈遺構の位置と確認〉　Ｂ－８，９グリッドに位置する。第８，11号竪穴遺構と重複関係にあり，本遺構は第８号竪穴遺構より古く，第11号竪穴遺構より新しい。

〈形態〉　(3.40) ×3.32ｍの方形を呈する。主軸方向はＮ－26°－Ｅである。

〈壁・床〉　壁はほぼ垂直な立ち上りを呈し，壁高は東壁5.0㎝，西壁6.5㎝，北壁10.5㎝である。床はほぼ平担である。

〈付属施設〉　なし

〈柱穴（ピット）〉　壁隅及び壁中央が主なる柱穴と考えられる。また床中央に２個の方形のピット（Pit 45，46）を検出した。

〈覆土〉　黒褐色土１層である。

〈出土遺物〉　床面より銅製品（図40－４）１点を出土した。

第11号竪穴遺構（ＳＴ11）　（図13）

〈遺構の位置と確認〉　Ｂ－８，９グリッドに位置する。第８，12号竪穴遺構と重複関係にあり，本遺構は12号竪穴遺構より新しく，８号竪穴遺構より古い。

〈形態〉　長軸2.52ｍとする方形を呈する。主軸方向はＮ－11°－Ｗである。

〈壁・床〉　壁はほぼ垂直な立ち上りを呈し，壁高は東壁13.0㎝，西壁6.1㎝，南壁13.4㎝，北壁4.8㎝である。床は若干凹凸がある。

〈付属施設〉　なし

〈柱穴（ピット）〉　本遺構に付随するピットはPit ４，50，53～62の12個と思われる。

〈覆土〉　褐色土１層である。

〈出土遺物〉　床面より鉄製品（図37－12）１点が出土した。

第12号竪穴遺構（ＳＴ12）　（図12）

〈遺構の位置と確認〉　Ｂ－８，９グリッドに位置する。第８号竪穴遺構と重複関係にあり，本遺構が古い。

〈形態〉　(3.42) ×3.28ｍの方形を呈する。主軸方向はＮ－30°－Ｅである。

〈壁・床〉　壁はやや緩らかな立ち上がりを呈し，壁高は東壁19.7㎝，西壁8.6㎝，南壁9.1㎝である。床はやや凹凸があり，しまりが弱い。

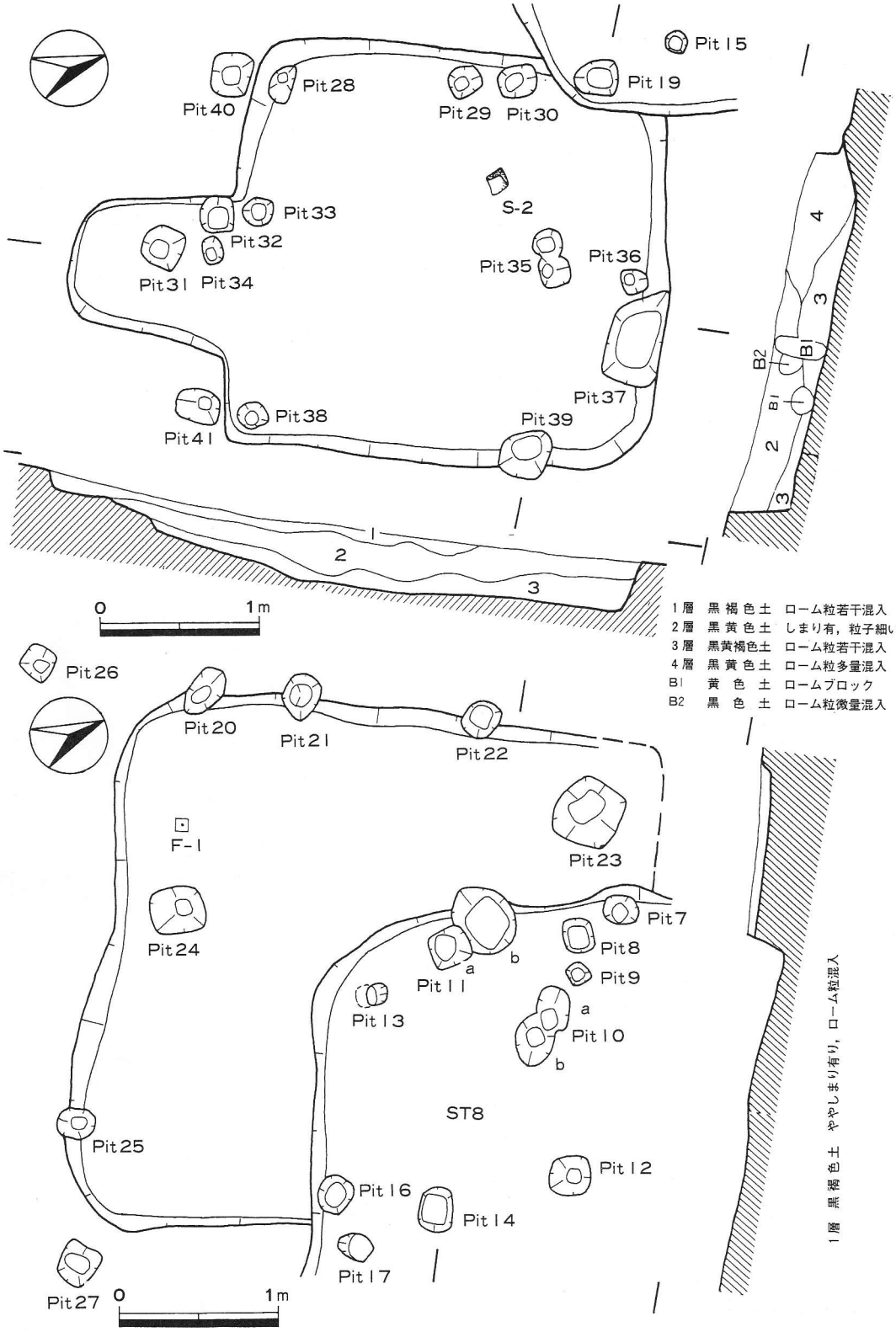


図12．第9・12号竪穴遺構

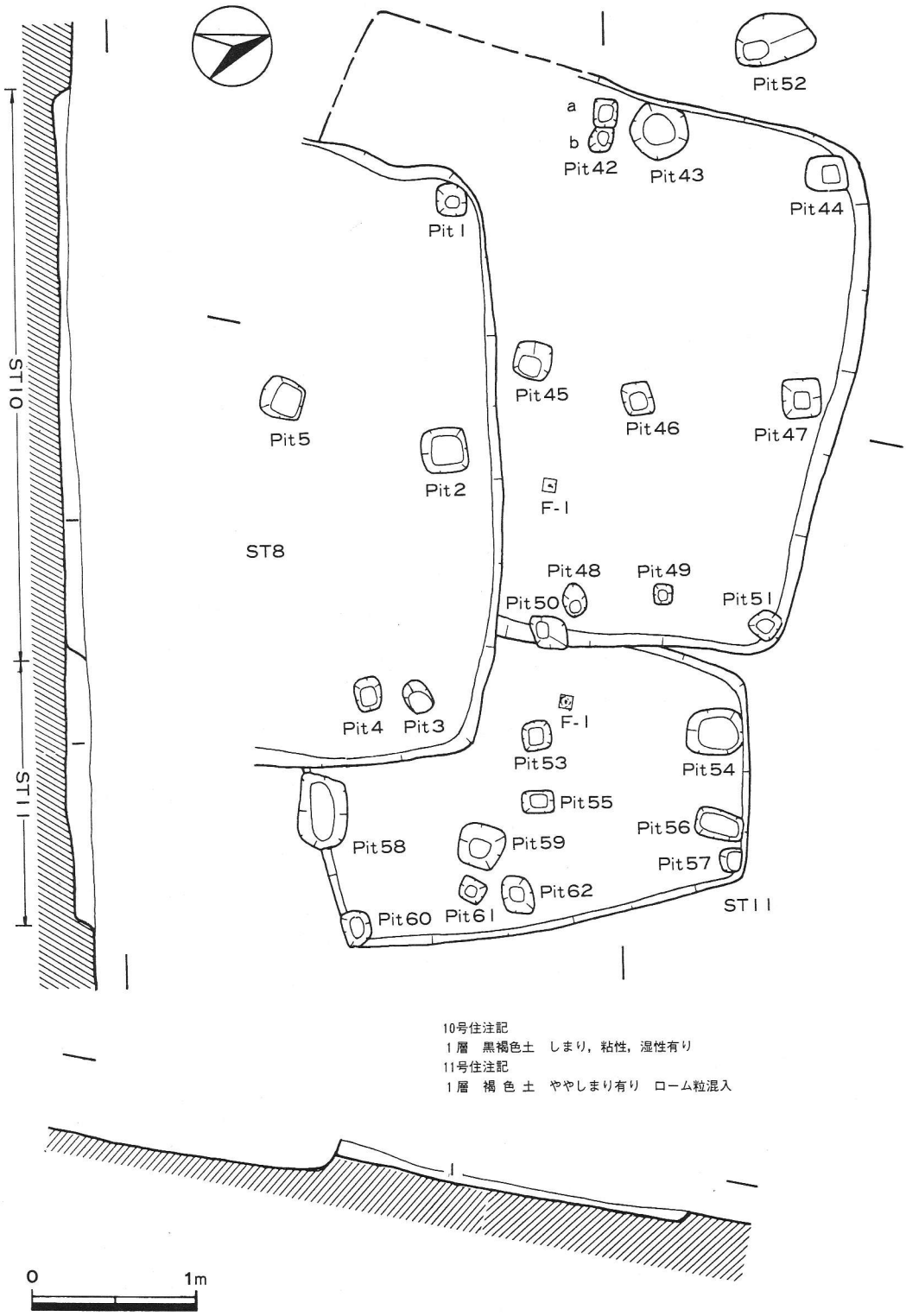


図13. 第10・11号竪穴遺構

〈付属施設〉　なし

〈柱穴（ピット）〉　本遺構に付随すると思われるピットはPit 20～25，8～10，12，14である。これらのピットは四壁際から検出された。

〈覆土〉　黒褐色土１層である。

〈出土遺物〉　南壁寄り床面より鉄製品（図37―11）１点を出土した。また覆土中より自然石２点を出土した。

第13号竪穴遺構（ＳＴ13）　（図14）

〈遺構の位置と確認〉　Ｂ―７グリッドに位置する。第14，32号竪穴遺構と重複開係にあり，本遺構が最も新しい。本遺構西側には第31号竪穴遺構，北側には第15～17，20号竪穴遺構が近接している。

〈形態〉　3.63×3.04ｍの方形を呈する。主軸方向はＮ―59°―Ｗで，面積10.02㎡である。

〈壁・床〉　壁はほぼ垂直な立ち上がりを呈し，壁高は東壁35.0cm，西壁28.8cm，南壁33.9cm北壁33.5cmである。床はやや平担で，中央から東壁にかけて堅くしまっている。

〈付属施設〉　なし

〈柱穴（ピット）〉本遺構内から計14個のピットが検出されたが，第14，32号竪穴遺構に伴うピットを内在している。Pit ８，10は第14号竪穴遺構に伴うピットと考えられる。

〈覆土〉　４層に区分した。人為堆積と思われる。

〈出土遺物〉　床面より台石２点，１層より鉄鏃（図37―２）１点を出土した。

第13，14号竪穴遺構ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
平面形	楕円形	不整楕円形	方　形	方　形	楕円形	不整方形	楕円形	不整方形	方　形	方　形	楕円形	楕円形
規　模	15×13	18×15	21×21	23×23	19×16	25×23	16×14	36×34	20×20	33×28	25×22	19×14
深　さ	28.2	23.9	15.6	20.8	47.9	45.3	16.9	21.5	12.7	46.6		17.2
Pit No.	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
平面形	楕円形	方　形	不整楕円形	不整楕円形	方　形	楕円形	方　形	方　形	不整楕円形	楕円形	楕円形	方　形
規　模	21×18	30×25	17×16	17×13	21×21	18×13	23×22	18×14	26×21	34×22	30×18	31×22
深　さ	21.3	21.3	26.6	22.8	15.2	17.8	16.6	6.2	9.5	9.5	15.2	14.6

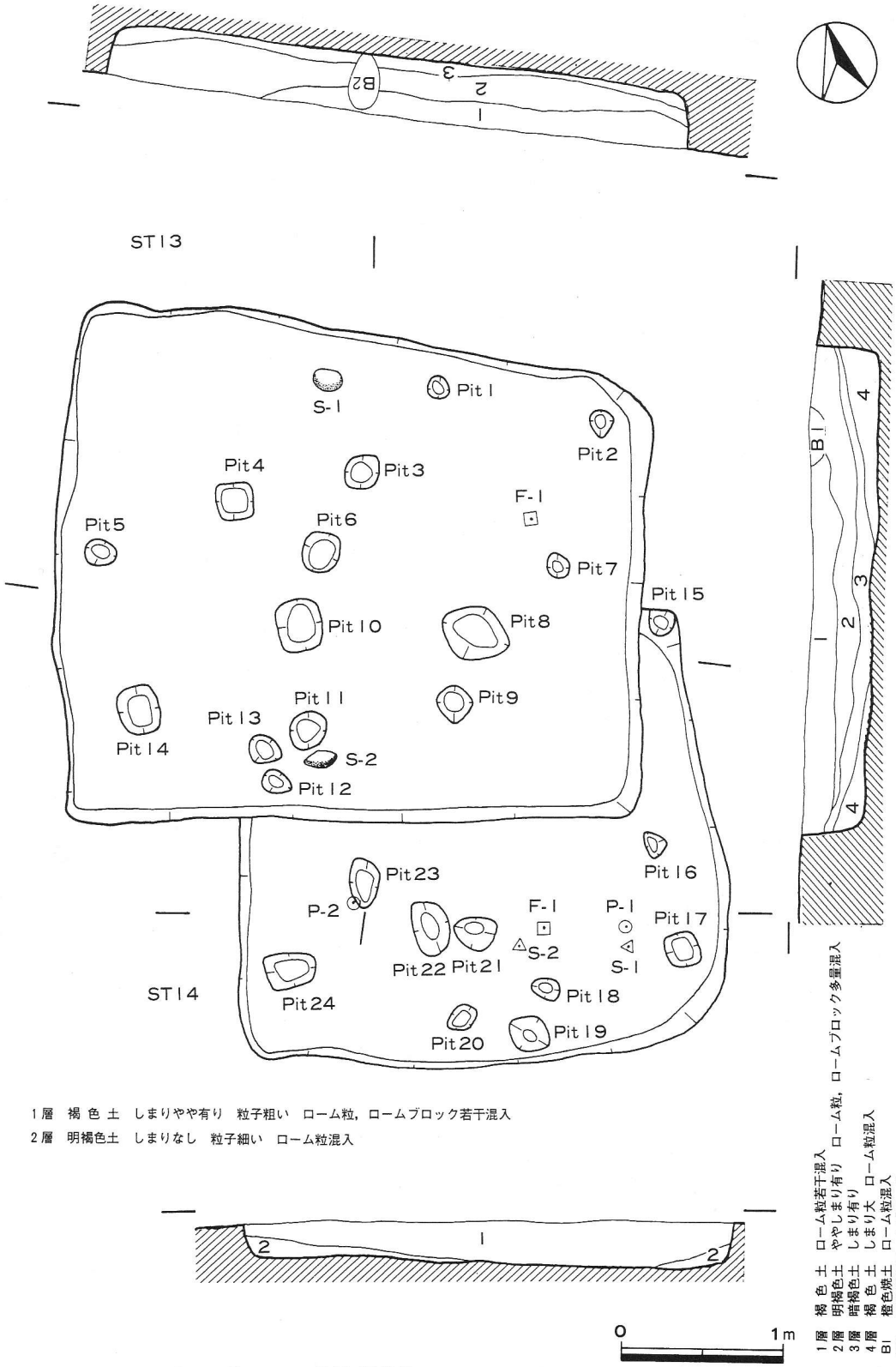
第14号竪穴遺構（ＳＴ14）　（図14）

〈遺構の位置と確認〉　Ｂ―７グリッドに位置する。第13，32号竪穴遺構と重複関係にあり，本遺構は第13号竪穴遺構より古く，第32号竪穴遺構より新しい。

〈形態〉　2.98×2.80ｍの方形を呈し，主軸方向はＮ―66°―Ｗである。

〈壁・床〉　壁はほぼ垂直な立ち上がりを呈し，壁高は東壁16.1cm，西壁21.7cm，南壁20.1cmである。床は若干凹凸があり，東壁寄りの床は堅くしまっている。

〈付属施設〉　なし



1層　褐色土　しまりやや有り　粒子粗い　ローム粒，ロームブロック若干混入
2層　明褐色土　しまりなし　粒子細い　ローム粒混入

1層　褐色土　ローム粒若干混入
2層　明褐色土　ややしまり有り　ローム粒，ロームブロック多量混入
3層　暗褐色土　しまり有り
4層　褐色土　しまり大　ローム粒混入
B1　橙色焼土　ローム粒混入
B2　明黄褐色ロームブロック

図14. 第13・14号竪穴遺構

〈柱穴（ピット）〉　Pit 10，15，17，24を四隅柱とするものと思われる。

〈覆土〉　２層に区分した。自然堆積を呈する。

〈出土遺物〉　床直上より鉄釘（図38―10）１点，１層より土師器片４点，自然石２点を出土した。

第15号竪穴遺構（ＳＴ15）　（図15）

〈遺構の位置と確認〉　発掘区最北端のＡ，Ｂ－７，８グリッドに位置する。第16，17，20号竪穴遺構と重複関係にあり，本遺構が最も新しい。

〈形態〉　2.43×2.13ｍの方形を呈する。主軸方向はＮ－25°－Ｅで，面積は4.56㎡である。

〈壁・床〉　壁はほぼ垂直な立ち上がりを呈し，壁高は東壁は21.7cm，西壁21.5cm，南壁24.6cm，北壁18.7cmである。床はほぼ平担で南高北低にやや傾斜している。壁付近の床は堅くしまっているが，他は軟弱である。

〈付属施設〉　なし

〈柱穴（ピット）〉　本遺構に伴う主なる柱穴はPit １，３，２，11，９，７，５と考えられる。

〈出土遺物〉　１層より土師器甕破片１点，16Ｃの白磁碗の底部片（図35－１），県内産と思われる陶磁器片２点，鉄滓１点，自然石５点を出土した。

第15・16・17・20号竪穴遺構ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
平面形	方　形	楕円形	方　形	方　形	方　形	楕円形	方　形	方　形	楕円形	楕円形	楕円形	円　形
規　模	18×16	18×14	31×18	24×18	21×18	14×13	28×20	26×18	20×14	14×12	18×15	15×15
深　さ	22.0	20.2	26.4	10.3	30.6	9.7	22.1	15.8	16.0	10.6	13.8	30,1
Pit No.	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
平面形	方　形	楕円形	不整楕円形	方　形	円　形	方　形	方　形	円　形	不整方形	方　形	方　形	方　形
規　模	24×19	18×13	20×13	23×21	28×24	28×22	20×15	21×21	26×21	21×19	18×14	18×14
深　さ	27.1	35.5	24.6	52.8	17.9	66.6	60.5	62.9	59.9	48.6	9.8	11.6
Pit No.	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36
平面形	方　形	不整円形	楕円形	方　形	楕円形	方　形	不整方形	方　形	不整円形	楕円形	不整方形	不整方形
規　模	24×21	30×27	18×15	22×18	22×16	22×20	30×26	22×20	16×16	22×18	27×23	14×14
深　さ	24.6	23.4	35.6	11.6	17.2	15.3	30.5	36.3	36.3	13.6	20.5	21.4
Pit No.	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	
平面形	方　形	不整円形	方　形		方　形	方　形	方　形	方　形	方　形	方　形	不整楕円形	
規　模	19×17	20×16	28×16		26×21	16×15	22×18	32×28	15×15	14×14	30×27	
深　さ	12.7	26.6	36.4		29.0	12.5	8.8	47.1	14.5	14.4	48.1	

第16号竪穴遺構（ＳＴ16）　（図15）

〈遺構の位置と確認〉　Ａ，Ｂ－７，８グリッドに位置する。第15，20号竪穴遺構と重複関係にあり，本遺構が最も古い。

〈形態〉　2.47×（2.04）ｍの方形を呈する。主軸方向はＮ－32°－Ｅである。

〈壁・床〉　壁はほぼ垂直な立ち上がりを呈し，壁高は東壁9.6cm，南壁8.0cm，北壁11.0cmである。床はほぼ平担であるが，南高北低にやや傾斜している。

〈付属施設〉　なし

〈柱穴（ピット）〉　Pit 26，29，32，36を四隅とし，東，西壁際中間に１対，南，北壁際にはほぼ中間に１対のピットが検出された。

〈覆土〉　１層からなる。

〈出土遺物〉　北東壁際床直上より銅製品（図40－６）１点を出土した。

第17号竪穴遺構（ＳＴ17）　（図15）

〈遺構の位置と確認〉　発掘区最北端であるＡ－７グリッドに位置する。第15，20号竪穴遺構と重複関係にあり，本遺構は第15号竪穴遺構より古く，第20号竪穴遺構より新しい。北，西壁側は調査外のため，その全貌は明らかでない。

〈形態〉　方形を呈するものと思われる。

〈壁・床〉　壁はほぼ垂直な立ち上がりを呈し，南壁の壁高は15.1cmである。床はほぼ平担で堅くしまっている。

〈付属施設〉　南壁際に幅16～21cm，深さ４～５cmの周溝が検出された。

〈柱穴（ピット）〉　南，東壁に等間隔なピットが検出された。（Pit 16，21，22，20）

〈覆土〉　３層に区分した。人為堆積を呈する。

〈出土遺物〉　覆土中より県内産と思われる陶磁器片２点，砥石（図41－４）１点，剝片石器（図41－１）１点を出土した。

第20号竪穴遺構（ＳＴ20）　（図15）

〈遺構の位置と確認〉　Ｂ－７，８グリッドに位置する。第15，16，17号竪穴遺構と重複関係にあり，本遺構は第15，17号竪穴遺構より古く，第16号竪穴遺構より新しい。本遺構南側に第13，31号竪穴遺構が近接する。

〈形態〉　方形を呈するものと思われる。

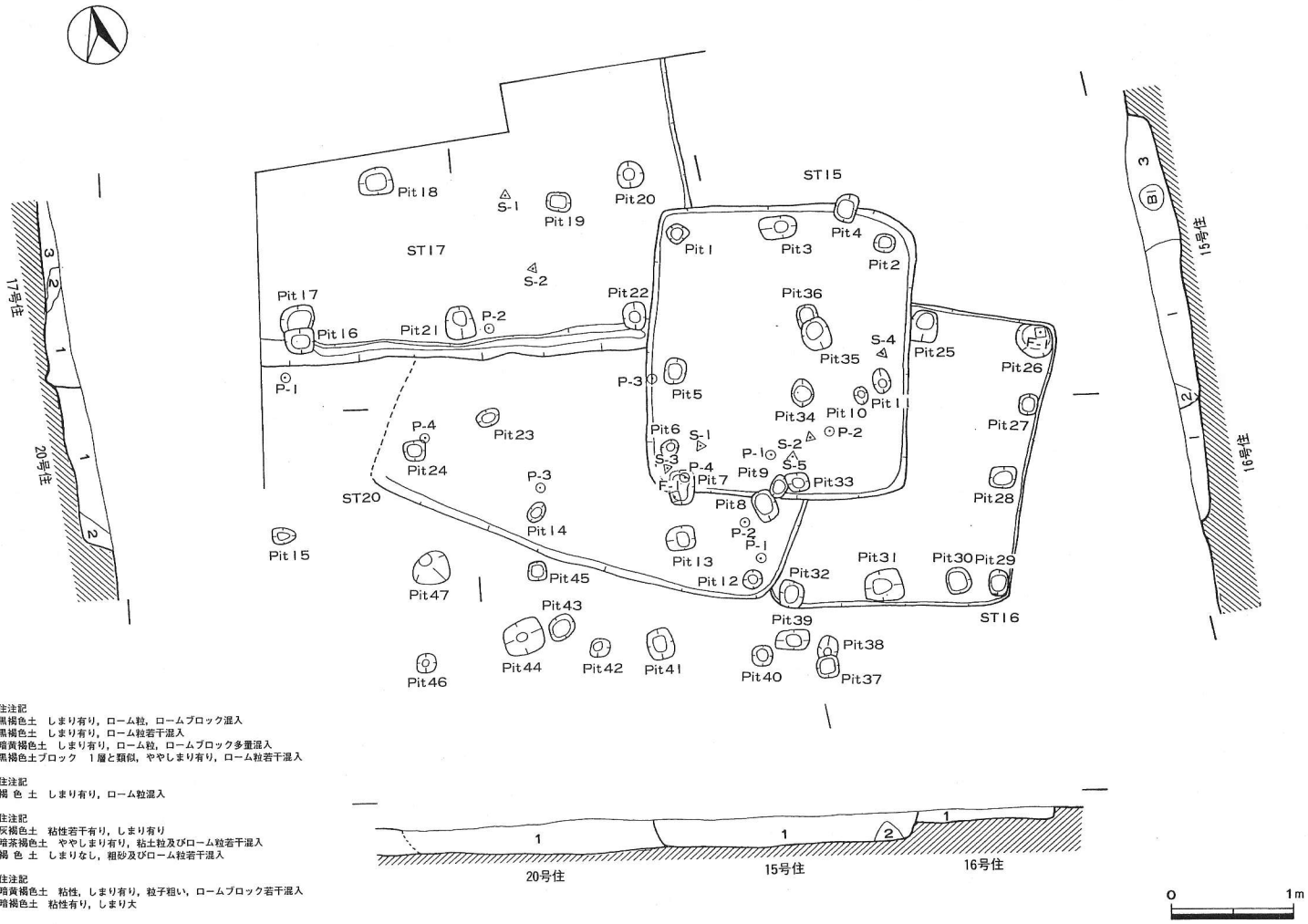
〈壁・床〉　壁はほぼ垂直な立ち上がりを呈し，壁高は南壁25.3cmである。床はやや平担であるが，南高北低でやや傾斜している。

〈付属施設〉　なし

〈柱穴（ピット）〉　Pit 24，19，35，34，８，12～14，23が本遺構の柱穴と考えられる。

〈覆土〉　２層に区分した。人為堆積を呈する。

〈出土遺物〉　覆土中より県内産と思われる陶磁器片４点，15Ｃの青磁碗破片１点を出土した。



15号住注記
1層　黒褐色土　しまり有り，ローム粒，ロームブロック混入
2層　黒褐色土　しまり有り，ローム粒若干混入
3層　暗黄褐色土　しまり有り，ローム粒，ロームブロック多量混入
B1　黒褐色土ブロック　1層と類似，ややしまり有り，ローム粒若干混入

16号住注記
1層　褐 色 土　しまり有り，ローム粒混入

17号住注記
1層　灰褐色土　粘性若干有り，しまり有り
2層　暗茶褐色土　ややしまり有り，粘土粒及びローム粒若干混入
3層　褐 色 土　しまりなし，粗砂及びローム粒若干混入

20号住注記
1層　暗黄褐色土　粘性，しまり有り，粒子粗い，ロームブロック若干混入
2層　暗褐色土　粘性有り，しまり大

図15．第15・16・17・20号竪穴遺構

第18ａ竪穴遺構（ＳＴ18ａ）　（図16）

〈遺構の位置と確認〉　Ｃ－６グリッドに位置する。第19，27号竪穴遺構及び第１号溝状遺構と重複関係にあり，本遺構は第19，27号竪穴遺構より新しく，第１号溝より古い。

〈形態〉　4.97×3.16ｍの方形を呈する。主軸方向はＮ－13°－Ｅで，面積は13.76㎡である。

〈壁・床〉　壁はほぼ垂直な立ち上がりを呈し，壁高は東壁19.0cm，西壁34.2cm，南壁32.6cm北壁23.2cmである。床はやや平担で堅くしまっている。

〈付属施設〉　西壁南側に幅14～20cm，深さ11～13cm，長さ135cmの溝を検出した。

〈柱穴（ピット）〉　４壁際に規則的な柱穴（Pit　１～９，18）10個が検出された。

〈覆土〉　褐色土１層である。

〈出土遺物〉　床面及び床直上より，銅製品（図40－３）１点，古銭（○元通○）１点，無文銭１点，鉄滓１点，自然石６点を出土した。

第18ａ・ｂ・ｃ，19号竪穴遺構ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
平面形	方　形	方　形	方　形	方　形	方　形	不整方形	不整楕円形	方　形	楕円形	楕円形	円　形	不整方形
規　模	28×18	18×18	28×26	22×19	26×22	32×29	33×24	28×25	27×22	17×12	26×26	32×30
深　さ	65.8	66.5	69.7		31.1	72.4	65.2	58.5		42.1	50.5	50.5
Pit No.	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
平面形	不整円形	方　形	方　形	不整楕円形	方　形	方　形	方　形	円　形	円　形	不整楕円形	楕円形	楕円形
規　模	25×22	26×20	20×18	35×27	12× 9	15× 9	28×27	20×20	23×22	31×22	37×20	18×13
深　さ	47.5	48.5	56.6	56.4	15.9	39.8	32.6	59.0	58.4	50.4	64.9	56.6
Pit No.	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36
平面形	方　形	方　形	方　形	円　形	楕円形	不整方形	方　形	方　形	円　形	不整方形	方　形	方　形
規　模	20×10	22×18	42×18	20×18	27×23	44×16	29×16	13×12	18×16	25×24	17×17	21×18
								10.0		9.4		30.5
Pit No.	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48
平面形	方　形	方　形	円　形	不整方形	不整円形	楕円形	不整楕円形	不整方形	方　形	円　形	方　形	不整楕円形
規　模	32×26	20×15	22×20	23×19	21×19	26×14	36×27	30×26	28×27	24×23	21×19	24×18
深　さ	58.1	14.8	21.0	26.6	15.1	39.1	55.3	49.0	42.9	36.7		
Pit No.	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60
平面形	不整楕円形	方　形	方　形	方　形	円　形	円　形	方　形	円　形	方　形	不整形	方　形	楕円形
規　模	28×16	17×14	18×18	21×19	22×22	23×21	18×18	24×23	21×19	50×48	16×15	20×17
深　さ								50.8		64.0		
Pit No.	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72
平面形	楕円形	楕円形	方　形	不整方形	不整方形	方　形	方　形	不整方形	円　形	不整方形	不整楕円形	方　形
規　模	28×16	29×17	20×19	21×20	17×15	20×18	19×16	18×15	16×16	17×16	15×14	13×13
深　さ			5.0	22.3								
Pit No.	73	74	75	76	77	78	79	80	81			
平面形	方　形	方　形	不整方形	不整方形	不整方形	方　形	方　形	不整方形	楕円形			
規　模	18×17	18×17	19×17	19×16	20×18	23×19	20×18	19×18	16×11			
深　さ												

第18ｂ竪穴遺構（ＳＴ18ｂ）（図16）

〈遺構の位置と確認〉　18ａ竪穴遺構床面で確認した。同遺構の南東部に位置する。

〈形態〉　1.9×1.9ｍの方形を呈する。主軸方向はＮ－13°－Ｅで，面積は2.72㎡である。

〈壁・床〉　ややなだらかな立ち上がりを呈し，18ａ竪穴遺構床面までの壁高は約14cmである。

床は平担で堅くしまっている。

〈付属施設〉　なし

〈柱穴（ピット）〉　4壁隅（Pit 10, 12, 13, 15）と東，西壁際中央に1対（Pit 11, 14）の計6個の規則的なピットが検出された。ピットの深さは42～57cmである。

〈覆土〉　黒褐色土でローム粒，ブロックを多量混入している。人為堆積と考えられる。

〈出土遺物〉　床直上より無文銭3点，鉄滓1点，自然石2点を出土した。

第18c竪穴遺構（ＳＴ18c）　（図16）

〈遺構の位置と確認〉　18a竪穴遺構床面で確認した。同遺構の北東部に位置する。

〈形態〉　1.4×1.3mの方形を呈する。主軸方向はN－28°－Eで，面積は1.41㎡である。

〈壁・床〉　ややなだらかな立ち上がりを呈し，第18a号竪穴遺構床面までの壁高は約10cmである。床面はやや凹凸があり，しまりは弱い。

〈付属施設〉　なし

〈柱穴〉　2個のピットを検出したが，規則性はみられない。

〈覆土〉　4層に区分した。人為堆積を呈する。4層は赤灰褐色焼土，3層は黒灰色の灰質土層である。

〈出土遺物〉　床面より小柄（図37－8）1点，床直上より自然石1点を出土した。

第19号竪穴遺構（ＳＴ19）　（図16）

〈遺構の位置と確認〉　B，C－6グリッドに位置し，第18，22号竪穴遺構と重複関係にある。本遺構は第18号竪穴遺構より古い。

〈形態〉　3.65×2.80mの方形を呈する。主軸方向はN－20°－Eで，面積は7.64㎡である。

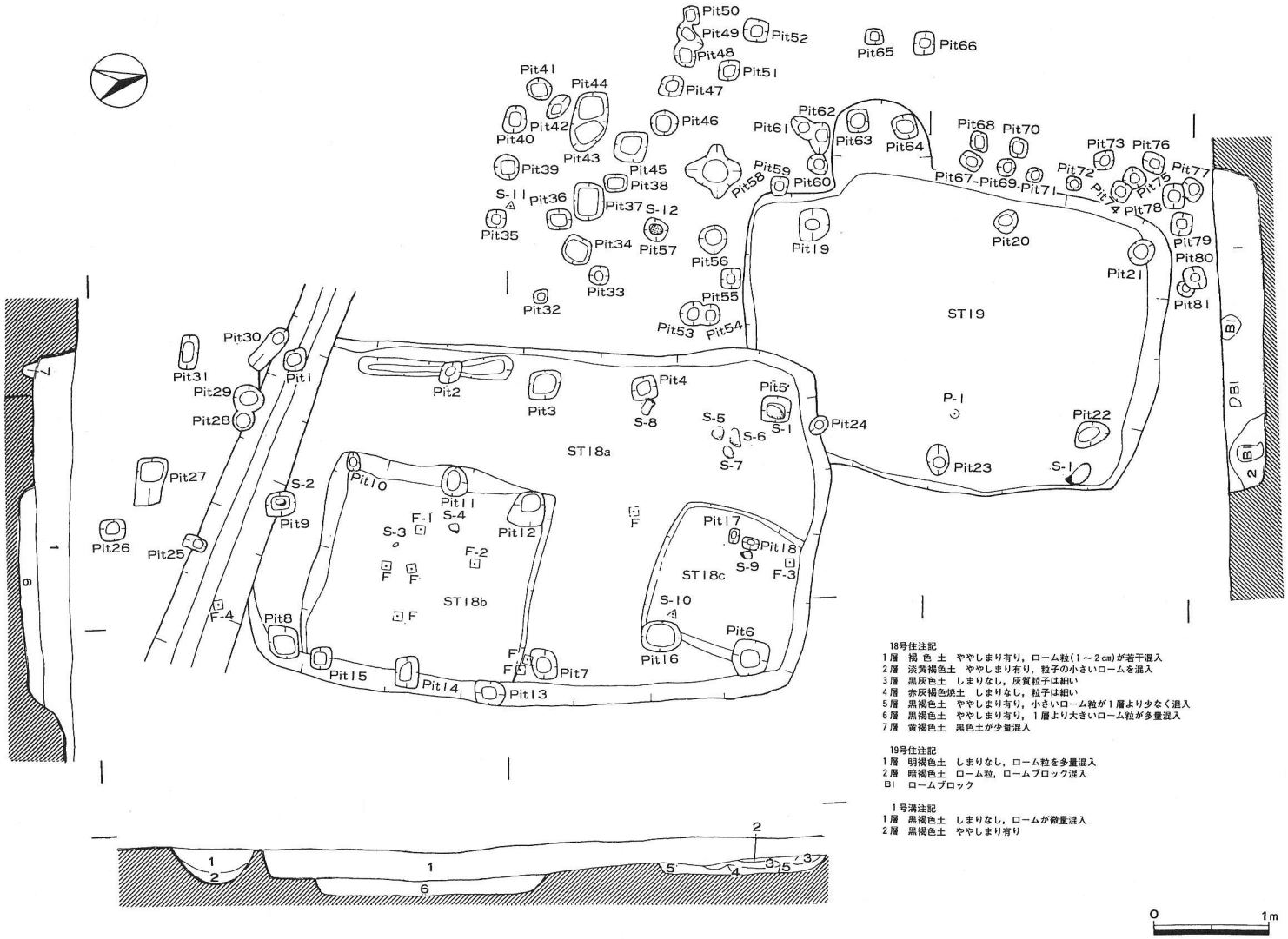
〈壁・床〉　壁はほぼ垂直な立ち上がりを呈し，壁高は東壁25.9cm，西壁48.7cm，南壁43.8cm北壁37.0cmである。床はほぼ平担で堅くしまっている。

〈付属施設〉　西壁南側にゆるやかな傾斜をもつ0.88×0.66mの出入口と思われる張り出し部が検出された。

〈柱穴（ピット）〉　4壁隅際（Pit 19, 21, 22, 24）及び東，西壁際中央に1対（Pit 20, 23）のピットを検出した。また張り出し部から1対（Pit 63, 64）のピットを検出した。さらに本遺構及び18a号遺構の西側近傍から48個のピットを検出した。

〈覆土〉　2層に区分した。人為堆積を呈する。

〈出土遺物〉　覆土中より弥生式土器片2点，及び自然石1点を出土した。



18号住注記
1層　褐色土　ややしまり有り，ローム粒(1～2㎝)が若干混入
2層　淡黄褐色土　ややしまり有り，粒子の小さいロームを混入
3層　黒灰色土　しまりなし，灰質粒子は細い
4層　赤灰褐色焼土　しまりなし，粒子は細い
5層　黒褐色土　ややしまり有り，小さいローム粒が1層より少なく混入
6層　黒褐色土　ややしまり有り，1層より大きいローム粒が多量混入
7層　黄褐色土　黒色土が少量混入

19号住注記
1層　明褐色土　しまりなし，ローム粒を多量混入
2層　暗褐色土　ローム粒，ロームブロック混入
B1　ロームブロック

1号溝注記
1層　黒褐色土　しまりなし，ロームが微量混入
2層　黒褐色土　ややしまり有り

図16. 第18a・b・c・19号竪穴遺構

第22号竪穴遺構（ＳＴ22）　（図17）

〈遺構の位置と確認〉　Ｂ－６，７グリッドに位置し，第19，31，32号竪穴遺構と重複関係にある。本遺構は第31，32号竪穴遺構より新しい。

〈形態〉　4.10×4.06ｍの方形を呈する。主軸方向はＮ－12°－Ｅで，面積は15.16㎡である。

〈壁・床〉　壁はほぼ垂直な立ち上がりを呈し，壁高は東壁42.1cm，西壁59.9cm，南壁53.2cm北壁42.2cmである。床は平担で堅くしまっている。

〈付属施設〉　南東隅から幅54cm，深さ45.6cm，長さ2.14ｍの溝が南東方向にのびている。

〈柱穴（ピット）〉　ピットは遺構内から11個，遺構外から２個検出された。遺構内ピットは四壁隅と壁中間に配置している。

〈覆土〉　10層に区分した。自然堆積を呈する。

〈出土遺物〉　床面から銅製品（図40－１）１点，９層より自然石１点を出土した。また覆土中より鉄釘１点を出土した。

第22号竪穴遺構ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4 a	4 b	5	6	7	8	9	10	11
平面形	方　形	円　形	方　形	楕円形	楕円形	方　形	方　形	方　形	楕円形	不整楕円形	方　形	方　形
規　模	19×17	28×27	28×26	30×20	35×28	20×16	32×27	18×16	24×21	36×28	22×17	29×28
深　さ	61.5	60.9	40.8	69.0	30.7	31.9	17.0	14.5	38.6	60.4	51.6	17.7

Pit No.	12
平面形	楕円形
規　模	28×23
深　さ	27.0

第24号竪穴遺構（ＳＴ24）　（図18）

〈遺構の位置と確認〉　Ｂ，Ｃ－７，８グリッドに位置する。第32，33号竪穴遺構と重複関係にあり，本遺構が最も新しい。

〈形態〉　3.38×2.80ｍの方形を呈する。主軸方向はＮ－25°－Ｅで面積は7.84㎡である。

〈壁・床〉　壁はほぼ垂直な立ち上がりを呈し，壁高は東壁18.6cm，西壁18.0cm，南壁15.2cm北壁11.0cmである。床は東高西低にゆるやかに傾斜しており，やや凹凸がある。

〈付属施設〉　なし

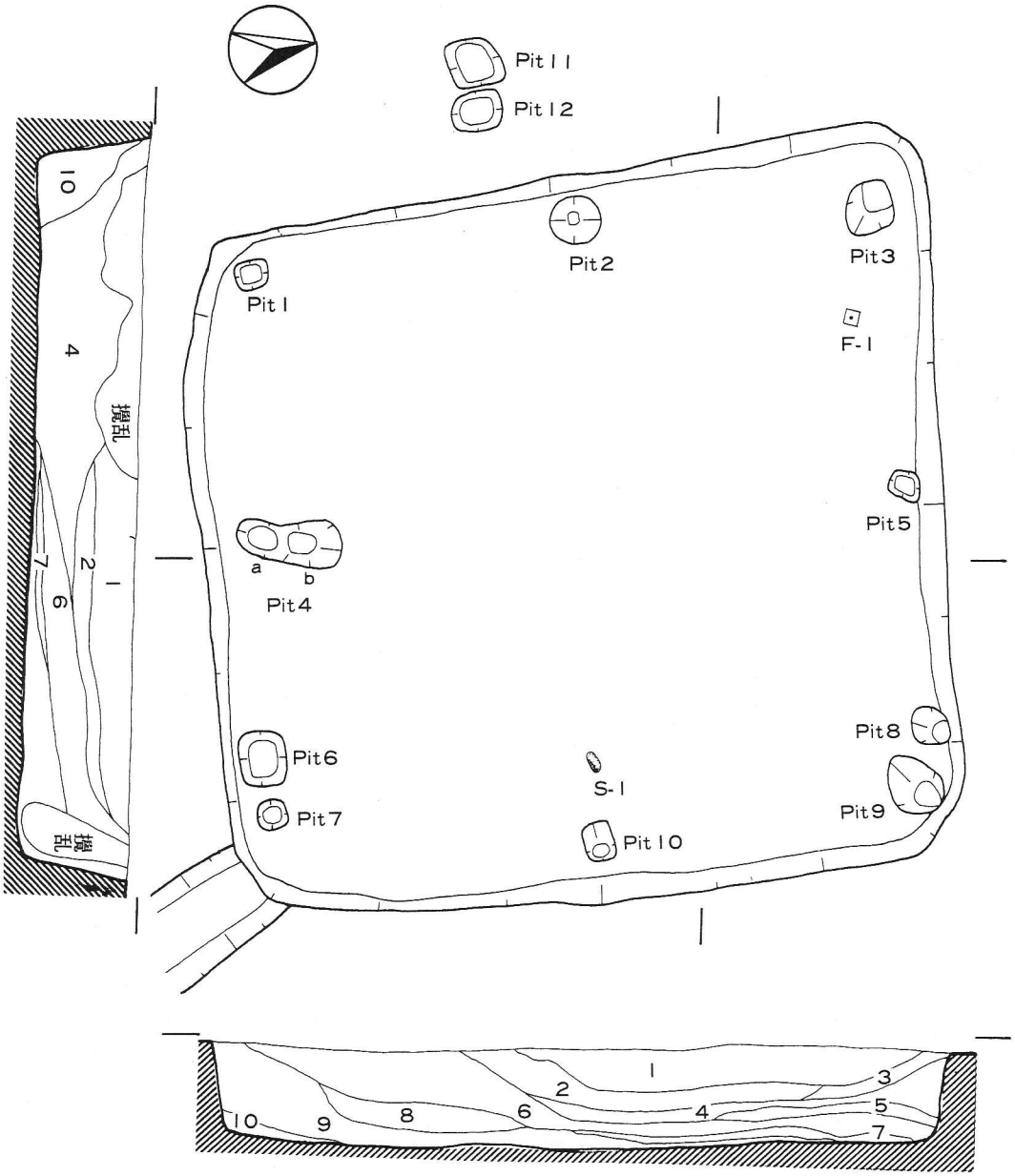
〈柱穴（ピット）〉　ピットは遺構内から21個，遺構外から22個検出された。

〈覆土〉　５層に区分した。人為堆積を呈する。

〈出土遺物〉　なし

第24号竪穴遺構ピット一覧表（単位：cm）

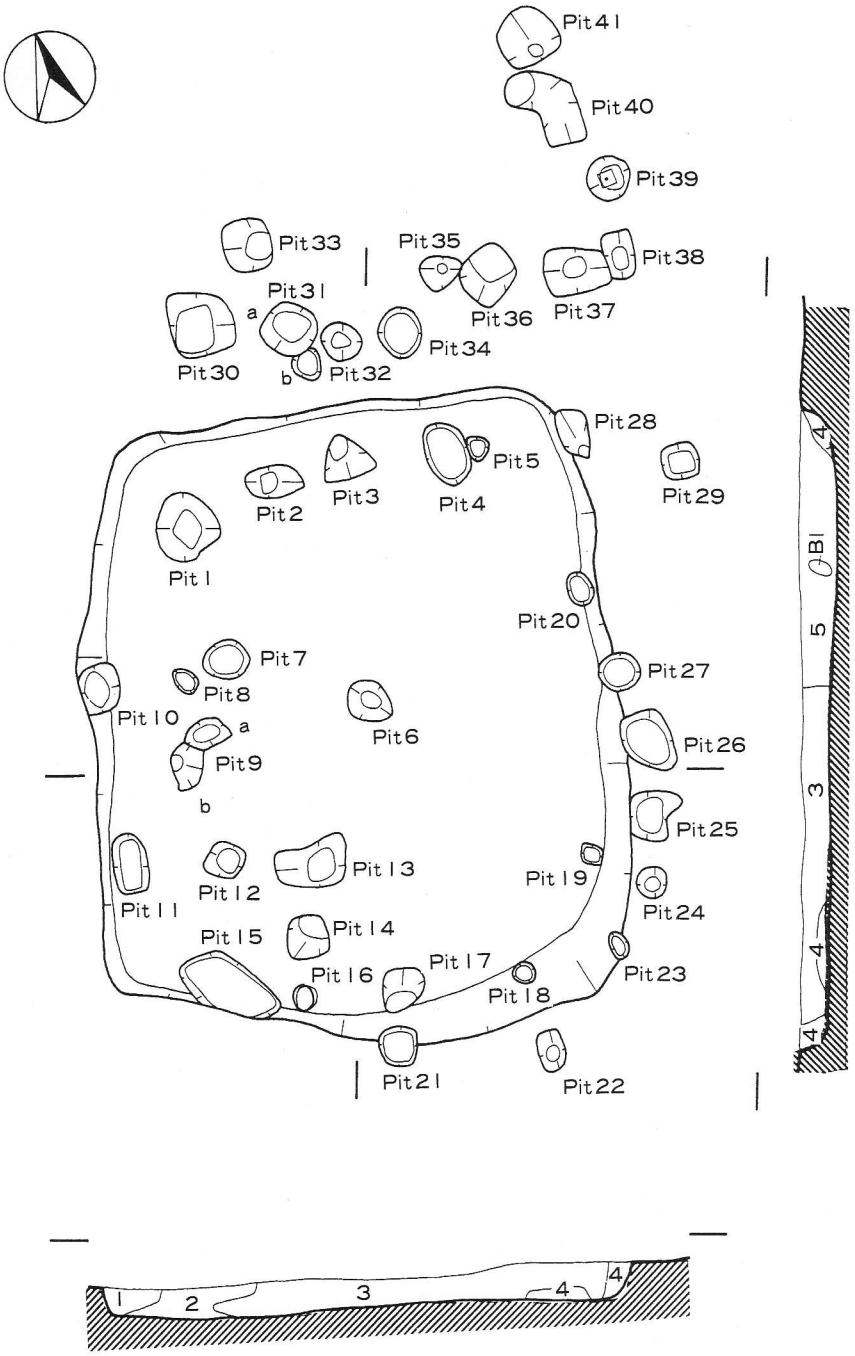
Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9 a	9 b	10	11
平面形	不整楕円形	楕円形	三角形	楕円形	不整楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	不整楕円形	方　形	方　形	不整方形
規　模	37×33	31×17	29×24	35×23	14×11	27×23	25×21	16×11	23×17	23×17	26×21	33×18
深　さ	22.8	33.1	57.8	57.0	35.3	30.9	14.7	32.9	28.5	28.5	29.3	12.6



1層　暗褐色土　しまりやや有り，ローム粒混入
2層　暗褐色土　しまり有り，ローム粒混入
3層　暗灰褐色土　しまりなし，粘性有り
4層　明褐色土　しまり大，ローム粒，ロームブロック多量混入
5層　灰褐色土　しまりやや有り，粘性有り
6層　褐　色　土　しまり有り，炭化物混入，ローム粒若干混入
7層　白色粘土ブロック混入層
8層　褐　色　土　しまり有り，ローム粒・ロームブロック混入
9層　明褐色土　しまりやや有り，ローム粒・ロームブロック多量混入
10層　暗褐色土　しまりなし，ローム粒若干混入

0　1m

図17．第22号竪穴遺構



1層　黒　色　土　しまりなし，ローム粒若干混入
2層　暗黄褐色土　ややしまり有り，ロームブロック多量混入
3層　暗褐色土　ややしまり有り，ローム粒若干混入
4層　黄褐色土　しまり有り，ロームブロック混入
5層　暗黄褐色土　ややしまり有り，大きめのロームブロック混入
BI　ロームブロック

0　1m

図18. 第24号竪穴遺構

Pit No.	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
平面形	方　形	不整方形	方　形	不整方形	楕円形	不整楕円形	円　形	方　形	楕円形	方　形	方　形	楕円形
規　模	19×19	38×28	23×22	46×31	14×11	27×21	13×12	12×12	16×14	22×20	22×14	16× 9
深　さ	22.8	26.9	22.9	29.8	12.0	35.5	11.5	19.7	15.9	30.0	14.0	20.8
Pit No.	24	25	26	27	28	29	30	31 a	31 b	32	33	34
平面形	円　形	不整形	不整楕円形	円　形	不整方形	方　形	不整方形	方　形	楕円形	不整円形	方　形	楕円形
規　模	17×16	28×27	36×27	22×21	25×17	20×20	35×33	28×28	17×16	21×21	28×26	27×23
深　さ	10.0	21.4	20.0	54.0	25.3	19.4	30.4	40.7	9.8	21.3	36.1	15.3
Pit No.	35	36	37	38	39	40	41					
平面形	不整楕円形	方　形	方　形	方　形	円　形	不整形	不整方形					
規　模	22×18	30×27	26×16	26×16	24×23	40×35	31×30					
深　さ	37.0	21.5	16.2	16.2	45.8	32.4	34.5					

第25号竪穴遺構（ＳＴ25）　（図19）

〈遺構の位置と確認〉　Ｃ－７グリッドに位置する。第26号竪穴遺構，土室状遺構と重複関係にあり，本遺構は土室状遺構より古く，第26号竪穴遺構より新しい。

〈形態〉　4.00×2.58ｍの方形を呈する。主軸方向はＮ－81°－Ｅで，面積は8.52㎡である。

〈壁・床〉　壁はほぼ垂直な立ち上がりを呈し，壁高は東壁6.6㎝，西壁14.8㎝，南壁14.7㎝北壁8.6㎝である。床面はやや平坦で堅くしまっている。

〈付属施設〉　なし

〈柱穴（ピット）〉　遺構内東，西壁際に10個のピットが検出された。

〈覆土〉　３層に区分した。

〈出土遺物〉　覆土中より無文銭１点を出土した。

第25，26号竪穴遺構ピット一覧表（単位：㎝）

Pit No.	1	2 a	2 b	3	4	5	6	7	8	9	10	11
平面形	方　形	不整楕円形	不整方形	不整方形	不整楕円形	方　形	円　形	楕円形	不整方形	不整方形	楕円形	不整方形
規　模	30×28	27×21	26×19	19×17	42×26	19×16	15×15	24×20	35×24	26×23	24×17	23×15
深　さ	49.6	22.9	17.5	14.9	47.9	37.5	19.3	17.6	20.9	43.9	24.1	21.3
Pit No.	12 a	12 b	13	14								
平面形	不整方形	不整方形	楕円形	不整楕円形								
規　模	28×24	28×26	20×11	22×17								
深　さ	33.6	17.4	20.1	16.3								

第26号竪穴遺構（ＳＴ26）　（図19）

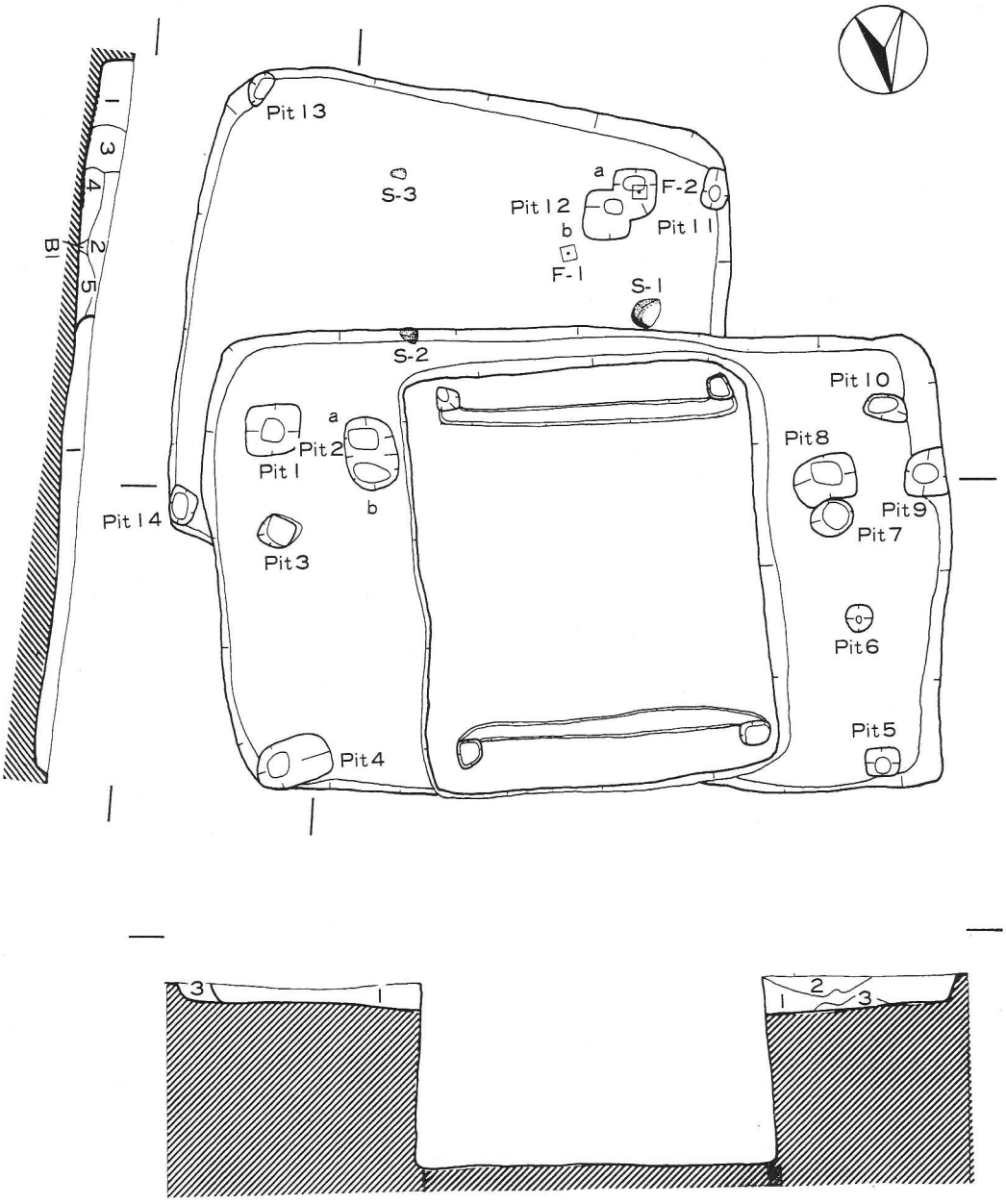
〈遺構の位置と確認〉　Ｃ－７グリッドに位置する。第25号竪穴遺構，土室状遺構と重複関係にあり，本遺構が最も古い。

〈形態〉　2.96×2.64ｍの方形を呈する。主軸方向はＮ－61°－Ｗで，面積は7.60㎡である。

〈壁・床〉　壁はほぼ垂直な立ち上がりを呈し，壁高は東壁16.1㎝，西壁14.8㎝，南壁20.3㎝である。床はやや平坦で，堅くしまっている。

〈付属施設〉　なし

〈柱穴（ピット）〉　３壁隅（Pit 11，13，14）の他３個のピットが検出された。北西隅ピットは土室状遺構により破壊されており，確認できなかった。



25号住注記
1層　暗褐色土　ローム粒混入
2層　淡赤褐色土　焼土質，ややしまり有り
3層　明黄褐色土　ややしまり有り，黒褐色土粒を多量混入
26号住注記
1層　明褐色土　ロームブロック・ローム粒を混入
2層　明褐色土　ローム粒混入
3層　黒褐色土　しまりなし
4層　明黄褐色土　ロームブロック・ローム粒混入
5層　黒褐色土　ロームブロック混入
BI　ロームブロック

0　1m

図19．第25・26号竪穴遺構

〈覆土〉　5層に区分した。人為堆積を呈する。

〈出土遺物〉　床面より古銭（景徳元宝）1点，鉄滓1点，自然石1点を出土した。また床直上から有孔石製品（図41－8）1点，自然石1点を出土した。

第27号竪穴遺構（ＳＴ27）　（図20）

〈遺構の位置と確認〉　B，C－7グリッドに位置する。第18号竪穴遺構と重複関係にあり，本遺構が古い。

〈形態〉　2.50×2.06ｍの方形を呈する。主軸方向はＮ－12°－Ｅである。

〈壁・床〉　南北壁はほぼ垂直に立ち上がり，東壁は緩やかな立ち上がりを呈する。壁高は東壁4.8㎝，南壁7.7㎝，北壁9.4㎝である。床はほぼ平坦で，堅くしまっている。

〈付属施設〉　なし

〈柱穴（ピット）〉　計8個のピットが検出された。

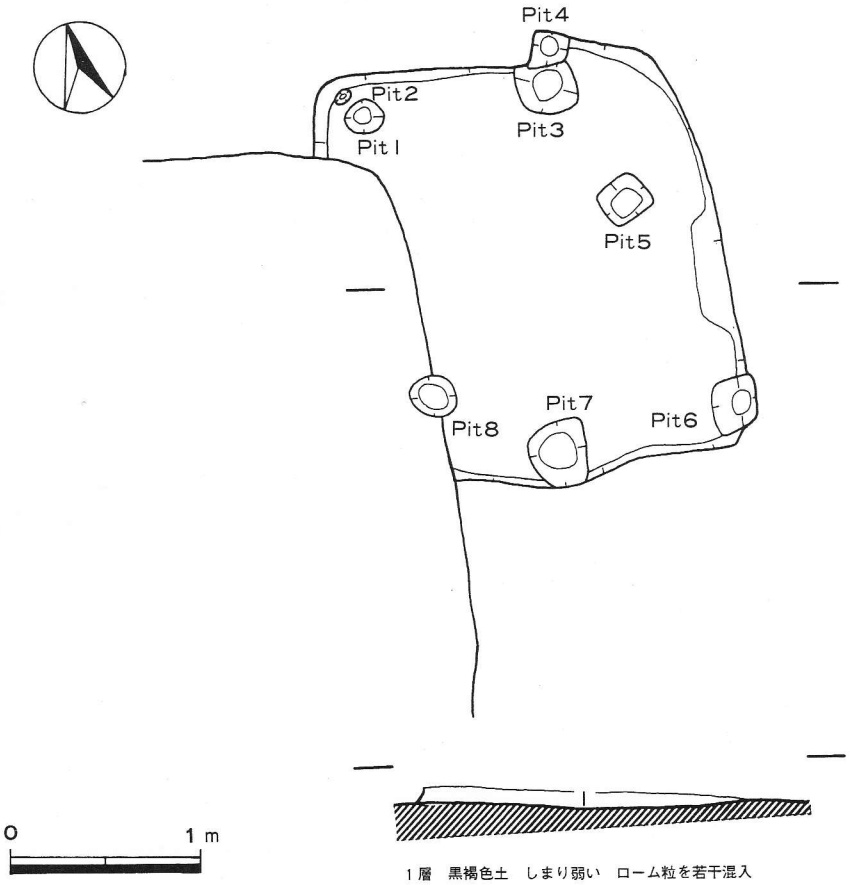


図20．第27号竪穴遺構

〈覆土〉　黒褐色土の単一層である。

〈出土遺物〉　なし

第27号竪穴遺構ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8
平面形	楕円形	楕円形	方　形	方　形	方　形	方　形	不整方形	楕円形
規　模	21×17	10× 7	30×27	19×19	26×23	27×23	36×30	25×22
深　さ	10.5		15.1	8.6	17.4	46.3	10.4	12.1

第28号竪穴遺構（ＳＴ28）　（図21）

〈遺構の位置と確認〉　発掘区最南端のＥ－７グリッドに位置し，北側には柱穴群が近接する。南壁側は調査外のため不明である。

〈形態〉　短軸2.15ｍの方形を呈する。主軸方向はＮ－36°－Ｅである。

〈壁・床〉　壁はほぼ垂直な立ち上がりを呈し，壁高は北東壁11.0cm，北西壁14.4cm，南東壁5.4cmである。床やや凹凸がある。

〈付属施設〉　なし

〈柱穴（ピット）〉　計10個のピットが検出された。

〈覆土〉　２層に区分した。自然堆積を呈する。

〈出土遺物〉　Pit ２内より美濃皿底部（図35－17）１点を出土した。

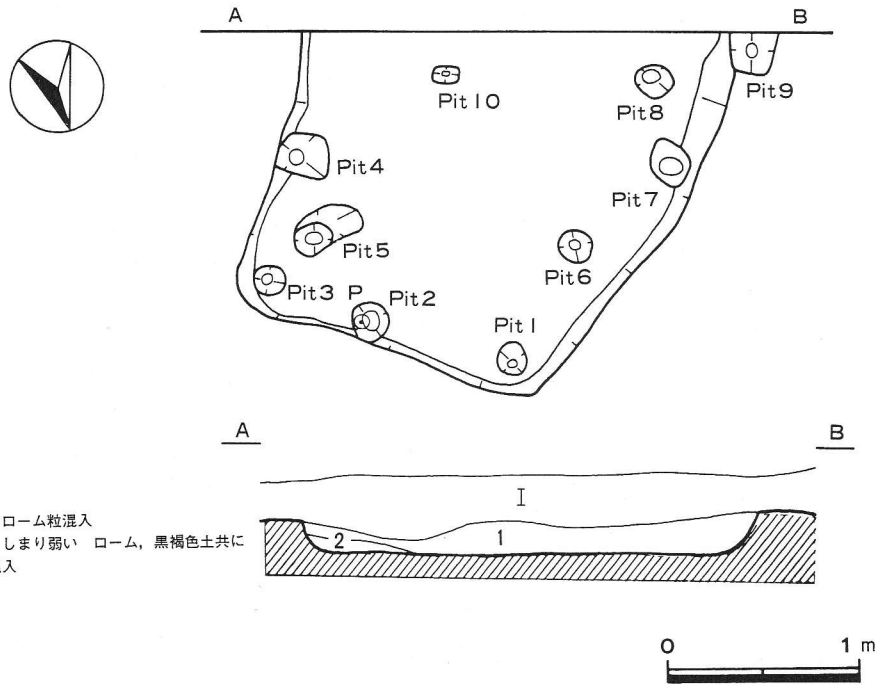


図21．第28号竪穴遺構

第28号竪穴遺構ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
平面形	楕円形	円　形	楕円形	不整方形	不整楕円形	円　形	不整方形	不整方形	方　形	方　形
規　模	16×14	21×20	17×15	28×22	20×16	18×17	21×20	19×17		13× 9
深　さ	48.9	33.9	33.6	39.8	65.7	29.2	31.0	30.9	33.5	

第29ａ号竪穴遺構（ＳＴ29ａ）　（図22）

〈遺構の位置と確認〉　Ｅ－６グリッドに位置する。第29ｂ号竪穴遺構と重複関係にあり，本遺構が新しい。

〈形態〉　(6.5) ×4.4ｍの方形を呈する。主軸方向はＮ－74°－Ｗである。

〈壁・床〉　南，東壁はやや垂直な立ち上がりを呈し，北壁は緩やかな立ち上がりを呈する。壁高は東壁35.3cm，南壁35.9cm，北壁28.7cmである。床面は平坦で堅くしまっている。

〈付属施設〉　なし

〈柱穴（ピット）〉　壁際のやや規則的なピットを含め計18個のピットを検出した。

〈覆土〉　暗黄褐色土でローム粒を多量に混入する単一層である。人為堆積と思われる。

〈出土遺物〉　床面より白磁皿底部（図35－２），鞴羽口片（図36－19），鉄釘（　－　）鉄滓１点を出土した。また覆土中より鉄槍（図38－18），鉄滓１点，石皿１点の他10～20cm大の自然石４点を出土した。

第29ａ，ｂ竪穴遺構ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6 a	6 b	7	8	9	10	11
平面形	円　形	方　形	円　形	円　形	不整楕円形	円　形	不整円形	楕円形	円　形	円　形	楕円形	不整楕円形
規　模	13×13	26×24	24×21	19×19	24×11	23×21	24×18	16×10	19×16	13× 9	21×14	29×21
深　さ	55.0	40.7	58.9	28.1	57.9	54.6	29.5	49.1	26.0	15.8	38.2	71.7
Pit No.	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
平面形	円　形	不整楕円形	楕円形	円　形	不整楕円形	方　形	円　形	方　形	円　形	円　形	不整三角形	不整楕円形
規　模	17×17	21×14	30×30	9× 9	37×24	21×17	27×24	26×24	26×29	24×24	25×20	36×29
深　さ	60.6	15.1	57.4	33.3	64.0	45.8	46.5	55.0	70.8	8.8	64.2	70.3
Pit No.	24	25	26 a	26 b	27	28 a	28 b	29	30	31		
平面計	楕円形	方　形	楕円形	不整楕円形	方　形	円　形	円　形	円　形	楕円形	円　形		
規　模	16× 8	23×20	31×19	47×37	36×25	39×30	17×14	18×15	35×19	28×25		
深　さ	26.1	35.4	40.6	55.8	19.9	68.7	37.0	11.1	17.1	56.2		

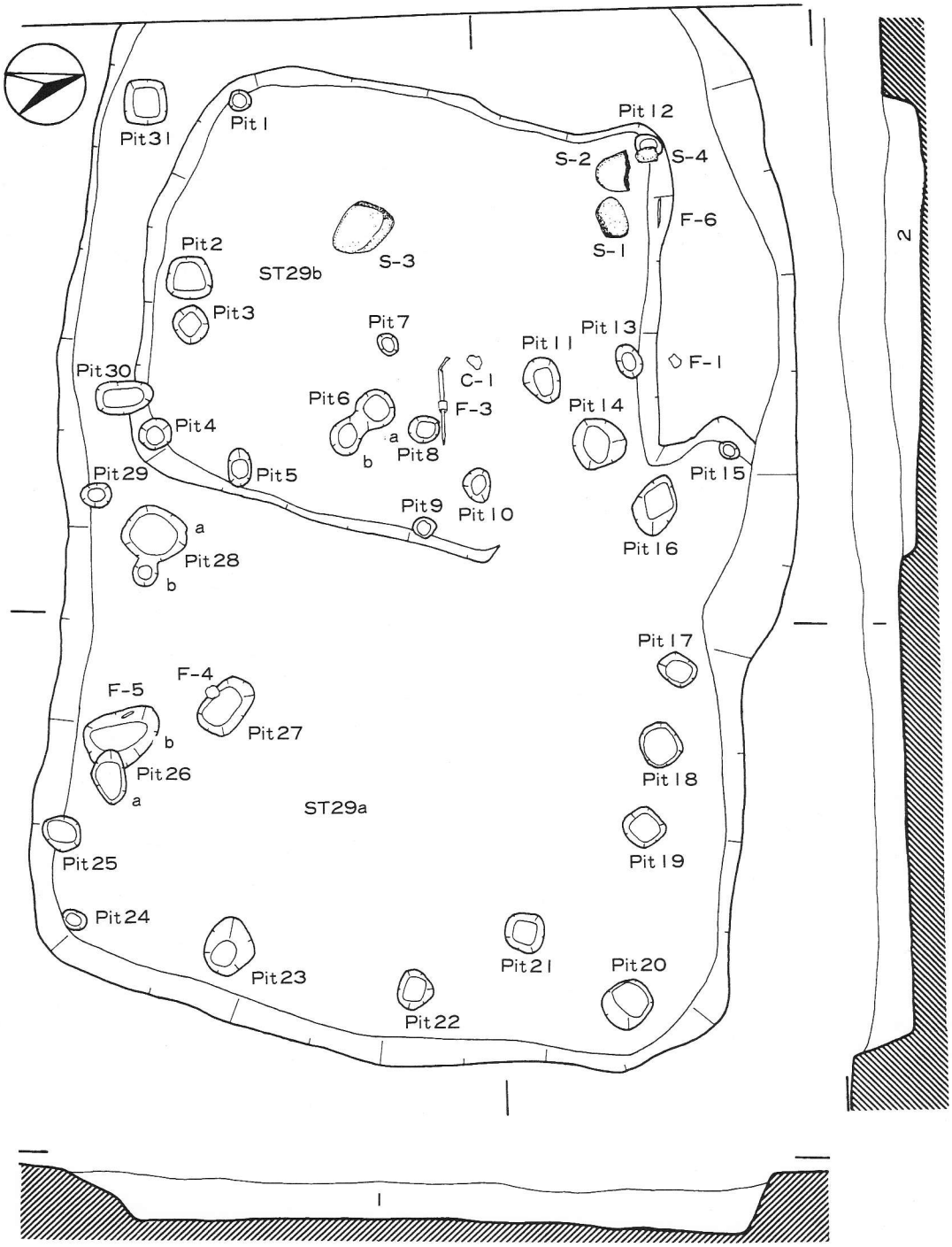
第29ｂ号竪穴遺構（ＳＴ29ｂ）　（図22）

〈遺構の位置と確認〉　第29ａ号竪穴遺構床面で確認した。

〈形態〉　3.05×2.65ｍの方形を呈する。主軸方向はＮ－27°－Ｅで，面積は6.65㎡である。

〈壁・床〉　やや急な立ち上がりを呈し，29ａ号竪穴遺構床面までの壁高は東壁9.8cm，西壁19.6cm，南壁19.4cm，北壁22.3cmである。床は東高西低のゆるい傾斜を示し，平坦であるが，ややしまりは弱い。

〈付属施設〉　北壁の中央より西寄りになだらかなスロープが検出された。出入口部と考えられる。



1層　暗黄褐色土　ややしまり有り。ローム粒を多量混入

2層　黄灰褐色土　しまり有り，ローム粒・ロームブロックを多量混入，焼土及び炭化物を若干混入

0　1m

図22. 第29a・b竪穴遺構

〈柱穴（ピット）〉　黄灰褐色土でローム粒，ロームブロックを多量に混入する単一層である。人為堆積と思われる。

〈出土遺物〉　覆土中より鉄釘（図38－２）１点，ピット内より自然石１点を出土した。

第30号竪穴遺構（ＳＴ30）　（図23）

〈遺構の位置と確認〉　Ｄ－７グリッドに位置する。第３，４号土坑と重複関係にあり，本遺構は第３号土坑より古く，第４号土坑より新しい。

〈形態〉　3.62×2.79ｍの方形を呈する。主軸方向はＮ－13°－Ｅで，面積は8.08㎡である。

〈壁・床〉　壁はほぼ垂直な立ち上がりを呈する。壁高は東壁33.3cm，西壁41.4cm，南壁26.1cm，北壁36.8cmである。床はやや平坦で，堅くしまっている。

〈付属施設〉　なし

〈柱穴（ピット）〉　遺構内より14個のピットが検出された。

〈覆土〉　３層に区分した。人為堆積を呈する。

〈出土遺物〉　北西寄り床面より９個の15～18cm大の自然石とススの付着した台石２点を出土した。また覆土中より砥石（図42－６）１点を出土した。

第30号竪穴遺構ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
平面形	不整方形	方　形	円　形	方　形	不整方形	方　形	方　形	方　形	楕円形	不整方形	不整方形	不整方形
規　模	22×15	26×25	17×17	26×24	23×17	28×27	23×15	20×16	15×12	21×19	26×23	23×22
深　さ	7.7	37.5	6.4	47.0		22.4	16.0	15.7	13.0	34.4	21.4	28.3

Pit No.	13	14	16	17	18
平面形	不整方形	不整楕円形	不整円形	不整方形	不整円形
規　模	26×25	23×20	26×24	26×22	24×24
深　さ	39.0	10.3	17.9	57.3	19.4

第31号竪穴遺構（ＳＴ31）　（図24）

〈遺構の位置と確認〉　Ｂ－７グリッドに位置する。第22，32号竪穴遺構と重複関係にあり，本遺構は第22号竪穴遺構より古く，第32号竪穴遺構より新しい。本遺構北壁側は調査区外のため不明である。

〈形態〉　4.58ｍを一辺とする方形を呈する。

〈壁・床〉　壁はほぼ垂直な立ち上がりを呈し，壁高は東壁26.6cm，西壁29.5cm，北壁32.2cmである。床は粘土質土の貼床であり，平担で堅くしまっている。

〈付属施設〉　なし

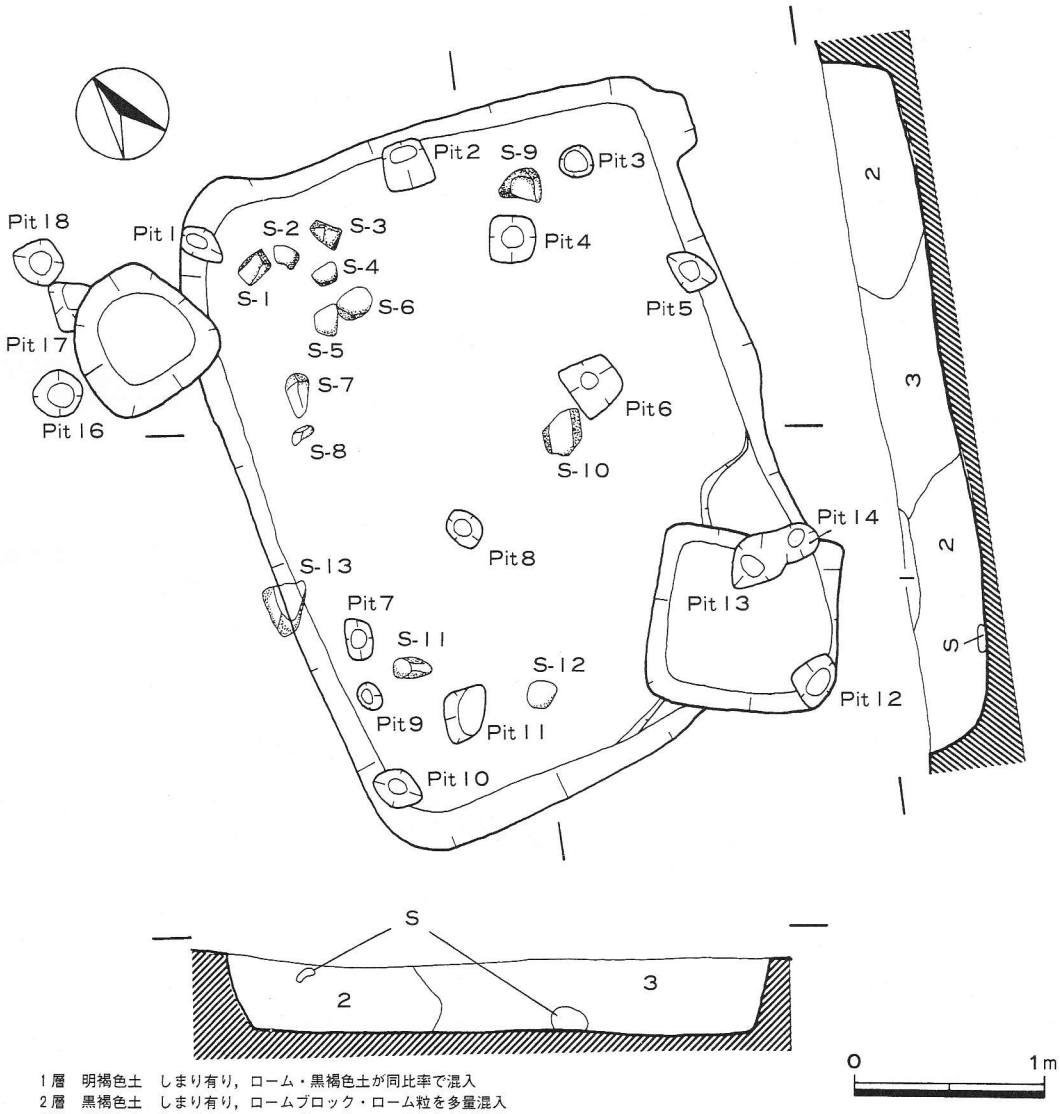
〈柱穴（ピット）〉　各壁際の８個を含め計14個のピットが検出された。

〈覆土〉　６層に区分した。５，６層に焼土及び炭化物，２層に炭化物を多量に混入していることから焼失家屋と考えられる。

〈出土遺物〉　床面より美濃皿底部（図35—12）１点，火箸（図38—16）１点，鉄鏃（図37—１）１点，自然石５点を出土した。

第31号竪穴遺構ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
平面形	方　形	方　形	方　形	方　形	不整方形	不整方形	方　形	方　形	方　形	方　形	方　形	方　形
規　模	24×19	23×22	19×16	30×28	20×19	30×26	22×20	22×20	29×28	30×27	29×26	27×25
深　さ	27.2	19.0	10.1	10.9	63.6	61.3	35.3	35.3	54.8	37.0	43.9	36.1
Pit No.	13	14										
平面形	方　形	方　形										
規　模	26×26	22×17										
深　さ	41.6	14.7										



1層　明褐色土　しまり有り，ローム・黒褐色土が同比率で混入
2層　黒褐色土　しまり有り，ロームブロック・ローム粒を多量混入
3層　暗褐色土　しまり有り，ロームブロック・ローム粒を多量混入

図23.　第30号竪穴遺構

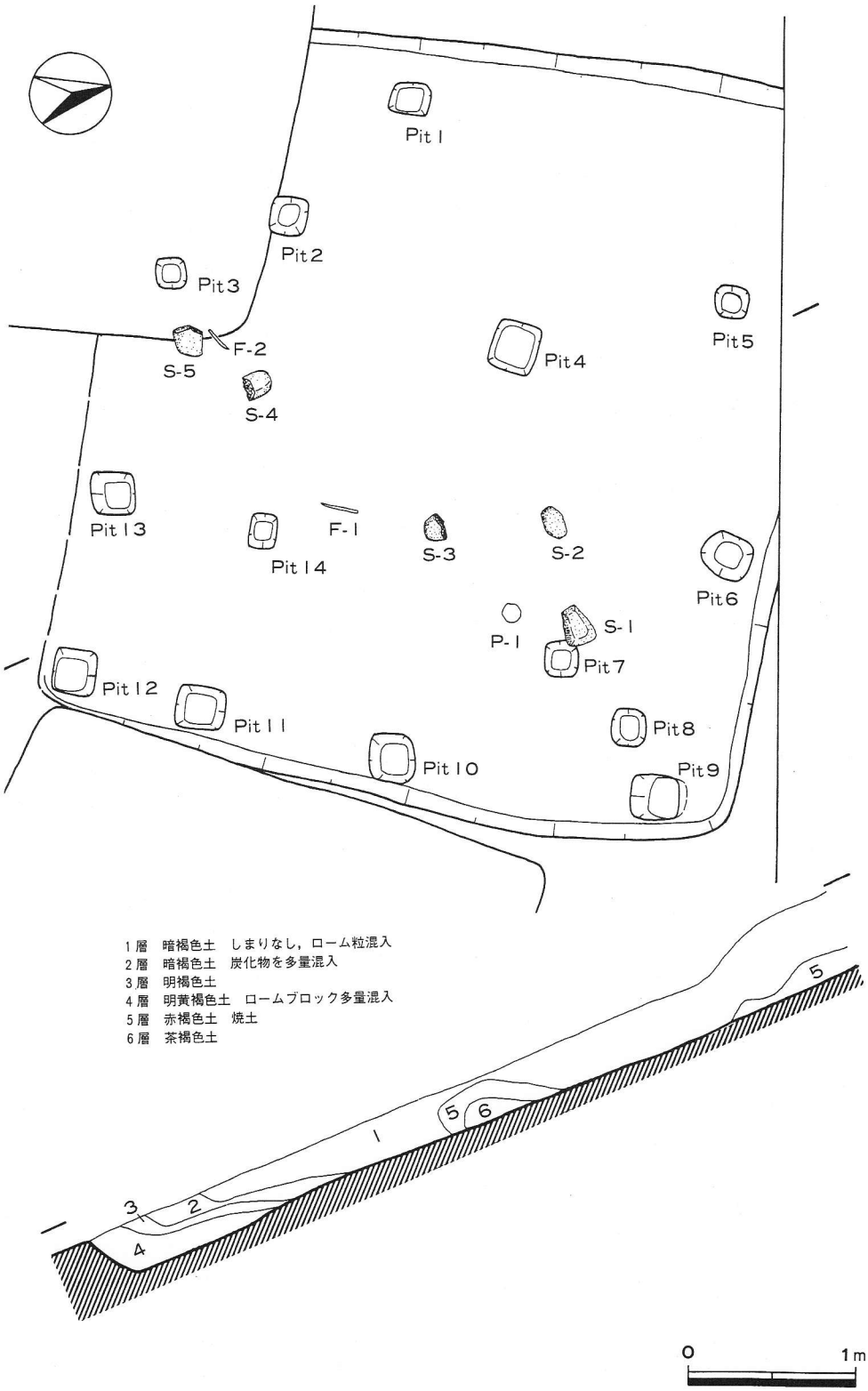


図24．第31号竪穴遺構

第32号竪穴遺構（ＳＴ32）　（図25）

〈遺構の位置と確認〉　Ｂ，Ｃ－７グリッドに位置する。第13，14，24，31，33号竪穴遺構と重複関係にあり，本遺構は第13，14，24，31号竪穴遺構より古く，第33号竪穴遺構より新しい。本遺構の西，北壁は確認できなかった。

〈形態〉　南，東壁の確認部より方形を呈すると思われる。

〈壁・床〉　東壁の壁高は18cmである。床はやや凹凸があり，堅くしまっている。

〈付属施設〉　東壁際に幅36cm，長さ110 cm，深さ14.8cmの溝と幅16cm，深さ9.3 cmのまだ北側にのびると予想される溝がある。

〈柱穴〉　遺構内一面に多数のピットを検出した。

〈覆土〉　７層に区分した。人為堆積と思われる。

〈出土遺物〉　床面より古銭（洪武通宝），小礼（図37－６）１点，自然石１点を出土した。また覆土中より青磁碗の破片１点，無文銭１点，自然石２点を出土した。

第32，33号竪穴遺構ピット一覧表（単位cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
平面形	方　形	方　形	方　形	不整方形	不整方形	方　形	方　形	方　形	不整方形	方　形	方　形	方　形
規　模	15×13	26×26	18×17	20×19	27×26	25×25	27×25	31×25	24×20	16×16	15×14	21×17
深　さ	14.0	22.6	－	8.8	28.3	57.1	31.6	39.6	7.9	10.0	35.5	20.6
Pit No.	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
平面形	方　形	方　形	不整方形	方　形	不整方形	方　形	方　形	方　形	方　形	方　形	不整方形	方　形
規　模	20×19	16×12	23×20	23×21	18×13	17×16	26×25	17×17	17×16	17×17	24×19	21×21
深　さ	11.5	10.7	17.6	9.8	8.9	9.4	18.7	8.8	17.0	19.0	25.7	42.5
Pit No.	25	26	27	28	29	30	31	32 a	32 b	33	34	35
平面形	方　形	方　形	不整円形	方　形	不整楕円形	方　形	方　形	方　形	方　形	方　形	方　形	不整方形
規　模	23×19	20×19	13×13	18×14	18×14	25×20	22×13	30×27	28×28	22×20	29×27	26×26
深　さ	11.8	12.3	8.4	6.8	10.2	15.3	20.2	36.2	42.7	23.5	11.9	13.7
Pit No.	36	37	38	39	40	41	42 a	42 b	42 c	43	44	45
平面形	方　形	不整楕円形	方　形	不整楕円形	方　形	不整方形	楕円形	楕円形	不整方形	方　形	方　形	方　形
規　模	16×15	16×14	21×18	31×30	21×18	31×30	16×13	13× 9	38×29	27×27	23×21	20×20
深　さ	12.9	10.2	32.8	23.4	32.8	23.4	64.6	55.8	25.3	32.4	27.2	18.6
Pit No.	46 a	46 b	47	48	49 a	49 b	50	51	52	53	54	55
平面形	方　形	方　形	楕円形	方　形	楕円形	楕円形	不整楕円形	不整方形	方　形	方　形	方　形	方　形
規　模	23×21	29×26	14×10	38×35	19×16	27×19	25×15	35×19	20×20	10×10	19×18	30×19
深　さ	25.9	55.9	9.8	23.3	23.6	20.4	26.1	39.5	47.6	13.7	46.7	40.2
Pit No.	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67
平面形	不整方形	方　形	方　形	不整方形	楕円形	方　形	不整方形	方　形	方　形	不整楕円形	方　形	不整方形
規　模	25×21	21×20	26×23	13×12	14×10	22×15	22×19	21×19	19×16	16×13	29×28	32×32
深　さ	9.8	13.5	44.3	5.3	18.9	14.6	22.4	18.1	19.3	30.9	15.5	20.8
Pit No.	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77		
平面形	方　形	方　形	方　形	方　形	不整方形	方　形	方　形	不整楕円形	不整方形	不整楕円形		
規　模	22×22	18×22	21×20	22×20	25×18	33×24	31×21	27×22	20×18	18×14		
深　さ	18.1	6.3	20.1	8.3	9.2	15.0	13.2	－	21.3	17.6		

第33号竪穴遺構（ＳＴ33）　（図25）

〈遺構の位置と確認〉　Ｂ，Ｃ－７グリッドに位置する。第24，32号竪穴遺構と重複関係にあり，本遺構が最も古い。北東及び北西壁は第32号竪穴遺構により破壊されている。

〈形態〉　4.10m を一辺とする方形を呈する。

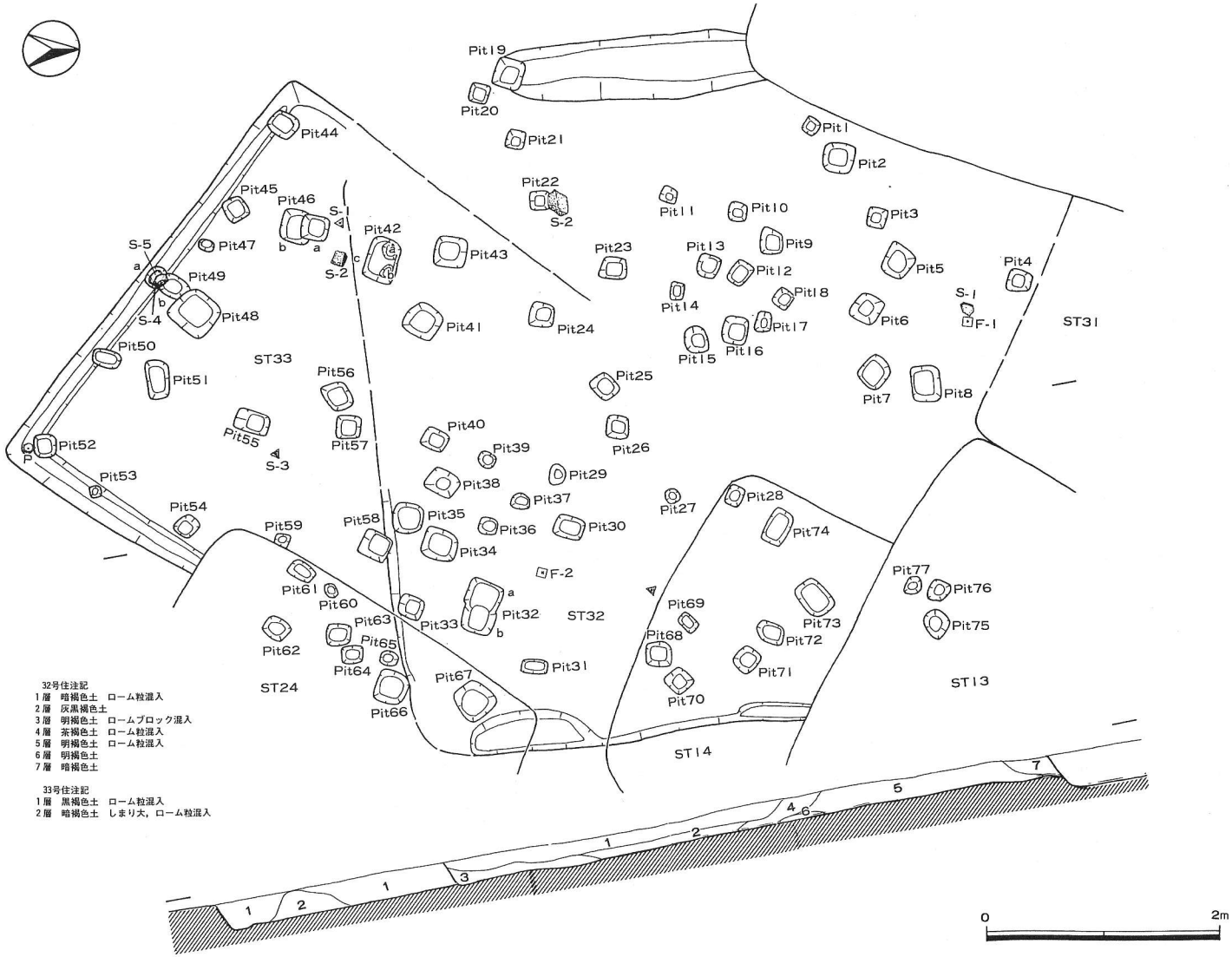


図25．第32・33号竪穴遺構

〈壁・床〉　壁はやや急な立ち上がりを呈し，壁高は東南壁21.3cm，西南壁15.0cmである。床やや凹凸があるが，堅くしまっている。

〈付属施設〉　西南壁から東南壁にかけて幅20cm，深さ３cm前後の周溝を検出した。

〈柱穴（ピット）〉　西南壁際の等間隔の５個のピット他，他数のピットを検出した。

〈覆土〉　２層に区分した。人為推積を呈する。

〈出土遺物〉　南壁隅覆土中より美濃皿底部（図35―13）１点，覆土中より自然石５点を出土した。

第34号竪穴遺構（ＳＴ34）　（図26）

〈遺構の位置と確認〉　Ｃ―３グリッドに位置する。第35号竪穴遺構と重複関係にあり，本遺構が新しい。本遺構は東西方向の幅４ｍのトレンチで確認された遺構であり，全掘してないので，その全貌は不明である。

〈形態〉　５ｍを一辺とする方形と思われる。

〈壁・床〉　壁はほぼ垂直な立ち上がりを呈し，壁高は東壁53.2cmである。床はやや平坦で，堅くしまっている。

〈付属施設〉　南壁東側に1.8×1.3ｍの出入口と思われるスロープ状張り出し部を検出した。

〈柱穴（ピット〉　南壁寄りにやや等間隔のピット４個を含め，計５個のピットを検出した。

〈覆土〉　３層に区分した。

〈出土遺物〉　床直上より小札（図37―５），鉄碗（図39―５）他，鉄製品１点を出土した。また入口状スロープ面から１対の20～30cm大の自然石が組石状（３個１組）で出土した。他に南壁際床面からも２個の自然石を出土した。

第34，35号竪穴遺構ピット一覧表（単位cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6
平面形	方　形	円　形	楕円形	楕円形	不整方形	方　形
規　模	26×30	12×11	24×17	22×15	35×33	30×25
深　さ	16.4	47.2	38.5	76.1	50.9	66.5

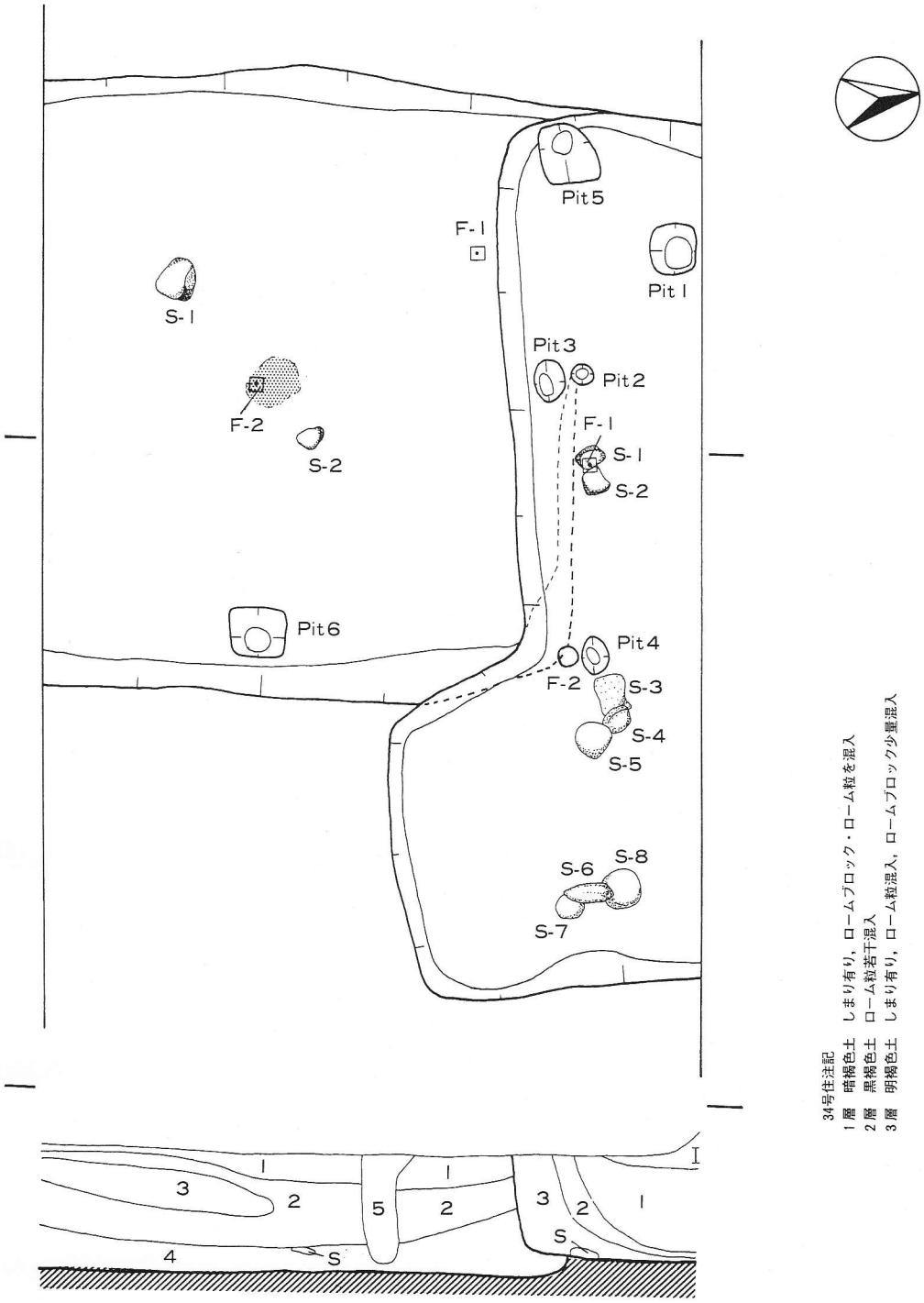
第35号竪穴遺構（ＳＴ35）　（図26）

〈遺構の位置と確認〉　Ｃ―３グリッドに位置する。第34号竪穴遺構と重複関係にあり，本遺構が古い。本遺構は東西方向の幅４ｍのトレンチで確認された。

〈形態〉　3.61ｍを一辺とする方形と思われる。

〈壁・床〉　壁は垂直な立ち上がりを呈し，東壁68,2cm，西壁64,0cmである。床はやや平坦で堅くしまっている。遺構中央部床面で32×25cmの範囲で炭化粒を確認した。

〈付属施設〉　なし



34号住注記
1層　暗褐色土　しまり有り，ロームブロック・ローム粒を混入
2層　黒褐色土　ローム粒若干混入
3層　明褐色土　しまり有り，ローム粒混入，ロームブロック少量混入

35号住注記
1層　暗 褐 色 土　しまり有り，ローム粒混入
2層　暗黄褐色土　ローム粒混入，黒色土ブロック少量混入
3層　黄　色　土　しまり有り
4層　明黄褐色土　ロームブロック・ローム粒混入，黒色土ブロック少量混入
5層　黒 褐 色 土　ローム粒少量混入

図26．第34・35号竪穴遺構

〈柱穴（ピット）〉　東壁際に方形のピット１個を検出した。

〈覆土〉　５層に区分した。自然堆積と思われる。

〈出土遺物〉　床面から鉄釘（図38－１，６）２点と15～20cm大の自然石２点を出土した。

（佐藤　樹）

（２）円形竪穴遺構（ＳＲ１）　（図27）

〈遺構の位置と確認〉　発掘区最南東端のＥ－８，９グリッドに位置する。第１号竪穴遺構と重複関係にあり本遺構が古い。東壁側約半分は土取りにより破壊され消失している。

〈形態〉　径（3.6）ｍの円形を呈する。

〈壁・床〉　壁の立ち上がりは急で，壁高は96cmである。シラス面を床面としているため，平坦であるがしまりは弱い。

〈付属施設〉　残存部からは検出されなかった。

〈柱穴（ピット）〉　なし

〈覆土〉　10層に区分した。自然堆積を呈する。

〈出土遺物〉　床面から15～20cm大の自然石37個が検出された。これらの大半のものは火を受けた痕跡がみられる。またこれらの石の下から１個の鞴羽口（図36－20）が出土した。覆土中からは自然石３個，鉄滓４点が出土した。

（３）土室状遺構（ＳＭ１）　（図28）

〈遺構の位置と確認〉　発掘区ほぼ中央のＣ－７グリッドに位置する。第25・26号竪穴遺構と重複関係にあり，本遺構が最も新しい。

〈形態〉　2.41×1.95ｍの方形を呈する。主軸方向はＮ－14°－Ｗであり，面積は4.58m²である。

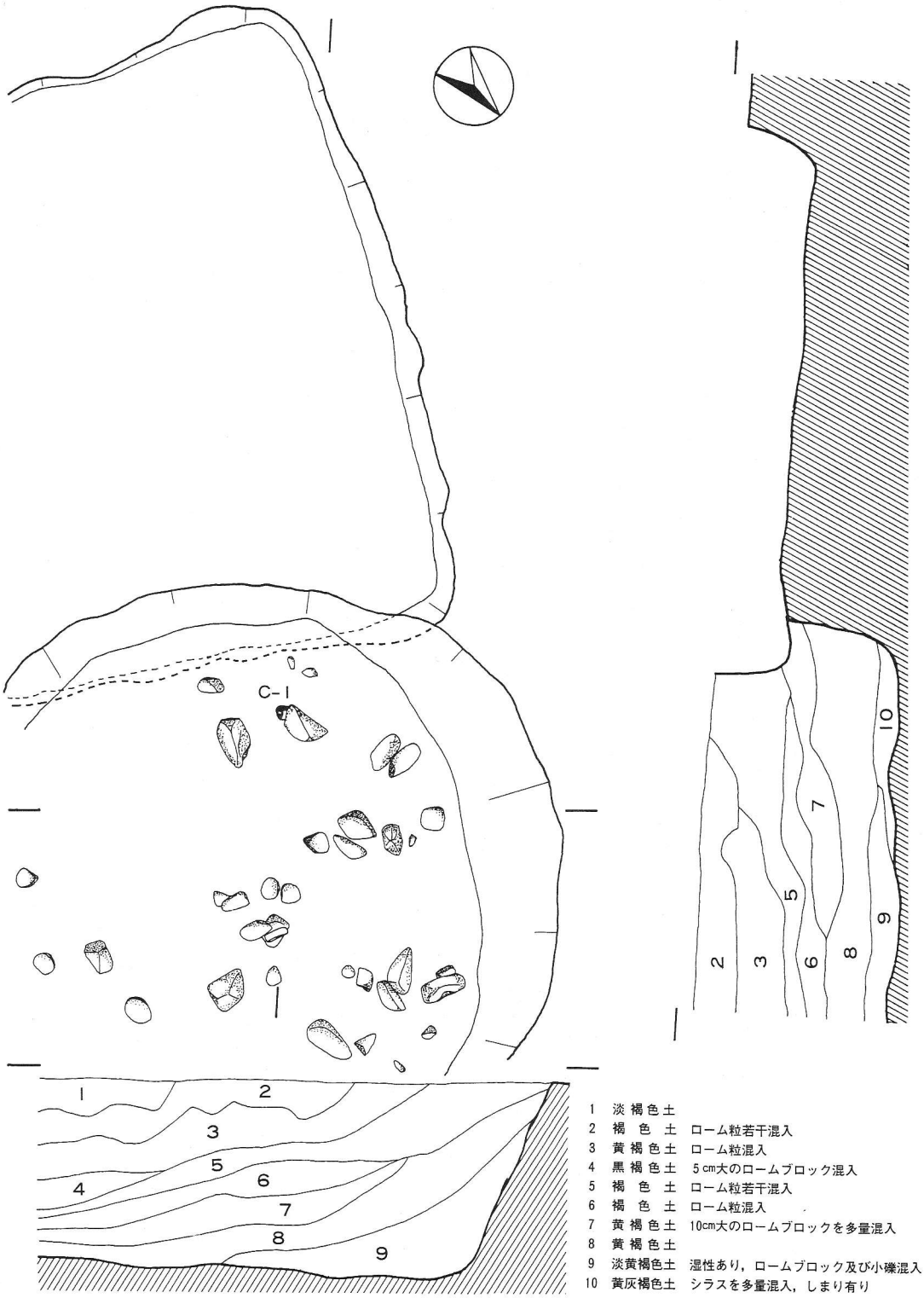
〈壁・床〉　壁は直線的に外側に入り込み，断面は台形を呈する。壁高は約１ｍである。床はほぼ平坦であり，しまりがある。

〈付属施設〉　床面から北壁（南壁）に平行な２本の丸太状の木材を検出した。北壁から35cmと南壁から30cmの位置である。これらの木材は腐壊が進んでいるが，その床面に残した圧力による痕跡から長さ1.7ｍ，径13cmと推定される。いずれも東西方向であり，隅ピット（Pit 1 or 3）から隅ピット（Pit 2 or 4）までの長さである。

〈柱穴（ピット）〉　四壁隅際にピットを検出した（Pit 1，２，３，４）。東西方向のPit 1，Pit 2間は1.55m，Pit 3，Pit 4間は1.53m，南北方向のPit 1，Pit 3間及びPit 2，Pit 4間は1.95mである。

〈覆土〉　10層に区分した。自然堆積と思われる。

〈出土遺物〉　最も遺物が多かった遺構であり，ほぼ全層から出土している。出土した遺物は



1　淡褐色土
2　褐　色　土　ローム粒若干混入
3　黄褐色土　ローム粒混入
4　黒褐色土　5cm大のロームブロック混入
5　褐　色　土　ローム粒若干混入
6　褐　色　土　ローム粒混入
7　黄褐色土　10cm大のロームブロックを多量混入
8　黄褐色土
9　淡黄褐色土　湿性あり，ロームブロック及び小礫混入
10　黄灰褐色土　シラスを多量混入，しまり有り

図27．円形竪穴遺構

美濃皿破片３点，青磁盤口縁部破片１点，白磁皿底部小破片１点，土師器片２点，弥生式土器片１点，銅製品（斧，小柄）２点，鉄製品（鉄鏃，刀子，鉄釘，留金）４点，鉄滓１点，古銭（洪武通宝他）４点，無文銭28点以上，磨製石斧１点である。これらの遺物を出土層ごとに列記すると次のようになる。床面及び床直上からの出土は斧，磨製石斧，青磁盤であり，９層から鉄釘１点，７層より美濃皿口縁部片２点，無文銭５点，鉄滓１点，自然石１点，５層より無文銭３点，弥生式土品片１点，４層より土師器片１点，鉄鏃１点，刀子１点，留金１点，判別不能古銭１点，２層より小柄１点，土師器１点である。この他に覆土一括として洪武通宝１点，判別不能古銭２点，無文銭20点以上，美濃皿口縁部片１点，土師器片１点を出土した。

土室状遺構ピット一覧表（単位cm）

Pit No.	1	2	3	4
平面形	方　形	方　形	方　形	方　形
規　模	15×12	14×13	13×12	12×12
深　さ	23.4	22.4	23.5	20.0

（秋元信夫）

（４）土坑

本遺構から土坑は計13基検出された。これらの土坑はＩ郭を東西に走る２条の溝の中央部及び南側の柱穴群の検出されたＤ，Ｅ－６，７グリッドに集中している。出土遺物が少なく，時代は不明であるが，遺構の切り合いより，溝状遺構よりは古いようである。

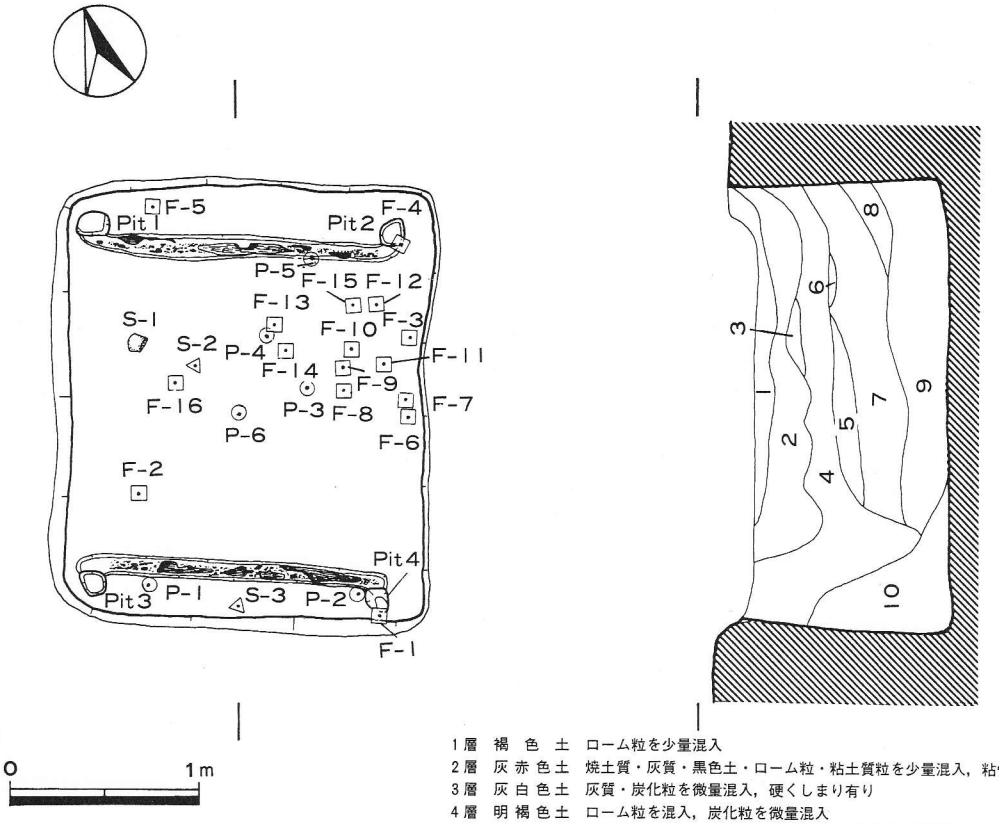
第２号土坑（ＳＫ２）　（図29）

Ｃ－７，８グリッドに位置する。1.91×1.31m の楕円形を呈し，主軸方向はN－41°－W，面積は0.96m²である。壁及び底面はレンズ状を呈し，中心部の深さは15cmである。覆土は３層からなり，自然堆積を呈する。遺構内外より計15個のピットを検出したが，その規則性はみられない。床面より青磁小破片１点，水晶製切子玉１点を出土した。南西壁際に30cm大の自然石があり，配石遺構と称すべきかもしれない。

第２号土坑ピット一覧表（単位cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
平面形	方　形	不整楕円形	方　形	不整楕円形	不整楕円形	不整方形	方　形	不整方形	不整方形	方　形	不整方形	楕円形
規　模	21×21	27×23	22×19	27×18	18×11	17×16	22×17	24×19	35×17	17×16	19×14	26×20
深　さ	10.0	31.6	15.5	18.2	12.1	24.4	32.9	19.3	16.5	14.6	34.2	25.3

Pit No.	13	14 a	14 b	15
平面形	不整楕円形	不整楕円形	不整楕円形	不整方形
規　模	24×19	20×18	36×36	29×18
深　さ	10.3	50.0	43.6	16.9



0　　1m

1層　褐　色　土　ローム粒を少量混入
2層　灰 赤 色 土　焼土質・灰質・黒色土・ローム粒・粘土質粒を少量混入，粘性有り
3層　灰 白 色 土　灰質・炭化粒を微量混入，硬くしまり有り
4層　明 褐 色 土　ローム粒を混入，炭化粒を微量混入
5層　灰 褐 色 土　灰白砂・ローム粒を混入，粘土質粒・炭化物を微量混入
6層　赤 褐 色 土　焼土質
7層　明黄褐色土　ローム粒混入，砂粒・炭化粒を微量混入
8層　黒 褐 色 土　しまりなし，ローム粒・炭化粒を微量混入
9層　暗黄褐色土　ロームブロック・粘土質ブロック・ローム粒・粘土粒混入
砂粒・炭化粒微量混入
10層　暗 褐 色 土　ローム粒・炭化粒・火山礫を少量混入

図28．土室状遺構

第３号土坑（ＳＫ３）　（図29）

Ｄ－７グリッドに位置する。第30号竪穴遺構と重複関係にあり，本遺構が新しい。0.98×0.94mの方形を呈し，主軸方向はN－42°－W，面積は0.56m²である。壁はやや緩やかな立ち上がりを呈し，壁高は約25cmである。覆土は２層からなり，自然堆積を呈する。１層より鉄製品３点（火箸１点，鉄鍋片１点他）を出土した。

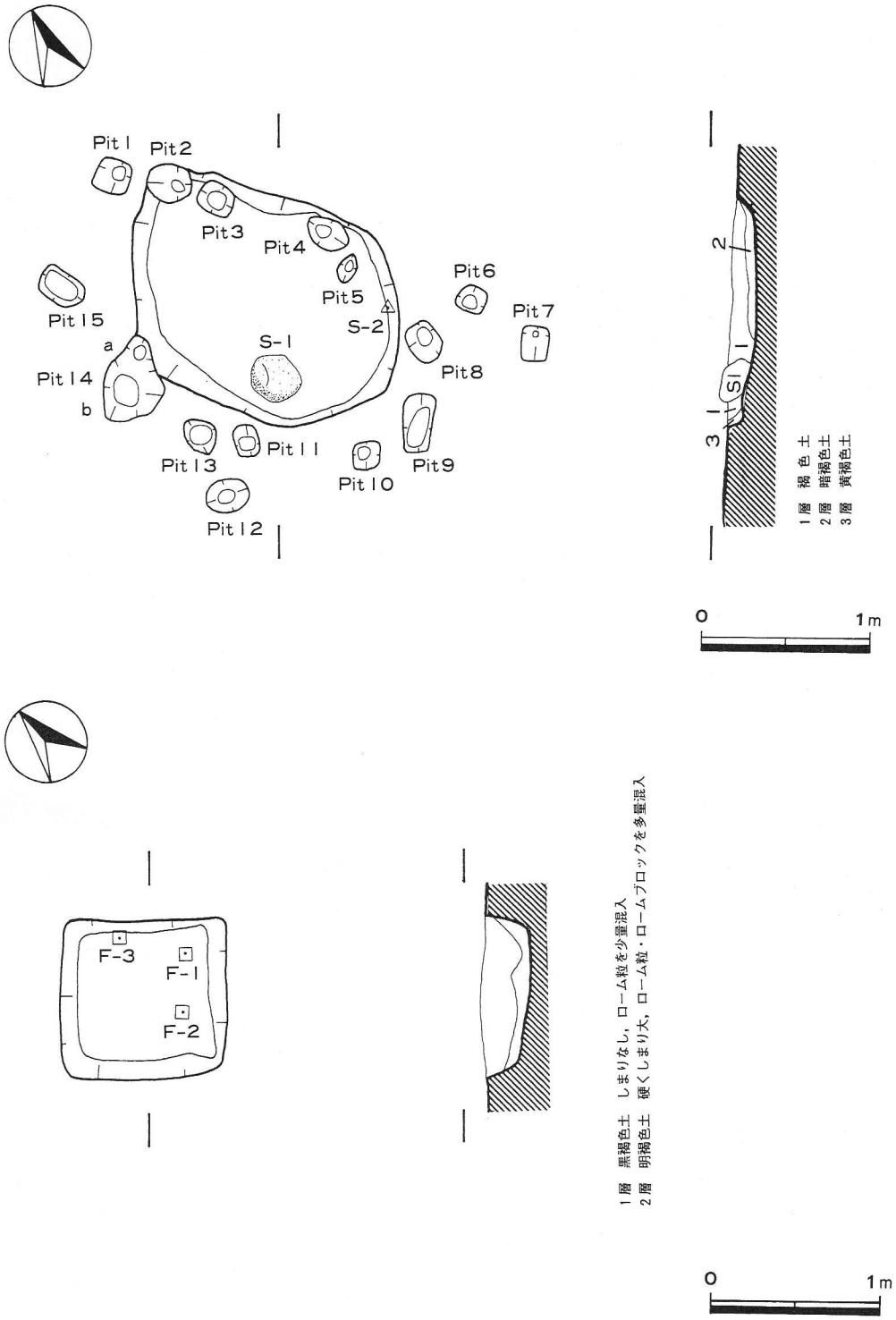

Pit1
Pit2
Pit3
Pit4
Pit5
Pit6
Pit7
Pit8
Pit9
Pit10
Pit11
Pit12
Pit13
Pit14
Pit15
a
b
S-1
S-2
F-1
F-2
F-3
SI
1
2
3
1層 褐色土
2層 暗褐色土
3層 黄褐色土
1層 黒褐色土 しまりなし，ローム粒を少量混入
2層 明褐色土 硬くしまり大，ローム粒・ロームブロックを多量混入
0
1m

図29．第２・３土坑

第４号土坑（ＳＫ４）　（図30）

Ｄ－７グリッドに位置する。第30号竪穴遺構と重複関係にあり，本遺構が古い。0.74×0.72mの円形を呈し，主軸方向はＮ－2°－W，面積は0.15m²である。壁は緩やかに立ち上がり，壁高は約54cmである。

第５号土坑（ＳＫ５）　（図31）

Ｄ－７グリッドに位置する。1.18×1.03mの楕円形を呈し，主軸方向はN－59°－W，面積は0.80m²である。壁及ぶ底面はレンズ状であり，確認面からの深さは約10cmである。

第６号土坑（ＳＫ６）　（図31）

Ｄ－７グリッドに位置し，第５，７号土坑が近接する。1.37×1.01mの楕円形を呈し，主軸方向はN－53°－W，面積は0.88m²である。壁及び底面はレンズ状であり，確認面からの深さは35cmである。覆土中より自然石２点を出土した。

第７号土坑（ＳＫ７）　（図31）

Ｄ－７グリッドに位置し，第５，６号土坑が近接する。1,51m×0.91mの不整楕円形を呈し主軸方向はN－17°－W，面積は0.76m²である。壁及び底面は鍋底状を呈し，確認面からの深さは約12cmである。

第８号土坑（ＳＫ８）　（図31）

Ｅ－７グリッドに位置し，南東近傍に第28号竪穴遺構がある。1.95×1.43mの方形を呈し，主軸方向はN－63°－W，面積は1.88m²である。壁は緩やかに立ち上がり，壁高は約16cmである。底面はやや平坦でしまりがある。覆土は人為堆積を呈する。

第９号土坑（ＳＫ９）　（図30）

Ｄ－６グリッドに位置する。2.17×0.83mの方形を呈し，主軸方向はN－72°－Wであり，面積は1.44m²である。壁はやや垂直な立ち上がりを呈し，壁高は約９cmである。底面はやや平坦で，約11cm位の落ち込みピット２個を検出した。覆土は焼土及び灰質土である。

第10号土坑（ＳＫ10）　（図32）

Ｃ－７グリードに位置する。第３号溝と重複関係にあり，本遺構が古い。2.42×1.37mの方形を呈し，主軸方向はN－56°－W，面積1.56m²である。壁は緩やかに立ち上がり，壁高は約24

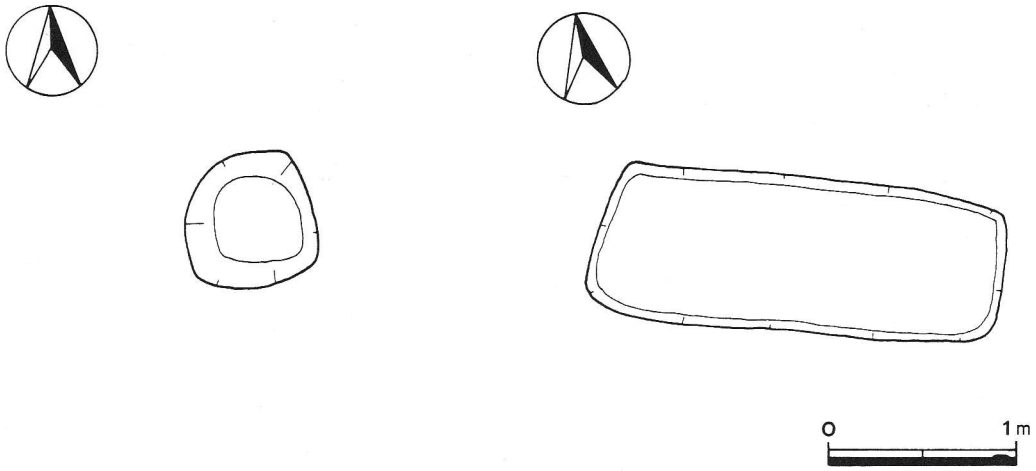


図30．第４・９号土坑

cmである。底面はやや平坦である。覆土中より10cm大の自然石６点を出土した。

第11号土坑（ＳＫ11）　（図32）

Ｃ－６グリッドに位置する。第３号溝と重複関係にあり，本遺構が古い。1.00×0.94mの不整楕円形を呈し，主軸方向はN－78°－W，面積0.40m²である。壁は緩やかに立ち上がり，壁高は約９cmである。底面はやや平坦である。

第12号土坑（ＳＫ12）　（図32）

Ｃ－６グリッドに位置する。第３号溝と重複関係にあり，本遺構が古い。1,14×0.86mの楕円形を呈し，主軸方向はN－14°－E，面積0.52m²である。薄いレンズ状を呈し，確認面からの深さは５cmである。

第13号土坑（ＳＫ13）　（図32）

Ｃ－６グリッドに位置する。第３号溝，第14号土坑と重複関係にあり，本遺構が最も古い。1.06×（8.2）mの方形を呈し，主軸方向はN－60°－W，面積は0.56m²である。壁は緩やかに立ち上がり，壁高は約７cmである。底面はほぼ平坦である。

第14号土坑（ＳＫ14）　（図32）

Ｃ－６グリッドに位置する。第２号溝，第13号土坑と重複関係にあり，本遺構は第13号土坑

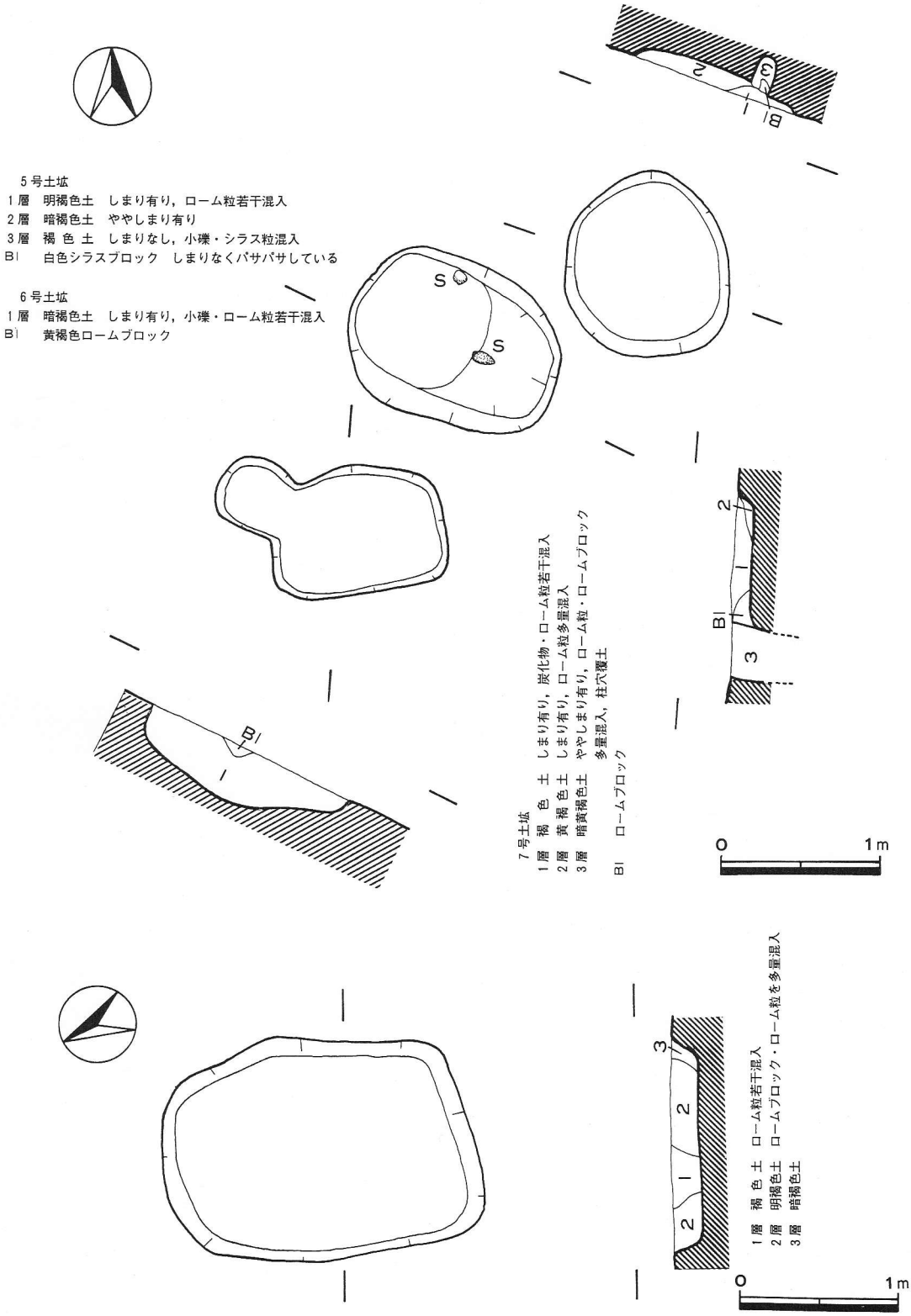


図31．第5・6・7・8号土坑

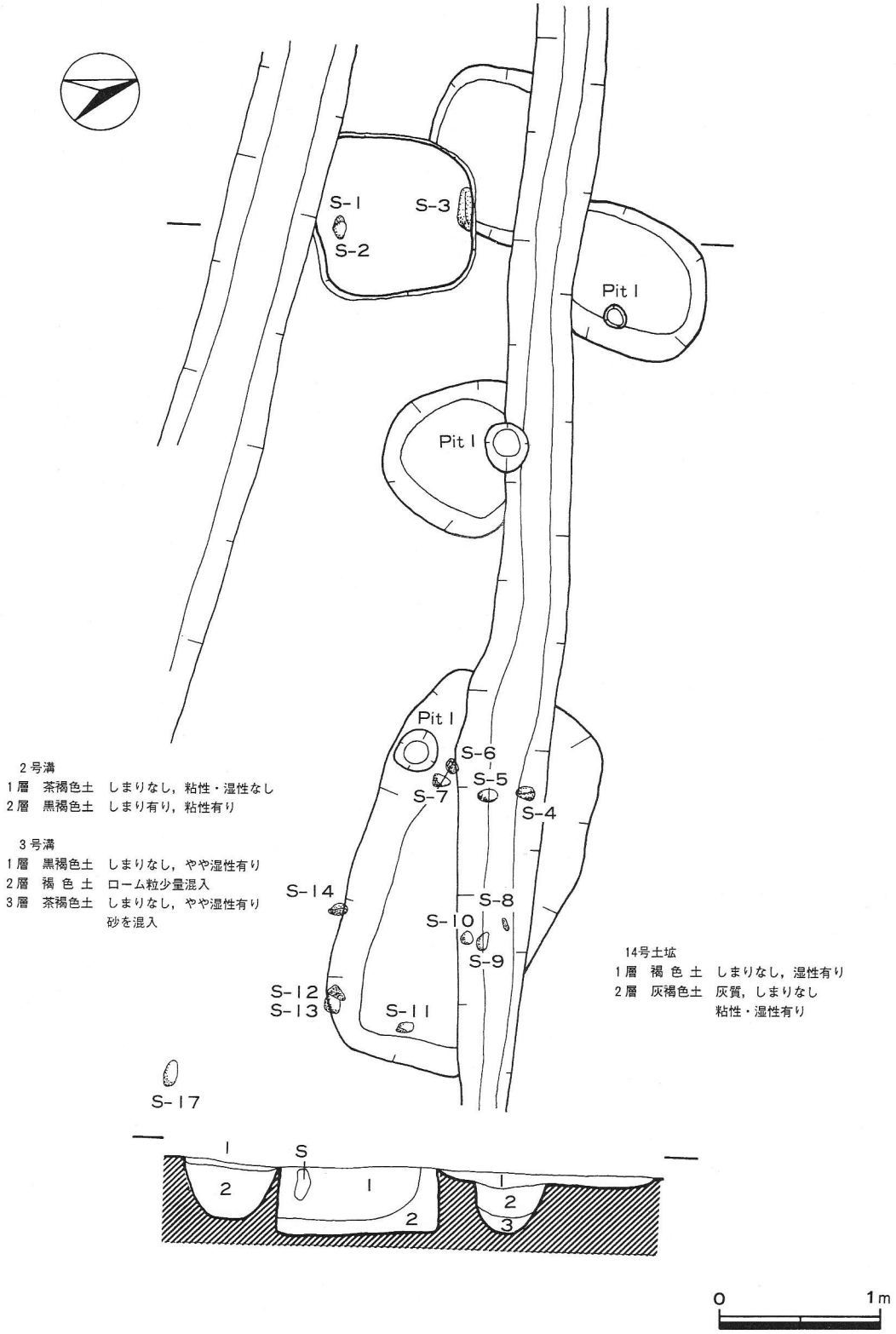


図32．第10・11・12・13・14号土坑

より新しく，第２号溝より古い。1.03m ×1.02m の方形を呈し，主軸方向はN－35°－E，面積0.88m²である。壁はやや外側に入り込み，壁及び床の断面は台形を呈する。壁高は約48cmである。覆土中より10～25cm大の自然石３点を出土した。

（菊池　明）

（５）溝状遺構

Ｉ郭を南北に二分するような東西方向の溝２条が40～45cmの間隔で平行に検出された。Ｉ郭両側は未発掘であるが，これらの溝は西側端まで続くものと考えられる。東側も土取りにより破壊され，消失しているが，第１次調査でも同様の溝が検出されていることから，これらに続くものと思われる。出土遺物は少なく時期は不明であるが，重複関係から本遺跡検出遺構中最も新しいものと考えられる。

第１号溝状遺構（ＳＤ１）

Ｉ郭を南北に二分するように東西方向にＢ－５～Ｄ－９グリッドで検出された。第１号竪穴住居跡，第２，３，18a 号竪穴遺構と重複関係にあり，本遺構が最も新しい。溝幅は50～60cm深さ30～40cmである。標高が西から東側にいくにつれ低くなることから，西から東への流水が考えられる。覆土は３層に区分でき，自然堆積を呈する。覆土中より鉄釘（図38－８）１点，鉄滓２点，自然石数点を出土した。

第２号溝状遺構（ＳＤ２）

第１号溝状遺構と平行で，第１号溝の南側40～45cmに位置する。第14号土坑と重複関係にあるが，本遺構が新しい。溝底面の地点による標高差はほとんどない。覆土は２層に区分でき，自然堆積を呈する。覆土中より鉄滓１点，自然石数点を出土した。

第３号溝状遺構（ＳＤ３）

発掘区ほぼ中央のＣ－６，７グリッドに位置し，第１，２号溝を結ぶ小溝である。第10～13号土坑と重複関係にあり，本遺構が最も新しい。溝幅は25～45cm，深さ20～45cmである。標高差から第１号溝から第２号溝方向への流水と考えられる。覆土中より10～15cm大の自然石数点が出土した。

（菊池　明）

図33. 柱　穴　群

（6） 柱穴群（堀立柱建物跡） （図33）

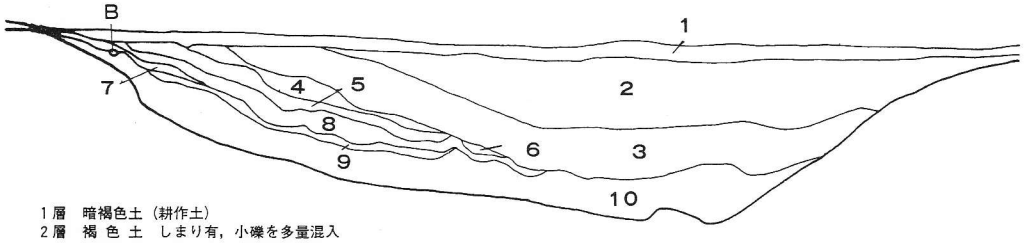
東西に走る２条の溝の南（Ｄ，Ｅ－６，７グリッド）から326個のピットが検出された。平面形は方形を呈するものが大部分であり，規模は20～25cm程度のものが多い。深さは8.1cmから73cmのものまである。柱痕の確認されたものが４例あり，径10～12cmの円形を呈する。またピット上面から礫を検出したものが３例，ピット底面から礫を検出したものが２例ある。

これらのピットは重複関係，ピットの広がりから３軒以上の掘立柱建物を形成すると思われるが，木の根による攪乱を受けている地点であり，その規則性をつかむことができなかった。

Pit95から白磁碗口縁部片，美濃皿口縁部片それぞれ１点，Pit147から志野鉢１点，Pit175より美濃皿口縁部片１点を出土した。

（秋元信夫）

第１号空堀セクション図 （図34



1層 暗褐色土（耕作土）
2層 褐 色 土 しまり有，小礫を多量混入
3層 明褐色土 しまり有，小礫を多量混入，ローム粒若干混入
4層 淡黄褐色土 しまり大，ローム粒，炭化物若干混入
5層 灰白色土 しまり非常に大，シラス，炭化物若干混入
6層 淡明褐色土 しまり弱い，ローム粒若干混入
7層 淡黄褐色土 しまり有，シラス中に若干ローム粒混入
8層 褐 色 土 しまり弱い，ローム粒，炭化物混入
9層 灰白色土 しまり大，シラス中に浮石混入
10層 灰褐色土 しまり大，シラス，浮石，礫を混入，部分的に砂質
B. ロームブロック

図34．第１号空堀セクション図

中世建物跡柱穴測定表

※眼高89cm（標高 149.142m），柱穴の深さは眼高からの数値である。（単位cm）

PitNo.	径	深さ	形態	確認面下	備考
1	20×19	161.3	方形	13.1	
2a	18×17	168.2	方形	24.8	
b	21×20	181.2	方形	37.8	
3a	37×24	205.2	不整楕円形	59.7	
b	27×24	163.6	方形	18.1	
4	19×19	183.0	方形	39.4	
5	26×24	195.2	不整方形	51.6	
6	24×22	200.5	方形	56.9	
7	21×19	160.8	不整方形	17.2	
8a	42×27	201.2	不整方形	60.3	
b	29×27	203.5	方形	59.9	
9	23×21	166.2	方形	25.3	
10a	13×13	170.8	方形	21.1	
b	24×22	167.6	方形	11.6	
11a	31×29	209.5	方形	59.8	
b	18×12	194.7	不整円形	45.0	
12	39×34	166.2	方形	11.1	
13	17×15	167.6	方形	17.9	
14	19×18	172.0	方形	27.0	
15a	23×22	206.0	方形	65.1	
b	15×13	166.7	方形	25.8	
c	18×18	156.9	方形	16.0	
16	23×22	168.4	方形	27.5	
17a	29×26	176.6	方形	32.3	
b	18×18	153.0	方形	8.7	
18	21×16	163.4	不整方形	18.2	
19	26×23	187.7	方形	45.3	
20	24×22	179.3	方形	35.5	
21	19×18	201.7	方形	57.7	
22	27×22	176.3	方形	26.5	
23	24×24	184.8	方形	35.3	
24a	23×23	199.5	方形	55.5	
b	24×21	198.3	不整方形	54.2	
c	25×18	165.4	不整楕円形	21.4	
25a	27×18	210.1	不整方形	67.7	
b	22×20	208.8	方形	66.4	
26	27×19	184.7	不整方形	42.3	
27	18×17	173.5	方形	31.1	
28	28×21	180.7	不整方形	36.4	
29	26×24	183.1	方形	38.6	
30	17×16	153.1	方形	3.1	
31	20×22	163.9	方形	17.5	
32	26×24	199.3	方形	52.9	
33	17×17	153.1	方形	3.1	
34	33×21	168.3	不整方形	23.8	
35	23×20	212.5	方形	59.8	
36	21×21	206.4	方形	53.7	
37	23×21	171.5	方形	17.7	
38	16×16	170.5	方形	17.8	
39	34×26	210.3	不整方形	57.6	
40	23×23	188.3	方形	35.6	
41	52×35	216.4	不整方形	70.0	
42	21×20	162.4	方形	16.0	
43	15×15	161.0	方形	14.6	
44	16×15	165.1	方形	17.0	
45a	27×24	192.3	方形	44.2	
b	27×24	172.4	方形	24.3	
46	23×23	196.1	方形	39.5	
47	23×22	206.4	方形	52.6	
48	27×23	198.4	方形	44.3	
49	20×19	171.4	方形	17.6	
50	33×28	223.0	方形	67.5	
51	28×22	207.6	方形	47.5	
52a	31×21	226.9	不整方形	66.8	
b	24×20	200.4	不整方形	40.3	
53	24×24	189.2	方形	27.9	
54	29×29	208.5	方形	47.2	
55	28×28	184.2	方形	24.2	
56	23×22	180.4	方形	22.4	
57	29×24	173.6	方形	15.6	
58	30×26	220.3	方形	63.3	
59	19×19	187.1	方形	30.5	
60	24×24	215.1	方形	58.3	
61a	16×15	182.7	方形	25.2	
b	14×13	186.7	方形	29.2	
62	22×20	196.6	方形	39.1	
63a	24×22	194.2	方形	36.7	径12cmの円形の柱痕を確認
b	27×27	188.4	方形	30.9	
64	21×19	196.0	方形	35.3	
65	14×14	176.1	円形	15.4	
66a	26×23	186.3	方形	25.6	
b	43×27	187.2	不整方形	26.5	
67	37×31	223.0	不整楕円形	67.5	
68a	42×40	191.6	方形	37.4	
b	20×19	182.4	方形	28.2	
69a	21×20	197.4	方形	43.1	
b	20×19	184.8	方形	30.5	
70	27×25	193.8	方形	37.5	
71	25×25	191.0	方形	39.2	
72	26×21	165.2	方形	14.2	
73a	26×26	166.4	不整円形	15.4	
b	28×27	185.5	方形	34.5	
74	20×20	205.8	方形	51.4	
75	25×22	179.2	不整方形	28.2	
76	30×30	221.0	方形	65.2	
77	22×18	178.1	不整円形	24.3	
78	31×30	188.0	方形	34.2	
79	27×26	205.9	方形	52.8	
80	18×18	170.8	方形	11.7	
81	19×18	192.2	方形	33.1	
82	24×22	191.6	方形	37.1	
83	26×22	172.3	方形	20.0	
84	21×17	164.7	方形	10.2	
85	23×19	202.6	方形	50.2	
86	14×13	165.3	方形	13.5	
87	26×20	194.9	方形	42.0	
88	24×22	166.2	楕円形	14.4	
89a	27×26	195.4	方形	41.4	
b	21×19	178.3	方形	24.3	
c	31×20	178.7	方形	24.7	
90	26×22	197.2	方形	44.3	
91	41×36	154.8	楕円形	24.5	
92	20×18	167.0	方形	12.2	
93	25×23	176.0	方形	21.4	

PitNo.	径	深さ	形態	確認面下	備考
94	16×15	169.5	方形	15.3	
95	27×23	229.2	方形	68.5	ピット内より白磁碗口縁,美濃皿口縁
96	28×26	184.0	方形	22.0	
97	20×27	180.7	方形	24.3	
98	33×32	181.0	方形	19.8	
99	18×17	175.3	方形	14.7	
100a	21×18	187.3	方形	28.3	
b	21×21	189.4	方形	30.4	
c	61×53	177.6	方形	18.2	
101	21×16	175.5	方形	18.7	
102	19×19	173.8	方形	13.6	
104	23×20	180.0	方形	19.8	
104	23×23	194.3	円形	30.0	
105	36×25	214.9	方形	50.6	
106	31×31	190.3	方形	28.3	
107	17×14	189.4	方形	27.4	
108a	37×33	212.1	方形	50.1	ピット上より16cm大の角礫
b	25×24	182.7	方形	20.7	
109	18×16	192.3	方形	31.9	
110	22×20	197.1	方形	36.7	
111a	26×24	202.9	方形	44.9	
b	23×20	175.1	方形	20.5	
112	34×22	194.5	不整方形	39.9	
113	23×21	198.5	方形	43.6	
114a	24×23	205.9	方形	51.3	
b	29×19	196.9	楕円形	42.3	
115	19×17	175.0	方形	20.4	
116	34×24	180.5	方形	17.5	
117	20×19	201.6	方形	38.2	
118a	24×20	201.8	方形	35.5	
b	25×21	197.9	方形	31.6	
119a	22×21	189.8	方形	23.5	
1 b	21×21	185.2	方形	18.2	
120	20×17	194.0	方形	27.0	
121	23×23	208.7	方形	41.7	
122	31×29	209.5	方形	47.5	
123a	26×25	212.2	方形	43.2	
b	25×24	200.9	方形	31.9	
124	18×16	192.2	方形	14.9	
125	20×20	206.2	方形	24.9	
126	17×16	176.6	方形	14.6	
127	32×30	231.3	不整楕円形	62.0	
128	23×23	188.5	円形	11.2	
129	20×20	206.9	方形	34.6	
130	26×19	194.3	方形	21.4	
131	17×14	226.3	不整方形	53.4	
132	26×26	221.3	方形	41.3	
133	23×18	207.5	方形	31.9	
134	23×20	214.6	不整方形	39.0	
135	18×17	200.3	方形	25.0	
136	23×21	207.0	方形	25.7	ピット上に20cm大の自然石を確認
137	20×20	209.1	方形	31.8	
138	21×19	209.7	方形	32.4	
139	29×26	197.3	方形	23.6	
140	23×23	201.1	方形	32.1	
141	30×24	209.6	方形	35,9	
142	23×20	187.3	方形	18.3	
143a	29×26	190.7	方形	24.9	
b	26×26	208.9	円形	43.1	
144	31×29	213.9	方形	48.1	
145a	28×27	181.1	方形	46.7	
b	29×27	214.3	方形	50.0	
146	20×20	209.7	方形	41.2	

PitNo.	径	深さ	形態	確認面下	備考
147	24×23	199.8	方形	39.2	ピット内より志野鉢を出土(P－3)
148	21×21	209.7	方形	48.3	
149	20×18	180.6	方形	19.2	
150	21×19	197.4	方形	36.0	
151a	25×23	247.0	方形	82.7	
b	30×28	202.2	方形	37.9	
152	26×25	215.4	方形	49.6	
153	19×16	188.8	方形	23.0	
154	15×15	180.3	方形	15.1	
155	36×32	203.0	方形	37.2	
156	24×23	207.1	方形	37.8	
157a	21×21	242.3	方形	65.0	
b	24×21	204.5	方形	30.9	
158	19×18	200.3	方形	26.7	
159	18×17	175.8	方形	20.2	
160	23×20	195.8	円形	16.4	
161	38×24	226.0	不整楕円形	47.8	
162a	31×29	－	方形	－	底面に22cm大の自然石を確認
b	22×20	211.8	方形	33.2	
163	26×22	213.5	方形	34.9	
164	24×19	187.0	円形	12.1	
165	48×43	230.7	楕円形	62.8	ピット近くに16cm大の角礫を確認
166	25×22	213.2	方形	42.3	
167	23×21	192.4	円形	24.5	
168	26×24	210.4	方形	42.5	
169	15×15	184.7	方形	16.8	
170	27×21	213.4	方形	45.5	
171	27×21	190.3	円形	11.7	
172a	32×27	222.7	方形	52.1	径11cmの円形の柱痕を確認
b	24×20	203.0	方形	32.4	
173	22×20	192 .6	方形	14.0	
174	24×19	203.7	楕円形	33.1	
175	34×25	228.1	方形	53.9	ピット内より美濃皿口縁部出土(P－2)
176	20×19	186.9	方形	12.7	
177	14×14	202.0	方形	27.8	
178	33×32	231.5	方形	57.4	
179	17×17	194.7	方形	20.5	
180	26×18	220.9	方形	46.6	
181	18×14	204.3	方形	30.1	
182	41×31	250.7	楕円形	77.4	
183	31×26	195.7	円形	22.1	
184	34×30	202,9	方形	31.6	
185a	25×21	218.9	方形	45.3	
b	15×13	183.4	楕円形	9.8	
186	19×17	190.0	方形	20.2	
187	22×22	211.4	方形	42.1	
188	46×39	186.5	方形	17.2	径11cmの円形の柱痕を確認
189a	26×25	238.1	方形	68.8	
b	30×27	237.6	楕円形	68.3	
190	16×15	178.3	円形	12.2	
191a	21×21	203.8	方形	38.1	底面近くから12cm大の自然石を出土
b	20×19	197.4	楕円形	31.7	
192	22×18	189.9	方形	24.2	
193	16×15	189.1	方形	23.4	
194a	24×23	198.8	方形	34.5	
b	25×25	190.7	方形	26.4	
c	24×24	221.2	方形	56.9	
d	25×24	196.8	方形	32.5	
195	31×26	203.5	方形	39.2	
196	21×20	187.3	方形	19.7	
197	19×18	203.7	方形	37.6	
198a	22×22	193.7	方形	27.6	
b	30×28	184.1	不整方形	18.0	

PitNo.	径	深さ	形態	確認面下	備考
199	20×19	178.0	方形	13.1	
200	24×24	192.5	方形	27.6	
201	31×28	219.5	方形	54.6	
202	23×22	195.8	方形	26.0	
203a	21×21	209.0	方形	39.2	
b	20×18	199.5	方形	29.7	
204a	26×25	224.6	方形	54.8	
b	24×24	219.6	方形	46.3	
205	19×17	202.6	方形	29.3	
206	21×21	221.8	方形	52.0	
207	13×12	195.0	円形	21.4	
208	18×18	182.8	方形	9.2	
209a	31×29	216.3	方形	48.0	
b	30×28	205.4	方形	38.2	
210	29×19	195.1	方形	26.8	
211	29×29	192.7	円形	26.4	
212	30×20	223.3	方形	57.0	
213a	23×22	195.5	方形	29.2	
b	23×23	194.2	不整円形	27.9	
214	26×26	212.4	方形	46.3	
215	25×23	207.3	方形	40.0	
216	25×19	216.7	方形	44.4	
217	23×20	202.6	方形	28.1	
218	17×16	184.8	方形	11.3	
219	22×21	211.8	方形	38.3	
220	23×21	222.7	方形	54.1	
221a	22×20	193.6	方形	26.3	径10cmの円形の柱痕を確認
b	19×19	191.3	方形	24.0	
222	19×18	242.3	方形	73.0	
223	28×27	210.4	方形	36.6	
224	14×11	195.5	方形	15.7	
225a	28×28	210.3	不整円形	37.0	
b	25×23	205.4	方形	32.1	
c	23×22	203.8	方形	30.5	
d	34×29	209.6	方形	36.3	
e	22×21	202.6	方形	29.3	
226	27×26	208.0	方形	33.7	
227	66×54	196.1	楕円形	24.4	
228	25×18	185.8	方形	12.5	
229	21×18	209.1	方形	35.8	
230	19×18	210.5	方形	37.2	
231	25×18	234.7	方形	62.4	
232	12×9	212.3	不整方形	40.0	
233	19×17	222.4	円形	50.1	
234	29×24	208.8	方形	37.5	
235	24×21	—	方形	—	
236	14×14	205.1	方形	27.4	
237	17×16	219.3	方形	51.4	
238	19×18	218.7	方形	50.9	
239	30×26	224.2	円形	52.0	
240a	25×23	213.6	方形	44.4	
b	15×	200.6	方形	31.4	
241	19×17	200.7	方形	31.5	
242	24×23	174.8	方形	3.5	
243	20×20	190.4	円形	19.1	
244	21×20	205.6	方形	36.3	
245	22×20	219.6	方形	51.3	
246	17×15	200.8	方形	33.4	
247	24×23	—	方形	—	
248	23×23	209.3	方形	38.4	
249a	53×43	225.5	不整円形	58.5	
b	24×	200.6	方形	33.6	
250	18×16	181.3	方形	14.3	
251	20×19	214.7	方形	46.5	
252a	24×23	—	方形	—	
b	23×21	191.0	方形	21.6	
253	26×24	187.5	方形	17.8	
254a	15×13	239.7	方形	69.6	
b	59×56	232.5	不整方形	62.4	
255	19×17	192.2	方形	25.4	
256	22×20	219.3	方形	52.5	
257	23×22	201.7	方形	34.9	
258	26×24	198.5	方形	32.3	
259	24×23	165.7	方形	31.0	
260a	24×20	197.7	方形	32.0	
b	30×28	196.3	不整方形	30.6	
261	25×23	223.6	方形	55.0	
262	27×20	221.9	不整楕円形	53.1	
263	24×23	202.8	方形	36.6	
264	26×25	207.2	方形	41.0	
265	27×27	206.0	方形	39.8	
266a	23×20	200.5	方形	25.2	
b	21×19	212.2	方形	36.9	

第Ⅴ章　出　土　遺　物

本年度の調査によって出土した遺物は陶磁器，土器，金属製品，石製品等計370点余りである。1600m²の発掘面積，検出遺構56基の割には量的に少ない感がする。出土遺物を種別ごとにみると，金属製品とりわけ無文銭の出土量が多い。弥生式土器片，土師器等，若干の中世以外の遺物を出土しているが，大半のものは館期（室町～安土桃山時代）の遺物と考えられる。これらの遺物は，表土直下及び遺構覆土中から出土しており，土室状遺構，竪穴遺構からの出土量が多い。

1．陶磁器（図35～36）　（ＰＬ12，13）

本遺跡からは，舶載陶磁器として青磁，白磁，染付（青花），褐釉，国産陶磁器として美濃，志野等が出土している。また県内産と思われる陶器類も若干出土している。

青磁（図35－４～８）　（ＰＬ12－１～５）

５点の出土であり，すべて破片である。器形は碗と盤のみで，碗が４点である。

図35－７は青磁碗の口縁部片であり，外面には雷文，内面には刻線による文様と押印が施こされている。推定口径は16.0cmである。15世紀のものと考えられる。

図35－６も青磁碗の破片であり，内・外面に刻線による文様が施こされている。外面の文様はやや太めで直線的であり，内面は細い曲線的なものである。第32号竪穴遺構１層（Ｐ－１）からの出土である。14～15世紀のものと考えられる。

図35－８は青磁盤の口縁部破片であり，推定口径は22cmである。土室状遺構床直上から，斧，磨製石斧と共に出土した。15世紀のものと考えられる。

図35－４，５は小片であり，器形を決めがたいが，碗であろうと考えられる。第２号土坑底面及び第20号竪穴遺構覆土からの出土である。いずれも15世紀のものと考えられる。

白磁（図35－１～３）　（ＰＬ６，７，10）

皿２点，碗２点の計４点の出土であり，いずれも破片である。

図35－１は高台部分のみであるが，厚手であることから碗になるものと思われる。高台径4.4cm，高台高さ0.45cmである。第15号竪穴遺構覆土からの出土である。

図35－２は皿の底部破片である。推定底部径は6.3cmである。第29a 竪穴遺構床面からの出土である。

図35－３は白磁皿の口縁部破片であり，推定口径12.1cmである。色調はくすんだ灰色を呈し，釉は底部まで達していない。注穴群Pit95の柱穴内より出土した。

図35－３が12～14世紀，他の３片は16世紀のものと考えられる。

染付（図35－9，10）　（ＰＬ12－8・9）

碗破片２点の出土であり，いずれもＤ－８グリッド，Ｉ層下面より出土している。

図35－９は碗口縁部破片であり，推定口径は9.8㎝である。外面に草花文が施こされている。

図35－10は碗口縁部付近破片である。小片のため文様の詳細は不明であるが，口縁部に直線的な線により描かれている。

９，10とも16世紀のものと考えられる。

褐釉（図35－11）　（ＰＬ12－11）

１点のみの出土で，第８号竪穴遺構床面からの出土である。鉢の口縁部であろうか？15～16世紀のものと考えられる。

美濃（灰釉陶器）（図35－11～20）　（ＰＬ12－13～20）

本遺跡出土陶磁器類で最も出土量が多く，10点の出土である。器形はすべて皿であり，１点の菊皿（図35－20）以外すべて丸皿である。濃い緑色の釉調を示すものと淡い黄緑色のものがある。釉が一様でなかったり，輪ドチが残っていたりして粗雑な作りのものが目につく。図35－13には輪ドチが付着している。また図35－15の見込み中央部及び図35－17の底部は無釉となっており，重ね焼きを物語っている。

これらの遺物は，12～15，17～19が16世紀前半，16，20が16世紀後半のものと考えられる。

遺構別にみると，土室状遺構からの出土が多く，３点，柱穴群ピット内から２点，第８，28，31，33号竪穴遺構及びＤ－８グリッドＩ層から，それぞれ１点づつの出土である。

各遺物の出土区及び計測値は下記のとおりである。

美濃一覧表（単位：㎝）

図 No.	ＰＬ No.	出土区	層位	口径	底径	高さ
35－12	12－19	ＳＴ31　Ｐ－１	床面		6.1	
35－13	12－20	ＳＴ33　Ｐ－２	覆土		6.1	
35－14	12－13	ＳＭ１　Ｐ－５	７層	9.0		
35－15	12－18	ＳＴ８　Ｐ－１	床直	10.0	6.2	2.1
35－16	12－14	ＳＭ１	覆土	10.8		
35－17	12－22	ＳＴ28	Pit２内	10.3	6.1	2.6
35－18	12－16	柱穴群	Pit 175	9.3		
35－19	12－15	柱穴群	Pit 95	9.8		
35－20	12－17	ＳＭ１　Ｐ－４	７層	13.0		
	12－21	Ｄ－８	Ｉ層			

志野（図36－１，２）　（ＰＬ13－２，11）

志野は鉢１点，皿１点の計２点出土した。

図36－１は皿の底部破片であり，推定底径は7.6㎝である。17世紀前半のものと考えられる。

図36－２は鉢である。浅鉢で，底面に粘土紐で作った足がついている。残存する１個及びはがれた痕跡の位置から３～６個の足が付くものと思われる。見込みには笹，内面側縁には草文

の鉄絵が施こされている。推定口径16.2cm，底径9.6cm，器高3.9cmである。柱穴群Pit147内からの出土である。16世紀末から17世紀初頭のものと考えられる。

その他の陶碰器類（図36－3～12）

図36－3は唐津と思われる碗の口縁部破片である。淡い褐色の胎土で，釉は灰白色である。推定口径9.8cm，B－9グリッドI層からの出土である。

図36－4は鉢の底部片である。灰色の緻密な胎土で，淡い緑色の灰釉が底部以外にかれられている。類例がなく生産地は不明である。

図36－5～12は県内産と思われる陶器片である。甕か壺の破片であり，2個体分と思われる。胎土は灰色で，やや大きめの石英粒と黒色の鉱物粒を混入している。5，6の表面及び9の底部内には灰がまだら状にかかり，白色を呈している。胎土及び器形より，5～9が同一個体と考えられる。これらの陶器は第15，17，20号竪穴遺構からの出土である。男鹿市船川港双六字館山の館山遺跡（館跡），船川港門前の永禅院跡（寺跡）から類似の陶器を出土している。

2．土器・土製品（図36－13～20，図43）　（PL14－1～9，12～15）

弥生式土器（図36－13～17）　（PL14－1～4）

5点の出土であり，いずれも小破片である。

図36－13は鉢口縁部付近破片であり，外面に2条の結節回転文が横走し，その間に羽状縄文が施こされている。内面は横位調整である。第19号竪穴遺構からの出土である。

図36－14は，外面上部に横方向の一条の沈線と山形または菱形の一部と思われる沈線文が施こされている。またその下に結節回転文が横走している。土室状遺構からの出土である。

図36－15～17は縦位または斜位方向の撚糸文が施こされている土器である。土室状遺構，第19，14号竪穴遺構からの出土である。

これらの土器は，弥生時代後期の小坂X式と考えられる。

須恵器（図36－18）　（PL14－14）

須恵器の出土は1点のみで，壺の胴部破片と思われる。外面には斜位のタタキ目，内面には，横位調整が施こされている。C－8グリッドI層の出土である。

土師器（図43）　（PL14－5～9，13）

土師器は第1号竪穴住居跡，カマド遺構及び土室状遺構等から若干出土している。すべて甕の破片であり，個体数は6～8個体と思われる。

図43－1a，1bは甕の口縁及び底部破片である。胎土及び器形から同一個体と考えられる。口縁は先細となり，若干内曲している。調整は口縁部は横ナデ，胴部はヘラナデ，底部はケズリ，内面は横ナデである。口径17.8cm，底径8.3cmを計る。胎土には小礫を混入，焼成はあまり良くな

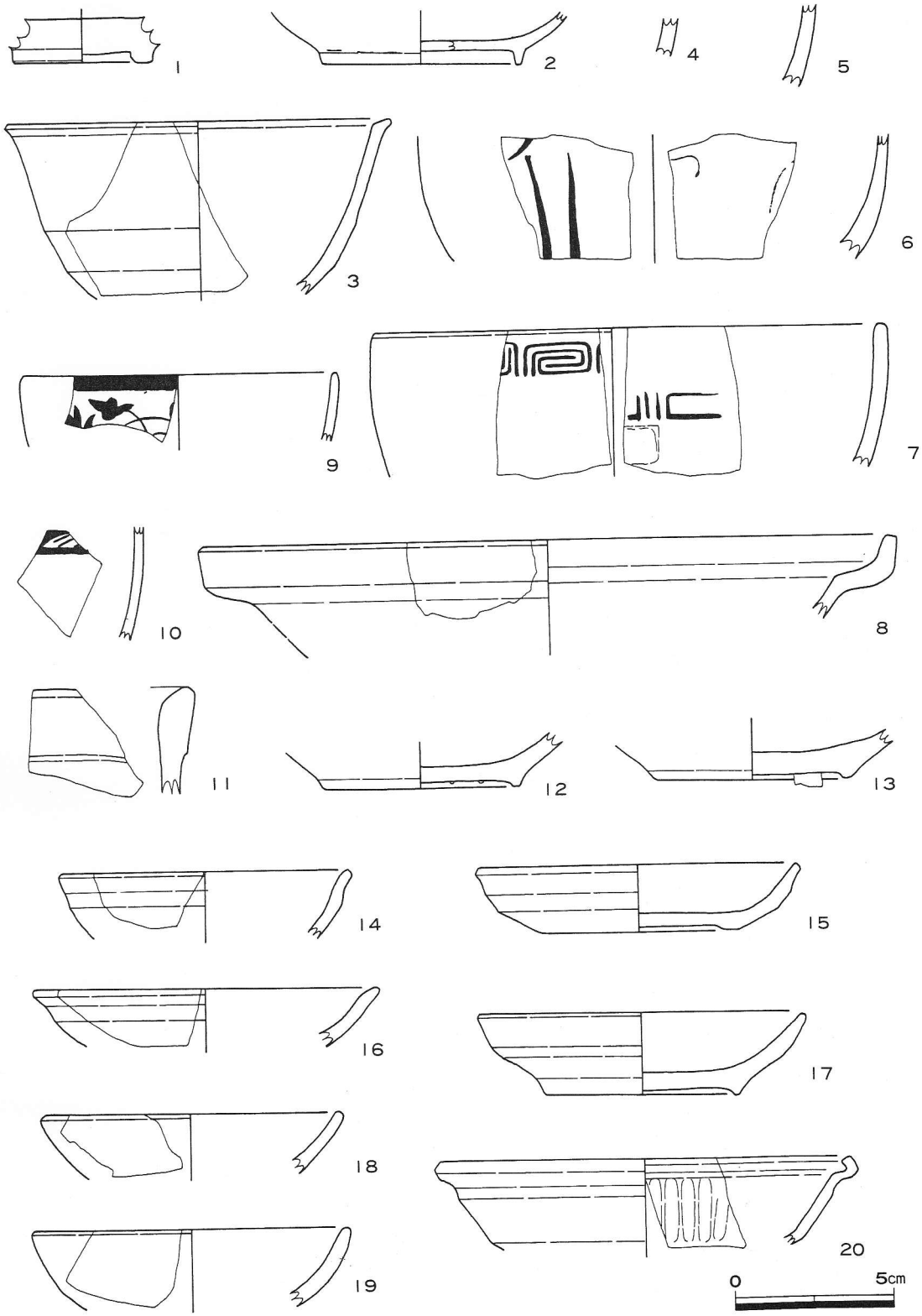


図35．陶碰器実測図

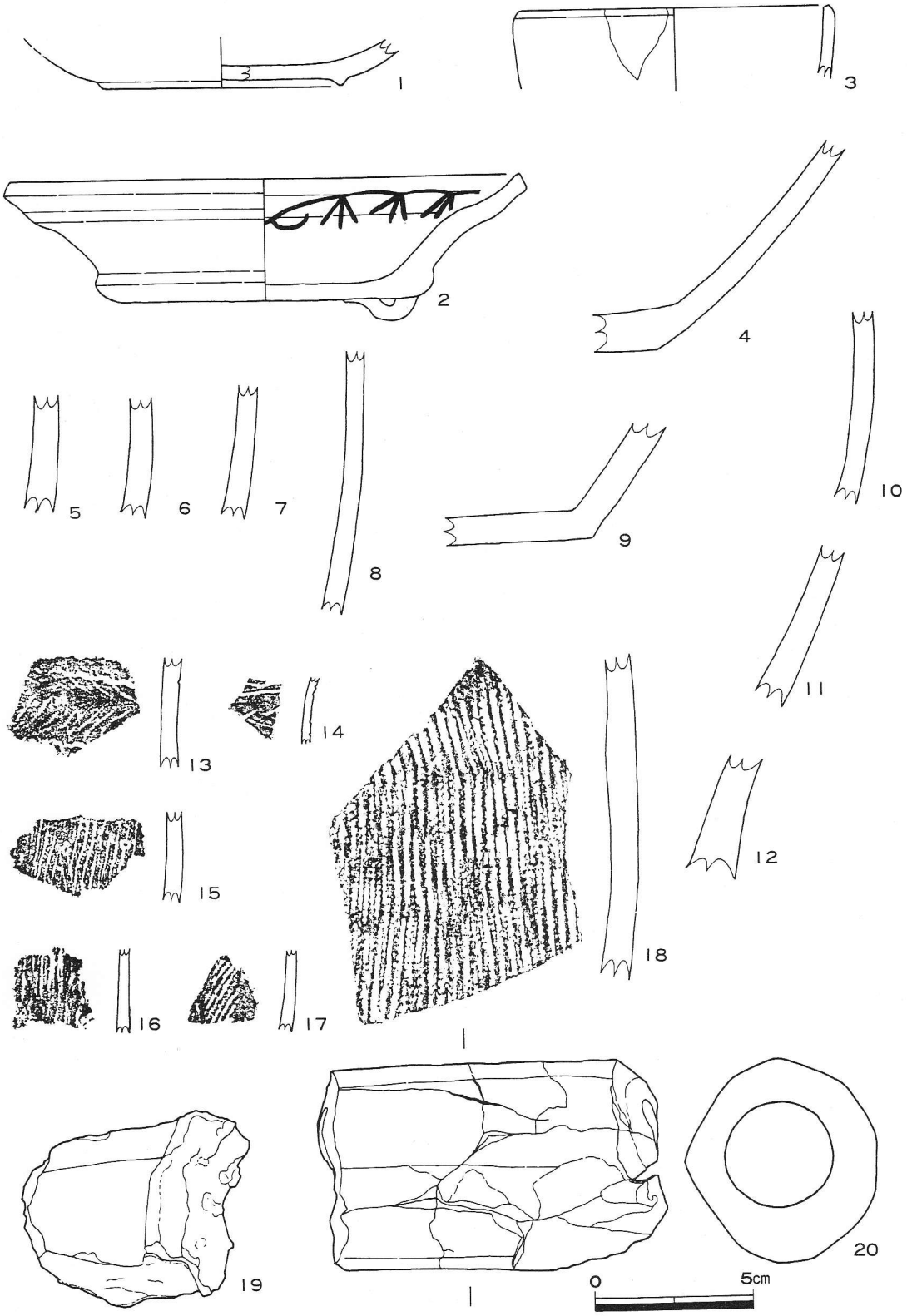


図36．陶磁器・土器・羽口実測図

い。第１号竪穴住居跡のカマドからの出土である。

図43―5a，5bも甕の口縁及び底部破片であり，同一個体と考えられる。１よりも器厚が厚く焼成も良い。推定口径18.8cm，底径10.5cmである。第１号竪穴住居跡カマドからの出土である。

図43―２，３はカマド遺構から出土したもので，いずれも甕の口縁部破片である。両者とも口縁部は先細となり，若干内曲している。２の器厚は薄く，焼成も良くない。胎土には，両者とも若干大きめの礫を混入している。

図43―４はＥ―８グリッドＩ層から出土したもので，甕口縁部破片である。口縁は若干外曲している。胎土には小礫を混入し，焼成も比較的良い。

土製品（図36―19，20）　（ＰＬ14―12，15）

図36―19，20は鞴羽口片である。19は第29a号竪穴遺構，20は円形竪穴遺構から出土したものである。いずれも先端部は高温使用を思わせるようにガラス状になっている。20の外径 5.6 cm，内径 3.3 cm，現存長10.5cmである。

３．金属製品

金属製品は本遺跡において最も出土量が多い遺物である。これらの遺物は遺存状態も良く，遺構内からの出土が多い事から，館研究における貴重な資料と言える。以下鉄製品，銅製品，古銭の順にその概要を記述する。

ｉ）鉄製品（図37～39）　（ＰＬ15，16）

出土した鉄製品の総数は38点であり，その内訳は下記のとおりである。

鉄　鏃	４点	鉄　槍	１点	小　刀	１点	刀　子	２点	小　柄	１点	小　札	２点
鉄　釘	10点	楔	２点	鉄のみ	１点	針	１点	せんびき	４点	鉄　鎌	１点
火　箸	２点	鉄　碗	１点	鉄鍋片	１点	鍵	１点	留　金	１点	不　明	３点

この他，32点の鉄滓が遺構内外より出土している。

鉄鏃（図37―１～４）

４点の出土である。図37―３は根，４は茎部を欠損している。４点共，根と茎部の境が一段高くなっており，茎部断面は方形を呈する。根及び根先の形状は，１は根部がやや直線的で根先に至って尖る形状を呈し，２は柳葉形を呈する。３は先端にいくにつれ細くなっている。１の全長 11.66 cm，茎長6.32cm，重量15.0g，２の全長 10.66 cm，茎長4.81cm，重量20.0g である。

鉄槍（図38―18）

鉄槍は１点の出土で，第29a号竪穴遺構覆土中からの出土である。槍身形式は笹穂身である。槍先の先端を欠損しているが，推定槍身長は10.2cmと考えられる。茎長は 28.14 cmであり，断

面は1×0.2～0.4の方形を呈する。茎部中央部に口金が残存している。

小刀（図37－14）

1点の出土で，B－7グリッドⅠ層から直立した状態で出土した。刀先端部を欠損しているが，直刀と考えられる。現存長24.76㎝，茎長9.05㎝，刀部幅0.22㎝，最大厚さ0.56㎝を計る。茎部には，0.22㎝の円形の目釘穴がある。

刀子（図37－9，13）

2点の出土であり，土室状遺構4層及び第8号竪穴遺構床面より出土している。

9は土室状遺構から出土したものであるが，遺存状態が悪く，詳細は不明であるが，刀子の刀部と考えられる。

13は第8号竪穴遺構から出土したもので，遺存状態が非常に良い。全長16.63㎝，茎長6.55㎝を計る。

小柄（図37－8）

小柄の柄の部分である。第18c号竪穴遺構床面より出土した。片面に鉄製の角棒状のものが付着している。笄先端部であろうか？

小札（図37－5，6）

5は2枚の小札が一部重っているものである。上の小札は一部欠損しているが，2枚共ほぼ同じ大きさ，形状と考えられる。下の小札の長さは4.48㎝，幅1.48㎝，厚さ0.31㎝であり，先端部が弓状に内側に湾曲している。表面の遺存状態が良くないため，孔の全貌は不明であるが，下の小札からは2列計5個の孔が，上の小札からは2列計3個の孔が確認された。孔の大きさは0.1～0.2㎝であり，列間の間隔は下の小札が0.5㎝，上の小札が0.3㎝である。なお両小札の内面に部分的に金箔状のものが付着している。第34号竪穴遺構床直上からの出土である。

6は第32号竪穴遺構から出土した小札であり，長さ6.62㎝，幅1.9㎝，厚さ0.45㎝を計る。2列計11個の孔が確認された。孔径は0.05～0.22㎝，列間隔は0.5㎝である。

鉄釘（図38－1～10）

計10点の出土であり，鉄製品中最も出土量が多い。全て角釘で，方形の頭部を作り出しているもの（5，6，9），胴部より若干肉厚な簡単な頭部のもの（1，2，10），頭部がやや尖るもの（3，4）がある。8～10のように曲がっているものもあり，ほとんどが竪穴遺構からの出土であることから，建造物等に使用されていたものと考えられる。

楔（図38－11，12）

楔は第8号竪穴遺構床直上及びB－7グリッドⅡ層からの計2点出土している。横断面は方形であり，頭部から先端部に行くにつれ厚さが薄くなっている。図38－12の頭部は敲打により

若干つぶれている。

鉄のみ（図38－17）

図38－17は第８号竪穴遺構床面から出土したもので，のみ状の鉄製品である。刃部先端部を欠損している。現存長14.69㎝，刃部幅2.11㎝を計る。柄の挿入部は長さ3.8㎝，径1.4×1.2㎝である。現代ののみのように，この部分に木製の柄を挿入していたものと思われる。遣り鉋やのみ等の木工具と考えられる。

針（図38－13）

第８号竪穴遺構床面から１点出土した。長さ7.42㎝，径3.0㎝を計る。先端はメス先状を呈し，他端は丸く加工されている。また糸通し穴部付近はやや扁平に成形されており，その中心に0.4×0.06㎝の楕円形の穴があけられている。

せんびき（図37－10～12）

せんびきは繊維を取り出す道具で，せんびき台の上で麻をなめす作業に使用したものである。本遺跡からは３点出土している。また鹿角市小枝指館，八戸市根城跡等からも出土している。図37－11，12共，片方の把手付着部及び刃先を欠損している。把手付着部から刃部先端にいくにつれ若干薄くなり，先端部は丸くなっている。把手付着部及び刃部上方$\frac{1}{3}$にかけて横位方向の木質物が付着している。木質の把手であろうと考えられる。10も同様の木質に着目し本類に入れたが，刀子類の刀部の可能性もある。３点共，竪穴遺構からの出土である。

鉄鎌（図39－６）

Ｂ－９グリッドⅠ層下画からの出土である。刃部長さ17.22㎝，幅4.93㎝，厚さ0.36㎝であり，やや幅広な感がする。刃は若干湾曲しており，刃先は鋭利である。把手部先端付近に曲げて作った小突起部があり，柄との結合を強固にするためのものと考えられる。

火箸（図38－15，16）

第31号竪穴遺構床面と３号土坑からの計２点の出土である。いずれも横断面は方形を呈する。図38－15の現存長は19.8㎝，幅0.64㎝，厚さ0.70㎝である。

鉄碗（図39－５）

図39－５は碗状の鉄製品である。口縁部の一部を破損している。口径12.2㎝，底径5.64㎝，器高3.51㎝を計る。第34号竪穴遺構床直上からの出土である。

鍵（図38－14）

第８号竪穴遺構床面から１点出土した。5.30㎝×3.30×1.0㎝の大きさである。右側面には長さ0.9㎝，幅0.1㎝の鍵穴と思われる穴があいている。

留金（図37－７）

土室状遺構から出土したもので，外径3.70㎝，内径2.15㎝の輪状の鉄製品である。厚さは，

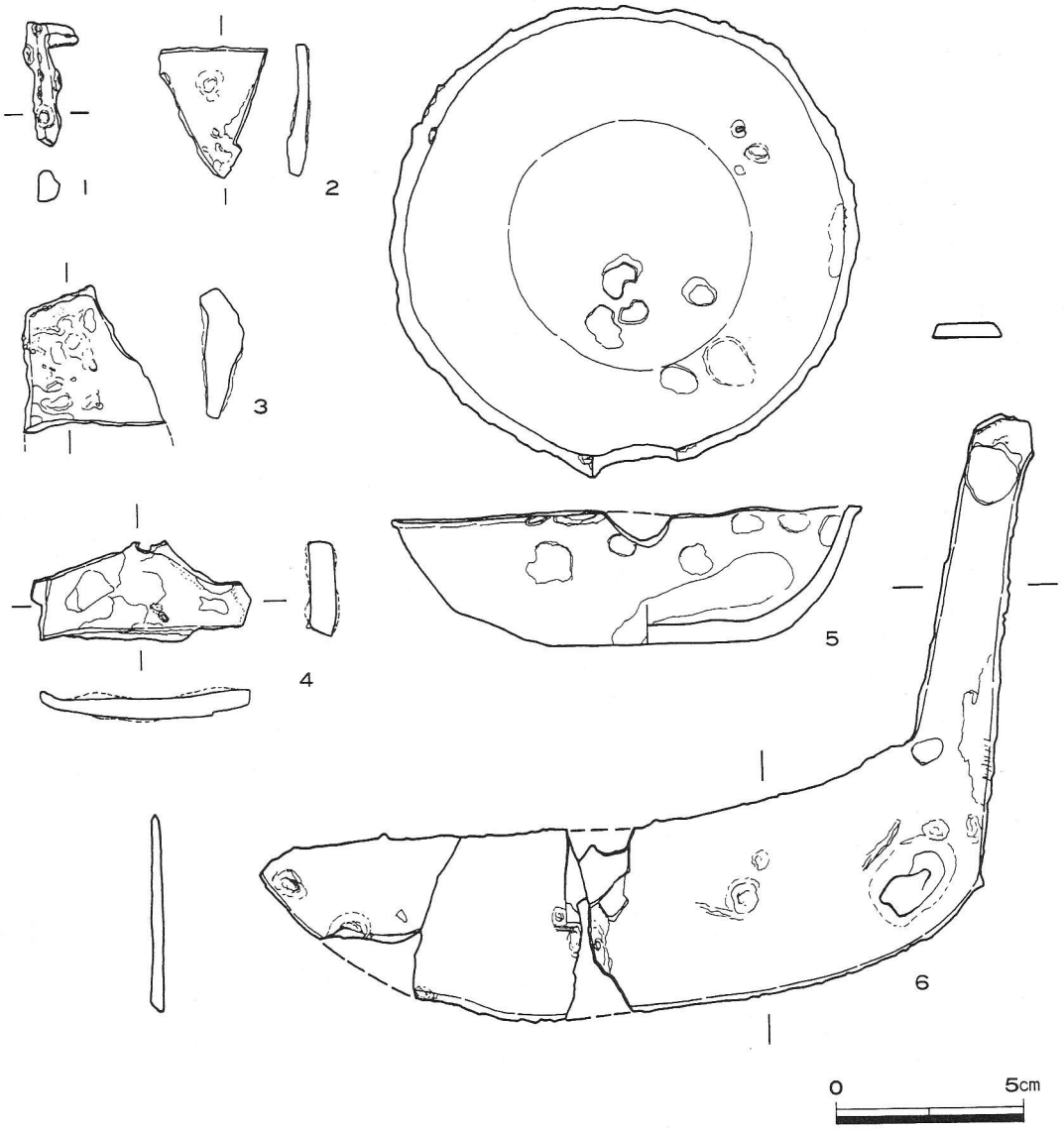
0.33cmである。

鉄鍋（図39－2）

図39－2は鉄鍋の口縁部破片と思われる。第3号土坑1層からの出土である。

鉄製品一覧表

Fig No.	PL No.	名称	遺構名	層位	遺存状態	大きさ	重量g
37－1	15－1	鉄鏃	ST31・F－2	床面	完存	全長 11.66cm根幅0.97cm根厚さ0.36cm茎長6.32cm	15.0
37－2	15－2	鉄鏃	ST13・F－1	1層	完存	全長 10.66cm根幅1.11cm根厚さ0.63cm茎長4.81cm	20.0
37－3	15－3	鉄鏃	E－6グリッド	Ⅰ層	茎部欠損	現存長4.94cm根幅0.86cm根厚さ1.04cm	12.5
37－4	15－4	鉄鏃	SM－1・－4	4層	根先部欠損	現存長5.00cm茎長0.65cm茎厚さ0.60cm	8.0
37－5	15－5	小札	ST34・F－1	床直上		長さ3.97cm幅1.5 cm厚さ0.34cm 長さ4.48cm幅1.48cm厚さ0.31cm	8.5
37－6	15－6	小札	ST32・F－1	床面		長さ6.62cm幅1.90cm厚さ0.45cm	10.0
37－7	15－7	留金?	SM1・F－5	4層	完存	外径3.70cm内径2.15cm厚さ0.33cm	6.0
37－8	15－8	小柄	ST18c・F－3	床面	柄部のみ残存	現存長4.56cm幅1.89cm厚さ1.08cm板厚0.08cm	7.5
37－9	15－9	刀子	SM1・F－2	4層	刃部1部残存	現存長8.68cm幅1.34cm厚さ0.49cm	7.0
37－10	15－10	せんびき	ST34・F－3	床直上		現存刃部高さ0.36cm長さ3.76cm厚さ0.24cm	2.5
37－11	15－11	せんびき	ST12・F－1	床面	欠損	把手部高さ1.48cm長さ1.50cm刃部高さ2.74cm 現存長さ7.89cm厚さ0.54cm	13.0
37－12	15－12	せんびき	ST11・F－1	床面	1部欠損	把手部高さ1.26cm長さ1.06cm刃部高さ2.29cm 現存長さ9.03cm厚さ0.57cm	15.5
37－13	15－14	刀子	ST8	床面	完存	全長 16.63cm茎長6.55cm刀部幅1.44cm刀部厚さ0.49cm	27.5
37－14	15－16	小刀	B－7グリッド	Ⅰ層	刃部先端部欠損	現存長24.76cm茎長9.05cm刀部幅2.53cm刀部厚さ0.56cm	71.0
38－1	16－1	鉄釘	ST35・F－1	床面	完存	長さ9.16cm 幅0.57cm 厚さ0.58cm	10.0
38－2	16－2	鉄釘	ST29b・F－6	覆土	完存	長さ9.82cm 幅0.70cm 厚さ0.53cm	14.0
38－3	16－3	鉄釘	ST22	覆土	完存	長さ8.80cm 幅0.66cm 厚さ0.74cm	10.0
38－4	16－4	鉄釘	ST29a・F－5	床面	先端部欠損	現存長7.86cm 幅0.70cm 厚さ0.66cm	11.5
38－5	16－5	鉄釘	表採		頭部残存	現存長1.86cm 幅0.68cm 厚さ0.63cm	13.0
38－6	16－6	鉄釘	ST35・F－2	床面	頭部残存	現存長2.45cm 幅0.71cm 厚さ0.48cm	1.5
38－7	16－7	鉄釘	ST8・F－3	覆土	頭部・ 先端部共欠損	現存長3.01cm 幅0.61cm 厚さ0.41cm	1.5
38－8	16－8	鉄釘	SD1	覆土	先端部欠損	幅0.51cm 厚さ0.74cm	6.0
38－9	16－9	鉄釘	SM1・F－15	9層	完存	幅0.71cm 厚さ0.62cm	6.0
38－10	16－10	鉄釘	ST14・F－1	床直上	完存	幅0.55cm 厚さ0.54cm	5.0
38－11	16－11	楔	ST8	床直上	完存	長さ7.24cm頭部幅1.77cm頭部厚さ1.17cm先端部厚さ0.64cm	43.5
38－12	16－12	楔	B－7グリッド	Ⅱ層	完存	長さ8.86cm頭部幅1.91cm頭部厚さ1.09cm先端部厚さ0.92cm	70.0
38－13	16－13	鉄針	ST8	床面	完存	長さ7.42cm 幅0.38cm 厚さ0.30cm	2.5
38－14	15－15	鍵	ST8・F－4	床面	完存	高さ3.30cm 長さ5.30cm 厚さ1.0cm	32.5
38－15	16－14	火箸	SK3	1層	欠損	現存長9.41cm 幅0.56cm 厚さ0.57cm	10.0
38－16	16－15	火箸	ST31・F－1	床面	完存?	現存長19.8cm 幅0.64cm 厚さ0.70cm	18.0
38－17	15－13	鉄ノミ?	ST8	床面	刃部欠損?	現存長 14.69cm 刃部幅2.11cm	32.5
38－18	15－17	鉄槍	ST29a・F－3	覆土	先端部欠損	現存長37.0cm 槍先長8.86cm	150.0
39－1	16－16		SK3・F－2	1層		長さ3.14cm 幅0.79cm 厚さ1.0cm	3.0
39－2	16－17	鉄鍋?	SK3・F－3	1層	口縁部小破片?	長さ3.36cm 幅2.78cm 厚さ0.44cm	8.0
39－3	16－18		ST2・F－1	1層		長さ3.61cm 幅3.74cm 厚さ0.44cm	19.0
39－4	16－20		B－6グリッド	Ⅰ層		長さ5.62cm 幅2.58cm 厚さ0.76cm	26.0
39－5	16－19	鉄碗	ST34・F－2	床直上	口縁部一部欠損	口径 12.12cm 底径5.64cm 器高3.51cm	390.0
39－6	16－21	鉄鎌	B－9グリッド	Ⅰ層		刃部長さ 17.22cm 幅4.93cm 厚さ0.36cm	108



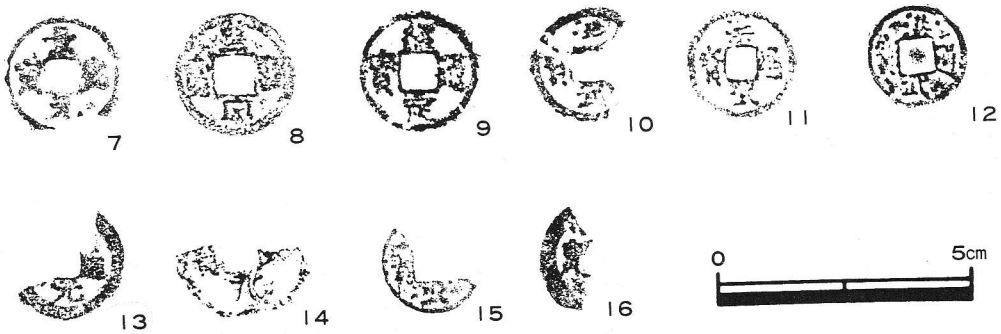


図39．鉄製品実測図(上)，古銭拓本(下)

ii）**銅製品（銅銭を除く）（図40）　（ＰＬ17）**

銅製品は10点であるが，銅鏡以外すべて遺構内からの出土である。銅製品としては，銅鏡，斧，小柄，薬匙他金具類が出土している。

飾り金具（図40－１）

鋲状の銅製品であり，頭部には菊花文が刻まれている。刻み内及び頭部側縁一部に金が残存していることから，鍍金が施こされていたものと思われる。頭部径1.4cm，頭部厚さ0.2cm，釘部長さ1.0cm，径0.4cmである。武具等の飾り金具と考えられる。第22号竪穴遺構床面からの出土である。

薬匙（図40－２）

長さ8.19cm，皿部幅1.33cm，柄部幅0.53cmのスプーン状の銅製品である。厚さは0.07cmと薄く，皿部は一部破損している。柄の部分には径0.08cmの丸い孔があけられている。第８号竪穴遺構床面からの出土である。

鎌金具（図40－４）

0.09cmの銅板を巻き，円錐状に形作ったものである。底径1.31cm，高さ4.16cmを計る。槍先や吹き矢的なものとも考えられるが，槍先としては小さすぎる事，銅製品であることから鎌金具と考えたい。第10号竪穴遺構床面からの出土である。

小柄（図40－５）

５は小柄の柄部である。土室状遺構２層からの出土である。

銅鏡（図40－７）

径11.19cmの円鏡である。内区には９個の菊花を主体にした菊唐草文が施こされている。また座は菊座である。外縁高は0.71cm，縁厚さ0.4cm，鏡面厚さは0.12cmを計る。外区に２個の方形の孔がある事から吊り下げて使用した可能性がある。室町時代の青銅鏡と考えられる。Ｂ－９層Ⅰ層下面からの出土である。

斧（図40－８）

刀の鞘に差しておくくしである。柄部表面には３個の梅花の鋳出しが施こされている。また柄部の地文は，丸タガネによる魚目文である。耳掻部から先端部までの長さは19.95cm，最大幅は1.07cm，最大厚さ0.3cmである。土室状遺構底面からの出土である。

その他の銅製品（図40－３，６）

３は幅0.95cm，厚さ0.09cmの銅板を３重に巻き上げたもので，側面から見ると楕円形を呈するものである。

６は長さ6.41cm，幅1.75cm，厚さ0.19cmの板状で，やや弓状に曲がっている。中央軸上には２個の孔があいており，右側穴上面には止め金（鋲）状のものが残り，下部には木質のものが

付着している。木製品に付く金具と思われる。第16号竪穴遺構床直上からの出土である。

銅製品一覧表

Fig No.	PL No.	名称	遺構名	層位	遺存状態	大きさ	
40—1	17—1	飾り金具?	ST22・F—1	床面面	完存	頭部径1.40cm 長さ1.22cm 釘部厚さ0.43cm	1.25
40—2	17—6	薬匙	ST8・F—10	床面面	皿部一部破損	長さ8.19cm 柄部幅0.53cm 皿部幅1.33cm 厚さ0.07cm	1.30
40—3	17—2		ST18a	床面		長軸2.06cm 短軸1.11cm 幅0.95cm 板厚0.09cm	2.5
40—4	17—3	鉸金具?	ST10・F—1	床面	完存	径1.31cm 高さ4.16cm 板厚0.95cm	4.0
40—5	17—4	小柄	SM1・F—3	2層	柄部のみ残存	現存長さ5.55cm 幅1.48cm 厚さ0.57cm 板厚0.05cm	4.0
40—6	17—5		ST16	床直上		長さ6.41cm 幅1.75cm 板厚0.19cm	5.0
40—7	17—7	銅鏡	B—9グリッド	I層	縁から外区にかけ割れ	径11.19cm 外縁高さ0.71cm 鏡面厚さ0.12cm	144
40—8	17—8	笄	SM1・F—16	床直上	完存	長さ19.95cm 最大幅1.07cm 最大厚さ0.30cm	28

iii）古銭（図39—7～16）　（PL17）

古銭は232点の出土であり，全て銅銭である。有銘銭はわずか10点であり，1点の私鋳銭（図39—12）を除いて全て中国銭である。10点中銘文を判読できるものは6点であり，その内訳は景徳元宝（北宋銭・1004年）1点，皇宋通宝（北宋銭・1039年）1点，紹定通宝（南宋銭・1228年）1点，洪武通宝（明銭・1368年）3点（うち1点は私鋳銭）である。

無銘銭には内孔が方形のものと円形のものがあり，その割合は68：152である。方形のものの外径は14.2～21.5mm，内孔一辺6.3～11.6mm，厚さ0.5～1.4mmであり，円形のものの外径は10.3～17.4mm，内径7.1～12.9mm，厚さ0.4～1.2mmであり，円形のものが方形のものよりも外径が小さく，厚さも薄い傾向にある。

これらの古銭は竪穴遺構，土室状遺構等から数点ずつ出土しているが，B—7グリッドI層下面からは，縄状の紐に通した185点の無銘銭が一括で出土した。(PL11)。

古銭遺構別出土数

	ST8	ST 18a, b	ST19	ST25	ST26	ST32	SM1	B—7, I層	B—9, I層	C—7, II層	D—6, I層	計
景徳元宝					1							1
皇宋通宝											1	1
紹定通宝										1		1
洪武通宝						1	1				1	3
判別不能		1					3					4
無銘銭	1	4	1	1		1	28	185	1			222
計	1	5	1	1	1	2	32	185	1	1	2	232

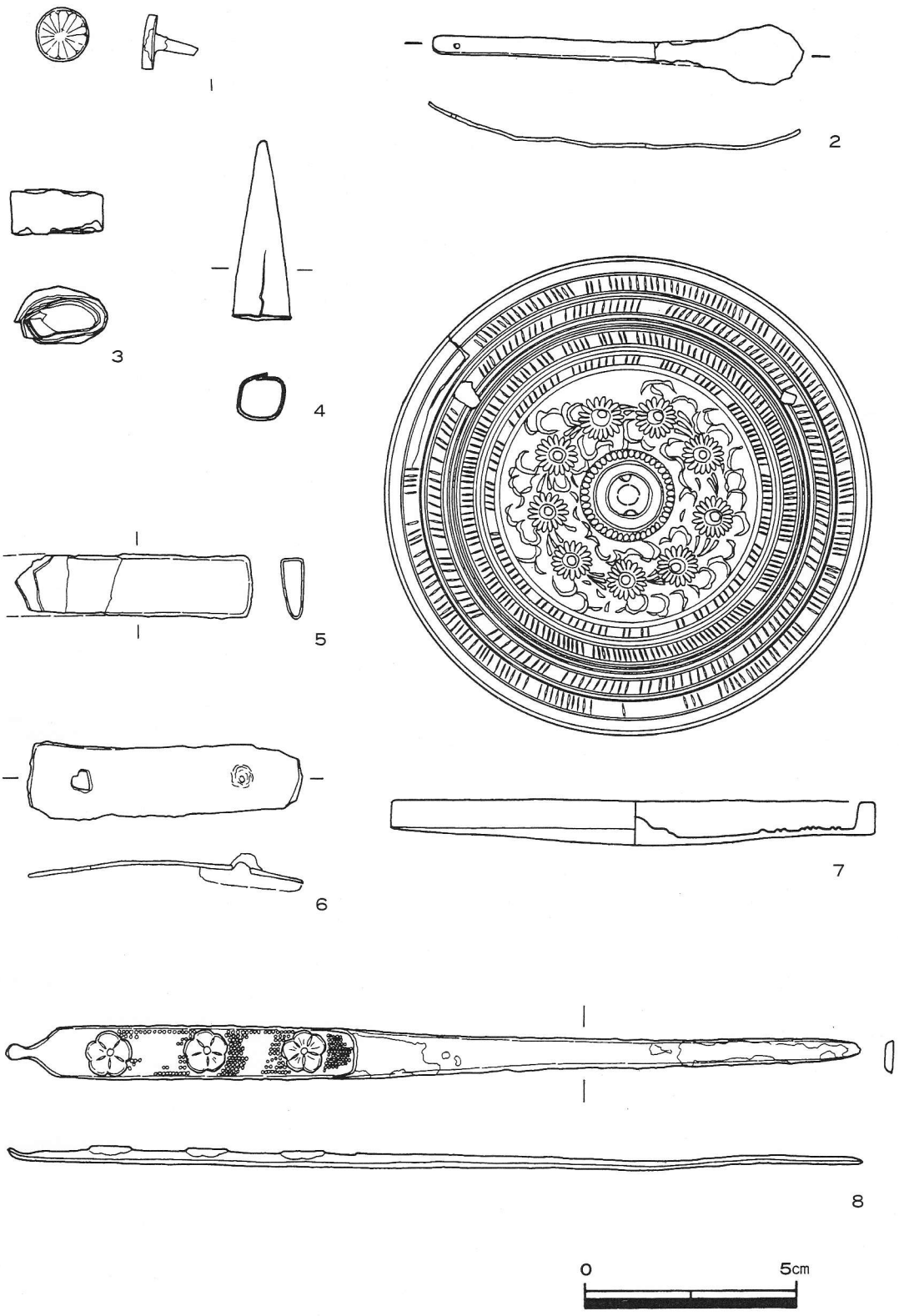


図40．銅製品実測図

4．石器・石製品（図41，42）　（ＰＬ14―10，11，16～21）

遺構内より計21点の石器・石製品が出土した。内訳は砥石８点，台石７点，剝片石器２点，敲石１点，磨製石斧１点，有孔石製品１点，石皿状石製品１点である。

砥石

８点の出土で最も出土量が多い。図41―３，４のように小型のものから図42―６のような大型のものまである。小型のものは４～６面に擦痕があり，定形化していると思われるものもある。

台石

20cm大の扁平な石の一面に擦痕や敲打痕を有するものである。計７点の出土であり，竪穴遺構の床面から多く出土した。作業台的な用途が考えられる。またススが付着していたり，火によると思う変色（黒変）がみられることから，火を使用する作業に使われた可能性もある。

剝片石器（図14―１，２）

２点の出土であり，両面より調整剝離が施こされている。１は定形していない。また２は片面下端にエンドスクレーパー状の調整剝離が施こされていることから，石篦的用途が考えられる。両者共，珪（硬）質頁岩製である。

敲石（図42―７）

長さ16.1，太さ４cm大のの細長い自然石の１端に敲打痕を有するものである。石英安山岩製である。

磨製石斧（図41―７）　（ＰＬ14―20）

定角式磨製石斧であり，刃部を欠損している。また頭部には敲打痕を有している。土室状遺構床直上から笄，青碰盤と共に出土したものであり，流れ込みまたは再利用されたものと考えられる。石質は凝灰岩である。

有孔石製品（図41―８）　（ＰＬ14―21）

長さ8.0cm，幅5.6cm，厚さ1.5cmの板状であり，中央部付近に径１cmの円形の穴がある。両面，周縁及び穴は擦りにより成形されている。また正面下端にやや等間隔に５ヵ所，左側縁下方に１ヵ所にＶ字状の刻みがつけられている。さらに上端には擦りによりＵ字状の抉りがつけられている。第26号竪穴遺構からの出土であり，石質は石墨変岩である。

石皿状石製品（図42―８）

１点の出土であり，第29a号竪穴遺構より出土している。破片であるが，擂鉢状の形状が推定される。石質は石英安山岩である。

石器・石製品一覧表

No.	Fig No.	PL No.	名　称	遺　構　名	層位	大　き　さ(cm)	重さ(g)	石　質	備　考
1	41－6	14－16	砥　石	D－6グリッド	Ⅰ　層	4.6× 2.9× 1.9		凝　灰　岩	
2	42－7		敲　石	B－7グリッド	Ⅰ　層	16.7× 4.1× 3.6		石英安山岩	
3	42－4		台　石	B－6グリッド	Ⅰ　層				
4	41－2	14－2	剝片石器	C－7グリッド	Ⅰ　層	5.4× 3.4× 1.5		珪(硬)質頁岩	
5	41－5	14－18	砥　石	C－8グリッド	Ⅰ　層	6.1× 5.7× 2.5		火山礫凝灰岩	
6	41－7	14－20	磨製石斧	SM1・S－2	床直上			凝　灰　岩	頭部欠損，頭部に敲打痕
7	41－3		砥　石	ST2・S－1		2.9× 2.6× 1.1		泥　　岩	
8	42－1	14－19	砥　石	ST5・S－1	床　面			砂質凝灰岩	
9	42－3		砥　石	ST6・S－1	床直上	8.6× 8.2× 3.6		凝　灰　岩	
10			台　石	ST8・S－4		24.0×12.5× 7.5			1面に擦痕，1部にスス付着
11	42－2		砥　石	ST8・S－10	床　面	10.7× 8.4× 4.6		凝　灰　岩	
12			台　石	ST14・S－1	床　面	28.5×22.0× 6.5			
13			台　石	ST14・S－2	床　面	24.0×12.5× 7.5			
14	41－4	14－17	砥　石	ST17	覆　土	4.6× 2.9× 2.9		砂質凝灰岩	
15	41－1	14－10	剝片石器	ST17	覆　土	2.8× 2.6× 0.6		珪(硬)質頁岩	
16	41－8	14－21	有孔石製品	ST26・S－3	床直上	8.0× 5.6× 1.5		石　墨　変　岩	
17			台　石？	ST29a・S－3	覆　土	29.8×17.9×14.7			黒変，1部スス付着
18	42－8		石　皿？	ST29a	覆　土			石英安山岩	破片
19	42－5		台　石	ST30・S－4	床　面	12.3×10.4× 2.7		凝　灰　岩	1部スス付着
20	42－9		台　石	ST30・S－6	床　面	19.2×17.4× 3.0		安　山　岩	敲打痕有
21	42－6		砥　石	ST30・S－13	1　層	28.0×21.0× 9.1		火山礫凝灰岩	

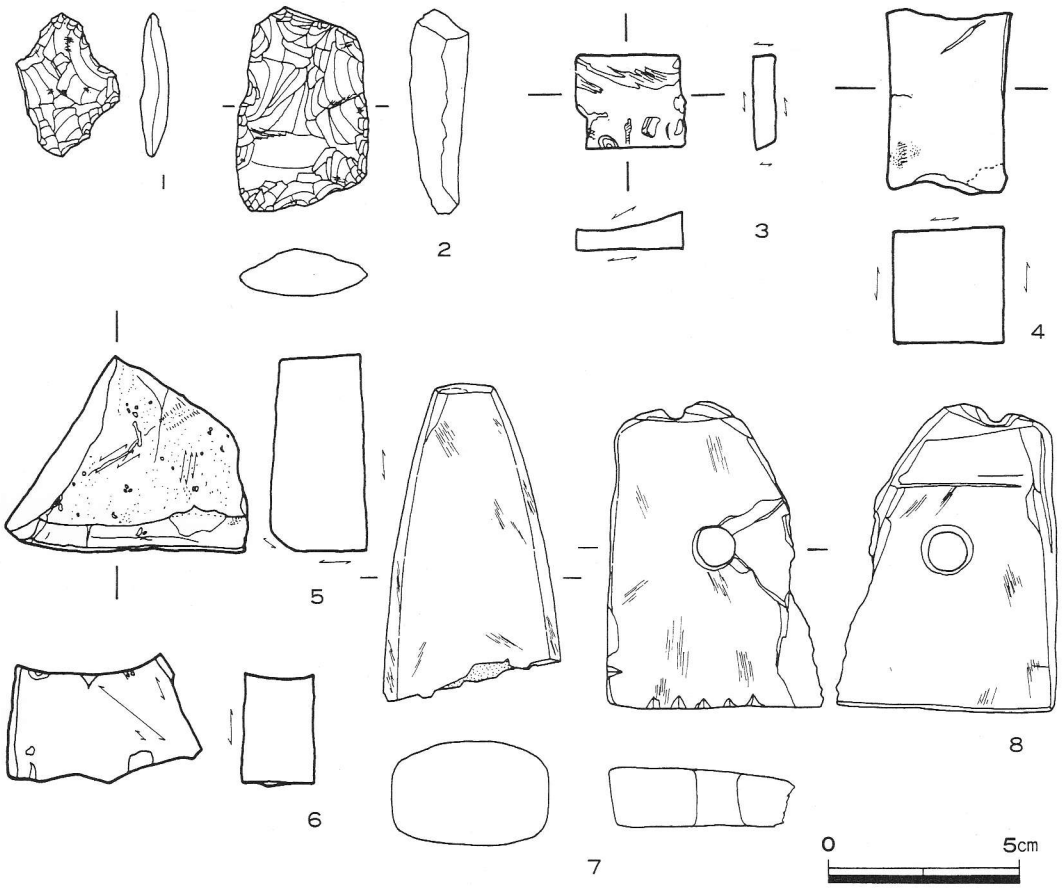


図41．石器・石製品実測図

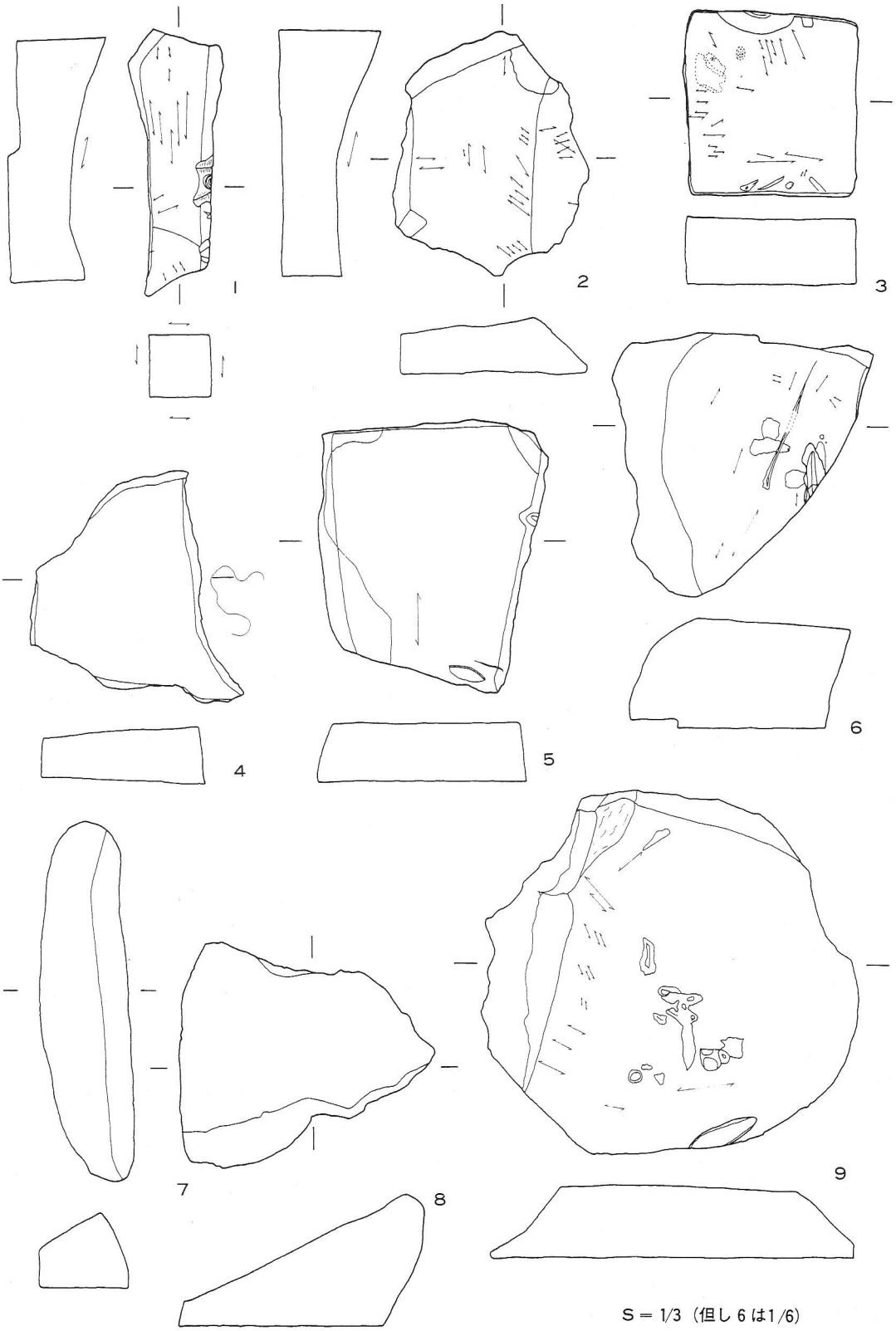


図42．石器・石製品実測図

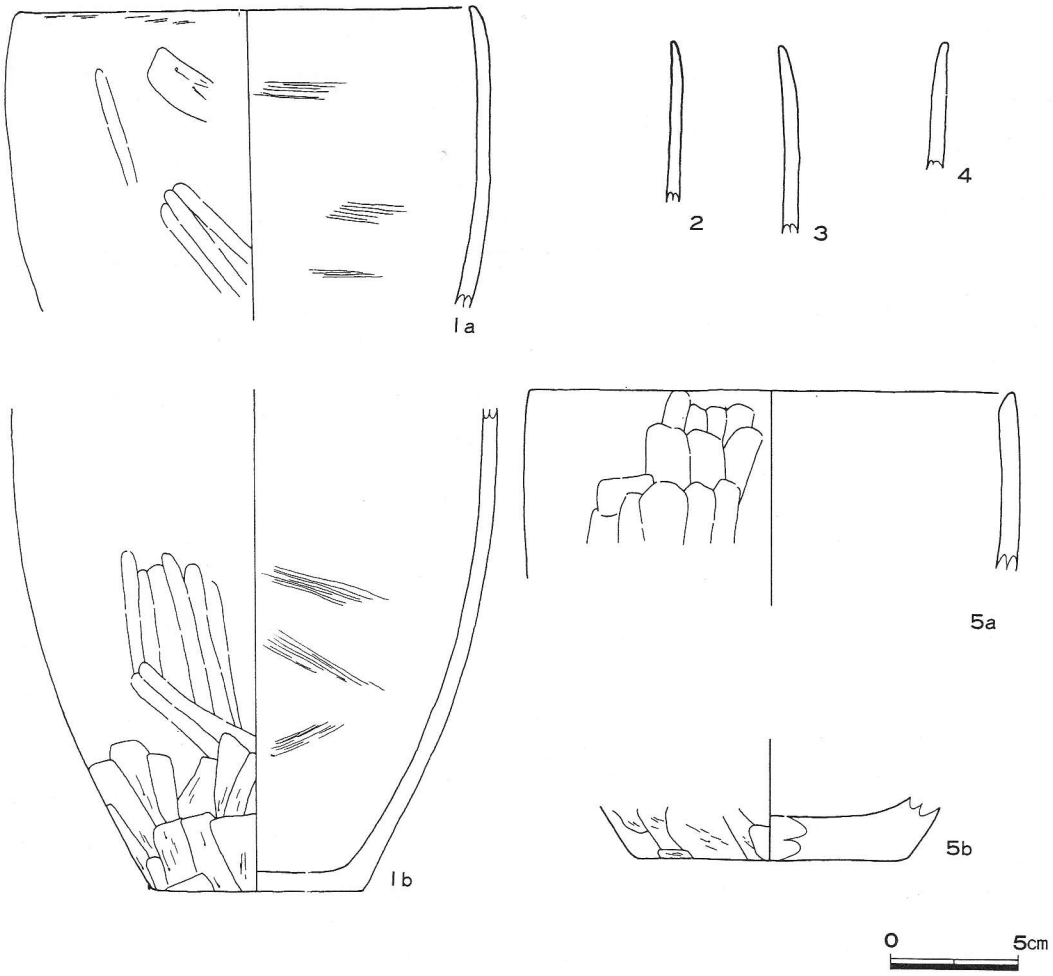


図43．土師器実測図

第Ⅵ章　ま　と　め

今回の調査は，主郭と思われるⅠ郭の中央部（1500m²）の調査である。Ⅰ郭全体の約¼ほどの面積であり，Ⅰ郭全体，新斗米館の全貌をつかむには不十分な調査であったといえる。しかしながら，数多くの竪穴遺構，特殊な遺構等の検出，秋田県内で初めての遺物の出土等，鹿角地方の館を解明する貴重な資料を得ることができた。今回の調査の成果と若干の考察を述べ，まとめとしたい。

1．遺構について

検出された遺構は，竪穴住居跡１軒，竪穴遺構35基，円形竪穴遺構１基，土室状遺構１基，カマド遺構１基，土坑14基，溝３条，掘立柱建物跡を構成すると考えられる柱穴300以上である。柱穴の数及び広がりから予想される掘立柱建物跡が数軒に対し，竪穴遺構の多いのが，目につく。

ⅰ）竪穴遺構について

竪穴遺構については，その機能・形態に統一見解がなされていないのが現状である。本報告書では，生活施設（カマド，炉等）を有しない方形の竪穴で，柱穴を有するものを竪穴遺構とした。竪穴遺構の規模は1.4×1.3ｍから（6.5）×4.4ｍのものまであるが，3.5～4.0ｍ程度の規模のものが多い。柱穴は壁隅及び壁際中央に配置されるものが多い。また入口状の張り出し部を有するもの４基，溝を有するもの３基，周溝を有するもの２基が検出された。これらの付属施設の有無が何を意味するのかは，今後の課題としたい。

これらの竪穴遺構はⅠ部中央を東西に走る２条の溝の北側に多く，複雑に切り合っている。重複関係より４期以上にわたる構築時期が考えられる。

竪穴遺構の機能については，住居，倉庫，簡易宿舎等，種々の説があるが，最近倉庫説が有力となっているようである。本遺跡検出の竪穴遺構にも生活施設等の痕跡は確認されず，生活用具の出土も少ないが，予想できる掘立柱建物跡が少ない事，規模が比較的大きいものもあることから，簡易宿舎（臨時的住居）としての機能を有するものも含まれていると考えられる。

ⅱ）円形竪穴遺構について

本遺跡から１基のみ検出された遺構で，径（3.6）ｍ，深さ96cmの竪穴遺構である。円形プランであること，掘込みが深いこと，柱穴が検出されなかったこと等，他の竪穴遺構との相違がみられる。底面からは15～20cm大の自然石が多数検出され，これらの大部分のものは，火を受けた痕跡がある。また，これらの石の下から鞴羽口が１点出土している。

本遺跡からは多数の鉄製品とともに鉄滓も出土している事からも，小鍛治場的遺構と考えたい。しかしながら，本遺構内からは若干の鉄滓が出土したのみであり，遺構の大半を土取りに

より消失しているため，論証に欠け，問題の残るところである。

iii）土室状遺構について

2.41×1.95mの方形を呈し，深さ約1mの遺構である。掘り込みが深いこと，壁が直線的に外側に入り込むこと等，他の竪穴遺構と相違がみられる。形態的に考えて，食料の貯蔵または特殊なものの収蔵施設と考えられる。なお底面から検出された2本の丸太及び，その検出状態が，この遺構の構造を知る1つの手がかりとなるものと思われる。類似する例として，石川県鳥越村・鳥越城跡の石室状遺構がある。

iv）カマド遺構について

本遺跡検出のカマド遺構は，径1.8mの円形を呈する竪穴の東壁側にカマドを有するものである。カマドの形態が古代のカマドに似ていること，出土遺物が平安時代の土師器のみであることから，平安時代の遺構としたが，時期が下る可能性がある。青森県八戸市・根城跡，岩手県紫波町・柳田館等でも類似する遺構が検出されているようであり，比較検討を今後の課題としたい。

2．防禦施設について

Ⅰ郭の周囲には，外観上認められる防禦施設として，Ⅰ・Ⅱ郭間の空堀，Ⅰ・Ⅴ郭間の空堀及び北，南側の土塁及び空堀がある。これらは急勾配の斜面とともにⅠ郭の防禦を一層強固なものにしている。種々の事情により，郭上の遺構に全力を注がざるを得ず，Ⅰ・Ⅱ郭間にトレンチを入れることしかできなかったのが残念でならない。郭上の柱列の問題についても，今回の調査では結論を見い出せなかった。ただ東西方向の4m幅トレンチの西端からは柱列らしきピットを検出できなかった事を付け加えておきたい。

Ⅰ郭内の検出遺構，出土遺物，及びこれらの防禦施設から，Ⅰ郭が主郭的存在であったことは，ほぼまちがいのないものと考えられる。

3．遺物について

出土した遺物は，陶碰器，土器・土製品，金属製品，石器・石製品等計370点である。これらの遺物は若干の縄文，弥生時代のもの以外は，平安及び館期の遺構に伴う遺物である。舶載陶碰器としては，青碰，白碰，染付，褐釉等が出土しており，これらのものは最も古いもので12～14世紀，最も新しいもので16世紀のものである。また国産陶碰器としては，16世紀の美濃16世紀末～17世紀前期の志野等が出土している。鹿角地方での中世陶碰器の出土例としては，小技指館，湯瀬館等があるが，これらの流入経路が問題となるところである。能代市・中田表遺跡，大館市・館コ跡，比内町・真館等，日本海に流れ出る米代川流域の遺跡からの出土例が多いことから，米代川と密接に関係しているものと考えられる。

出土遺物をその機能別に見ると，武具的なもの（刀子，小札，鉄鏃等），建築具（釘，楔等）

の出土が多く，日常生活具は非常に少ない。これは検出遺構にもみられるように，Ⅰ郭は，日常生活の場（集落）ではなく，城館としての性格を濃くしていたものと考えられる。

本遺跡からは，木製品類の出土はないが，これは遺跡の地理条件（シラス台地）によるものと考えられる。金属製品の遺存状態が極めて良いのも，このことによるものと考えられる。

金属製品中，最も多かった無銘銭は，最近，盛岡市以北で出土している。分布範囲，用途等問題を残す遺物である。

（秋元信夫）

参　考　文　献

青森県立郷土館　「尻八館第２次調査概要」　調査研究年報　1978年３月

青森県立郷土館　「尻八館第３次調査概要」　調査研究年報　1979年３月

青森県八戸市教育委員会　「史跡根城跡発掘調査報告書Ⅰ」　1979年３月

青森県八戸市教育委員会　「史跡根城跡発掘調査報告書Ⅱ」　1980年３月

青森県浪岡町教育委員会　「史跡浪岡城跡発掘調査報告書Ⅱ」　1980年３月

岩手県北上市教育委員会　「鹿島館遺跡調査報告書Ⅰ」　1980年３月

岩手県教育委員会　「東北縦貫道自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」　1980年３月

安保　彰　「小坂のあけぼの」　1975年11月

秋田県比内町教育委員会　「真館緊急調査報告書」　1978年２月

秋田県大館市々編さん委員会　「館コ発掘調査報告書Ⅱ」　1974年３月

秋田県教育委員会　「鵜沼城跡発掘調査報告書」　1980年３月

石川県鳥越村教育委員会　「鳥越城跡発掘調査概報」　1979年10月

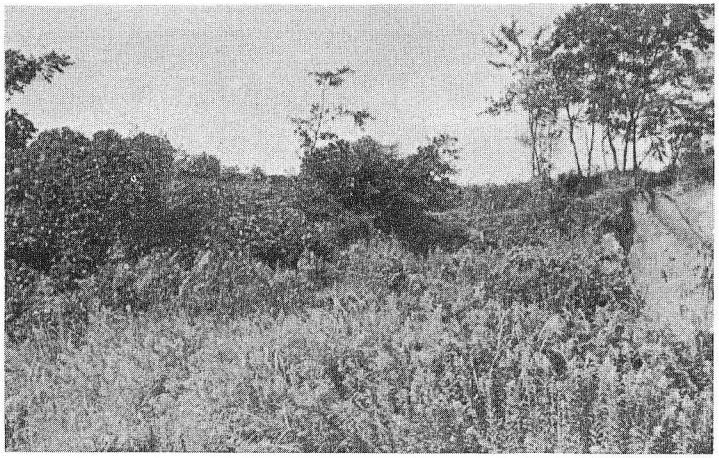
青森県教育委員会　「砂沢平遺跡発掘調査報告書」　1980年３月

青森県教育委員会　「古館遺跡発掘調査報告書」　1980年３月

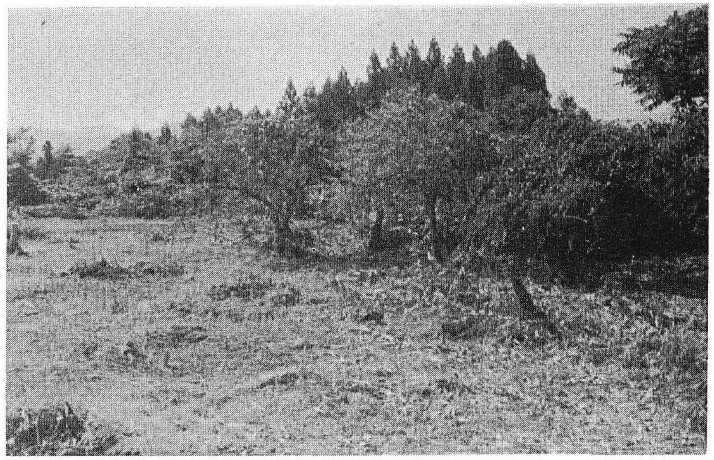
江上波夫　「館跡　東北地方における集落址の研究」　東京大学出版会

秋田県立博物館　「秋田県立博町館研究報告」第３号　1978年

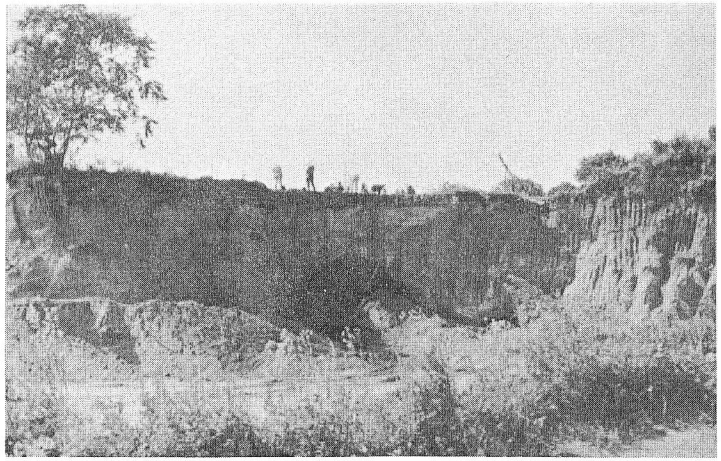
秋田県鹿角市教育委員会　「新斗米館跡発掘調査報告書」　1980年３月



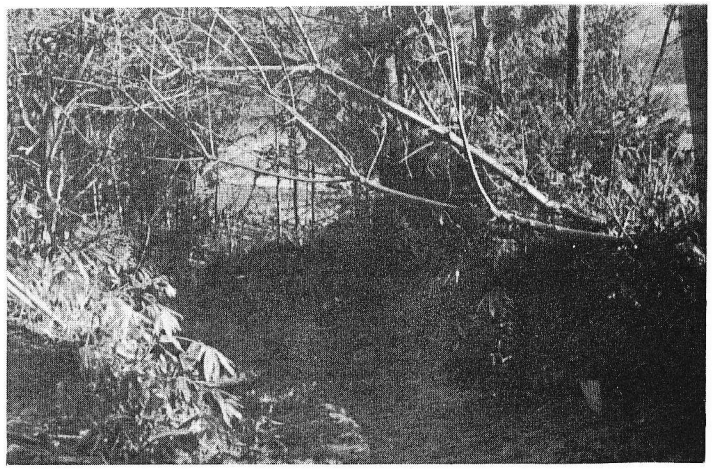
PL. I　　Ⅰ郭遠景（南側より）



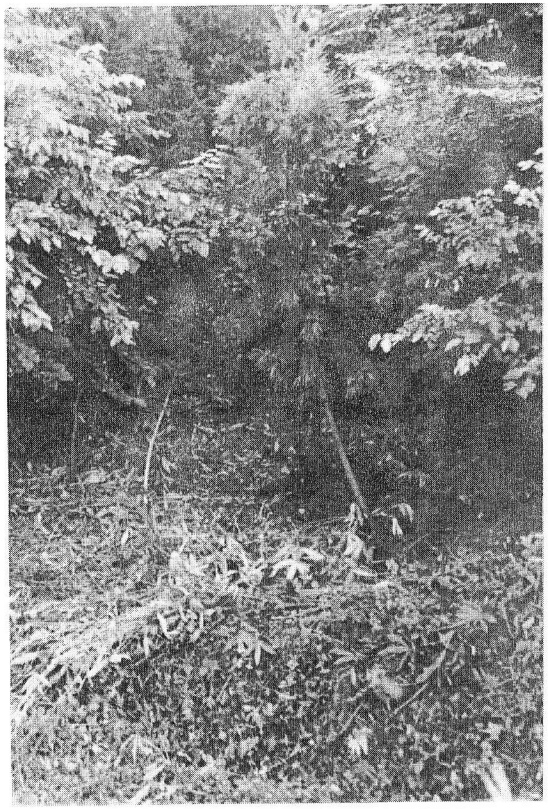
Ⅰ郭発掘前状況



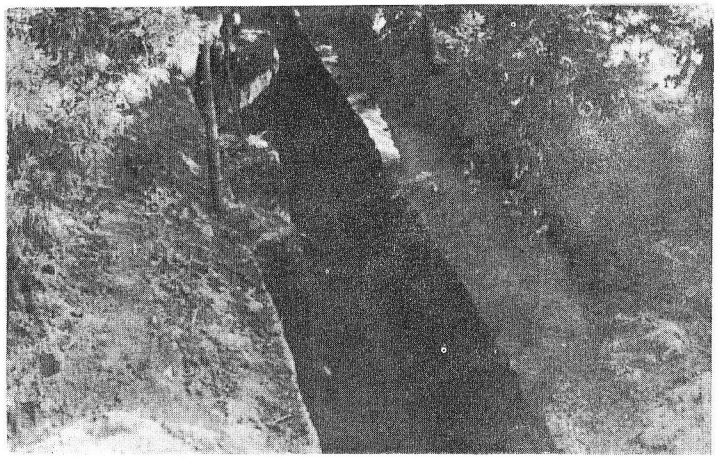
土 取 り 状 況



第 2 号 空 掘

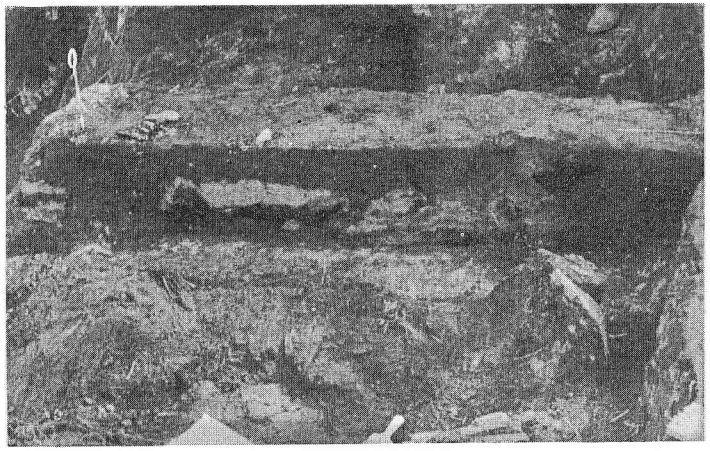


PL.2　第 1 号 空 掘

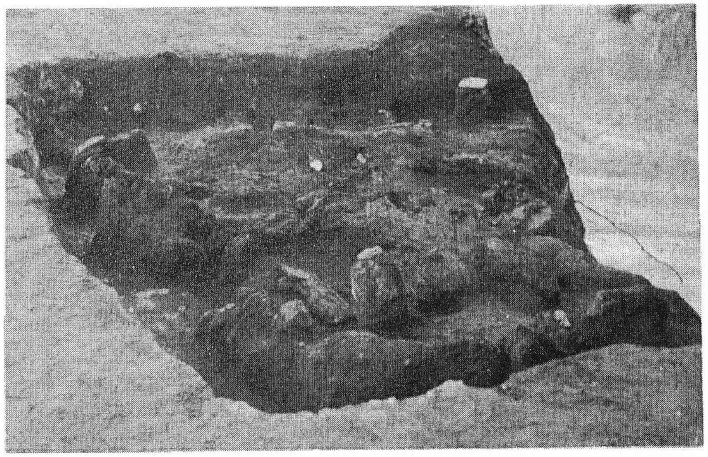


第 1 号空掘トレンチ

作 業 風 景

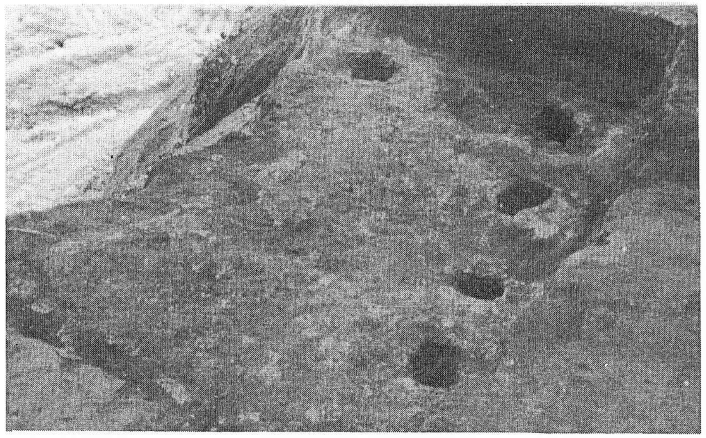


第１号竪穴遺構土層

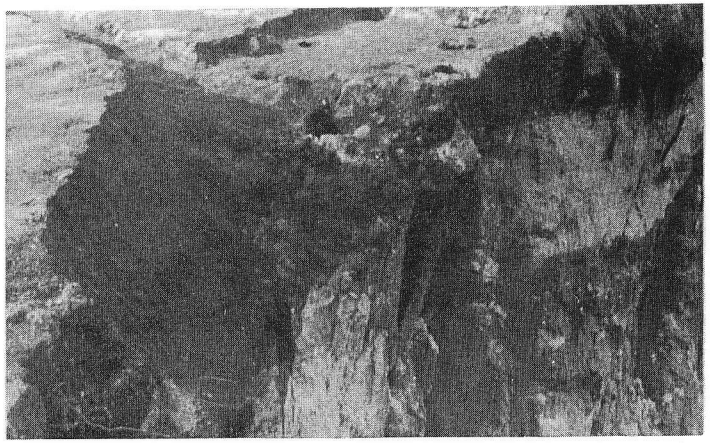


第１号竪穴遺構炭化物出土状況

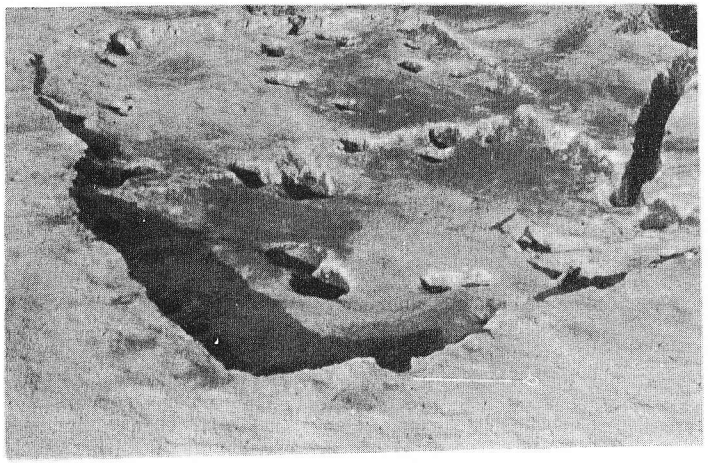
PL.3



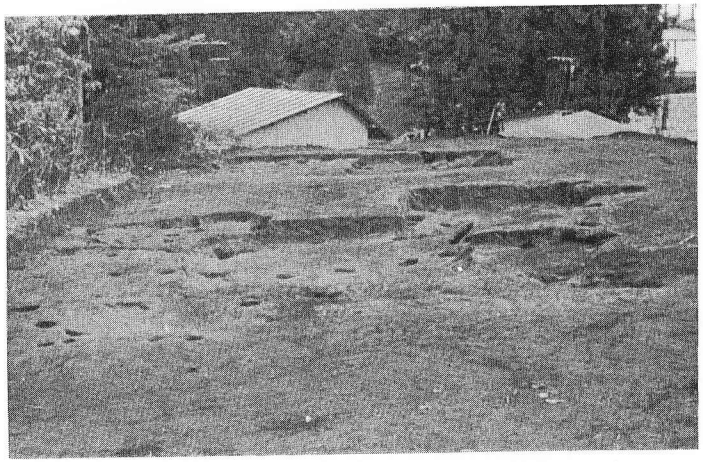
第１号竪穴遺構



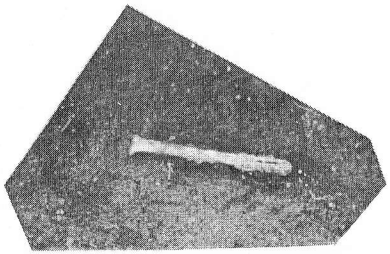
第２，３号竪穴遺構

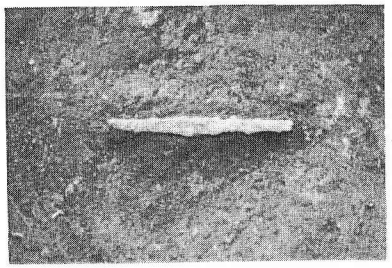


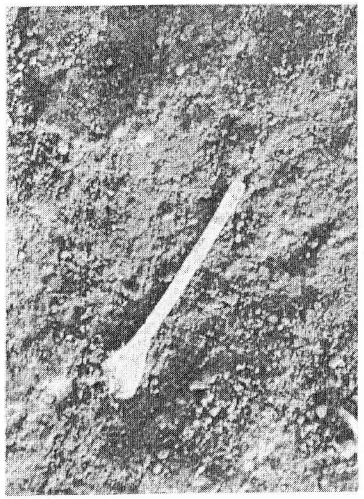
第5，6，7号竪穴遺構

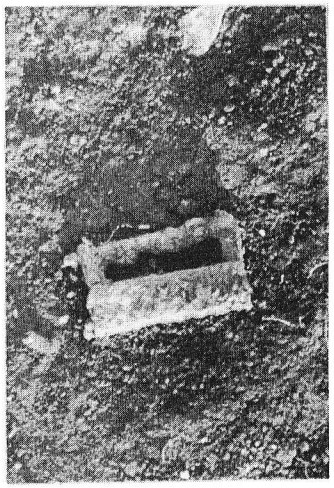


第8，9，10，11，12号竪穴遺構



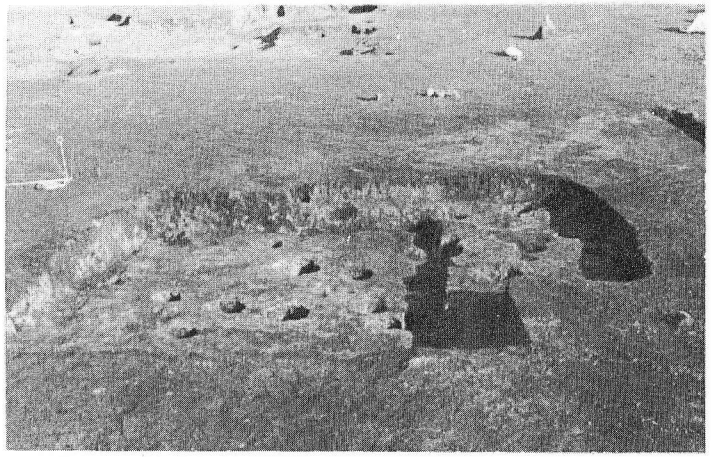




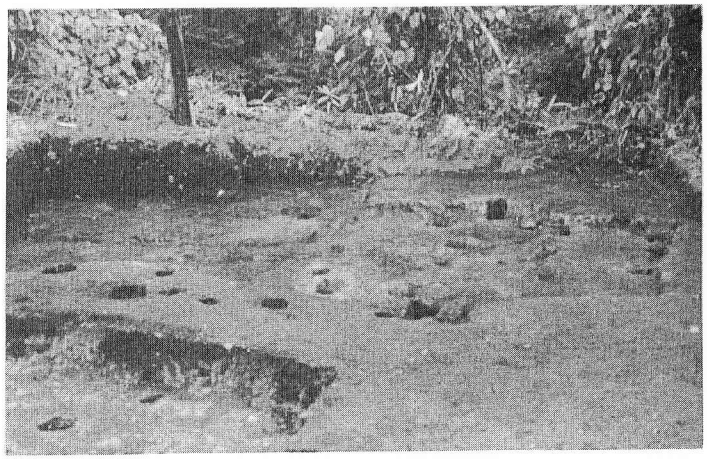


第8号竪穴遺構遺物出土状況

PL.4

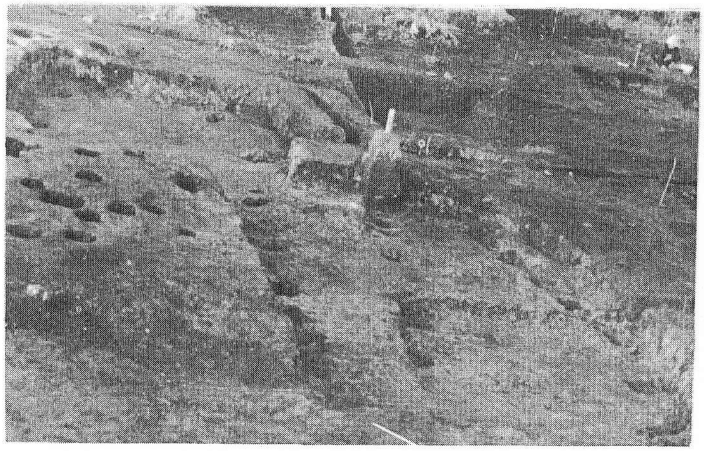


第13，14号竪穴遺構

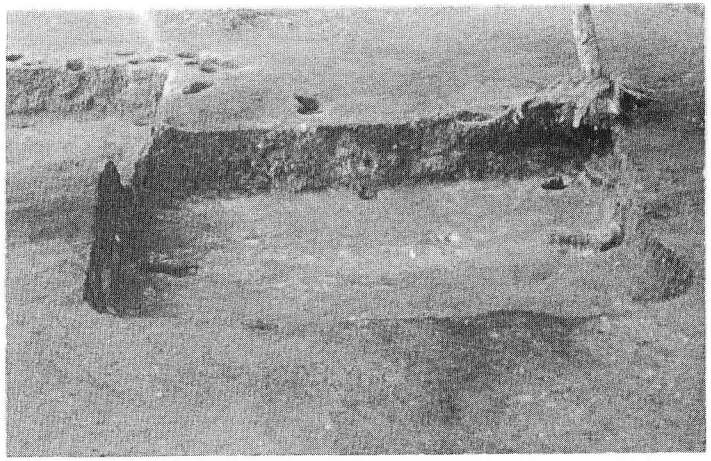


第15，16，17，20号竪穴遺構

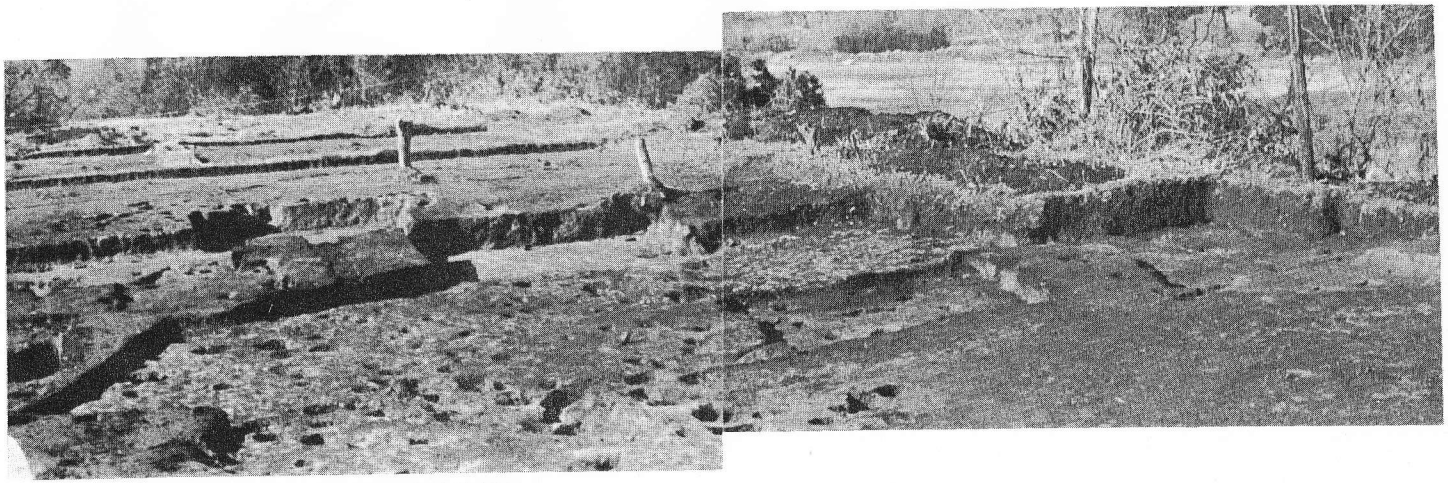
PL.5



第18a，18b，18c，19号竪穴遺構

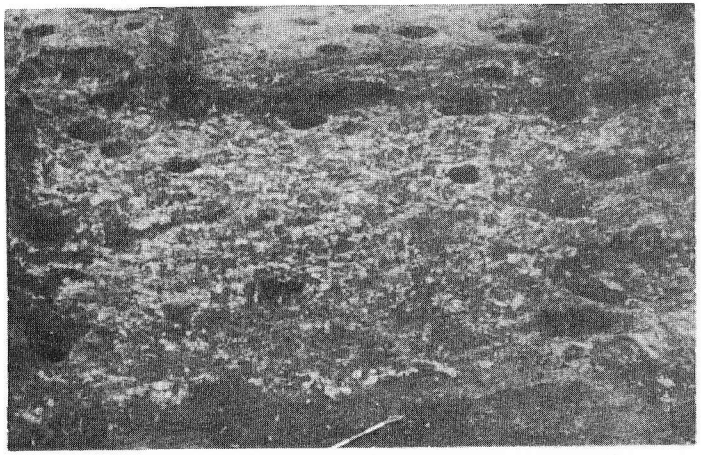


第22号竪穴遺構

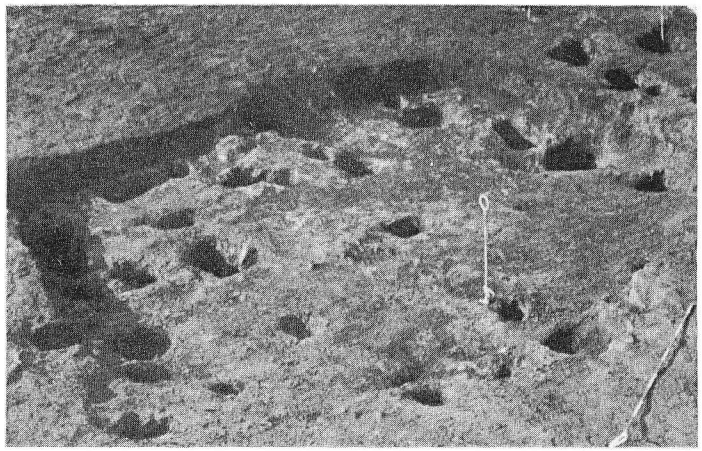


第22，31，32，33号竪穴遺構

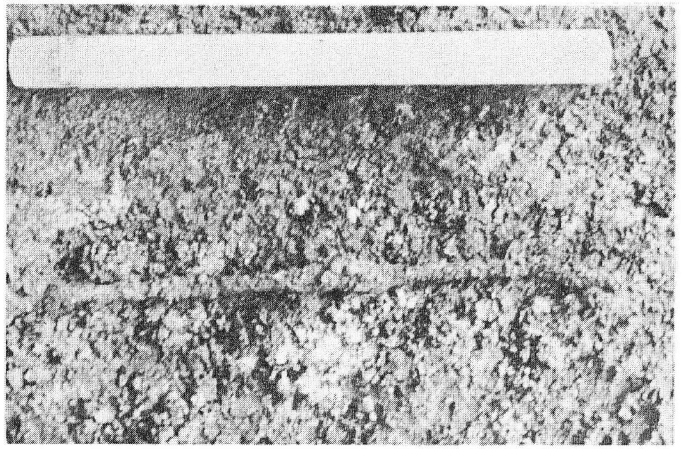
PL.6



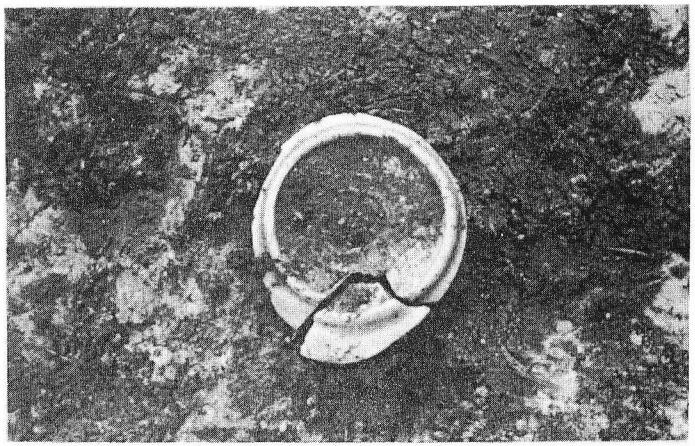
第31号竪穴遺構



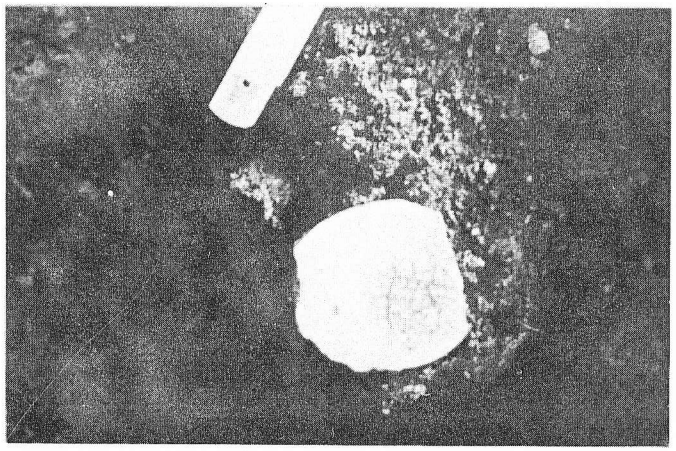
第24号竪穴遺構

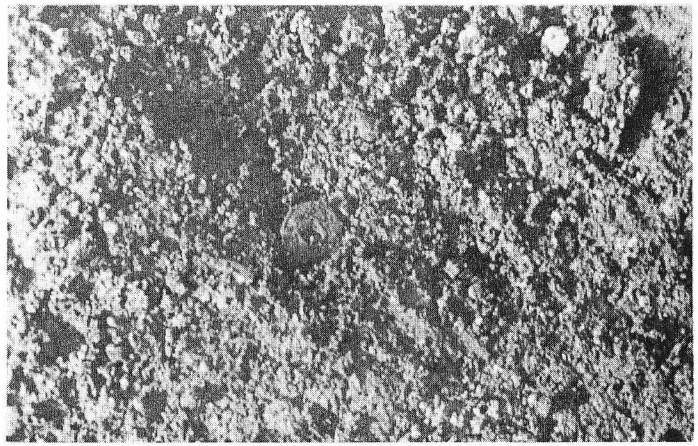


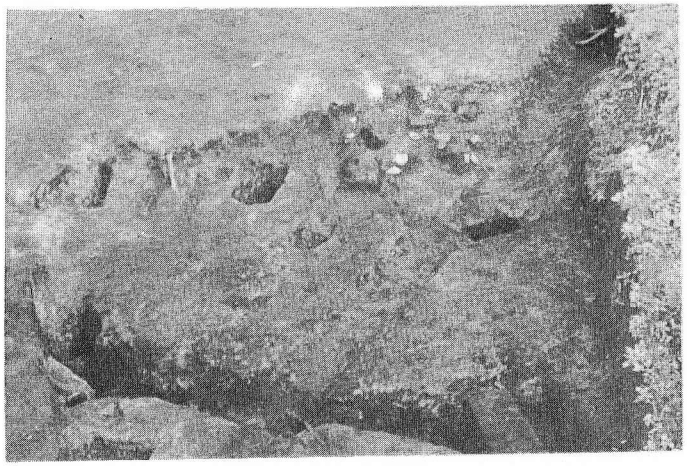
PL.7　第31号竪穴遺構遺物出土状況（上下）



第31号竪穴遺構遺物出土状況（上下）



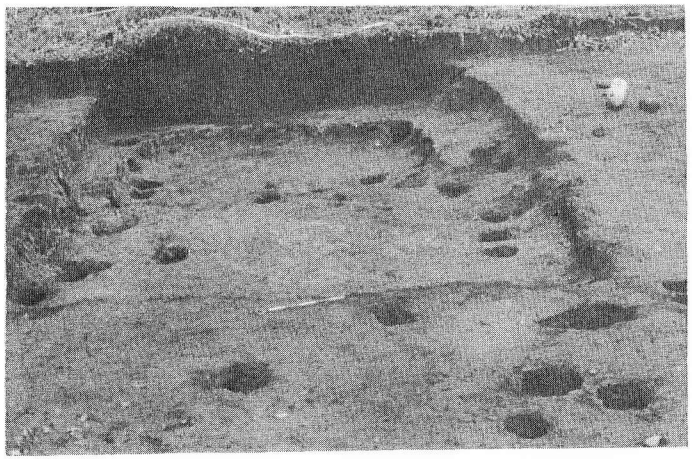




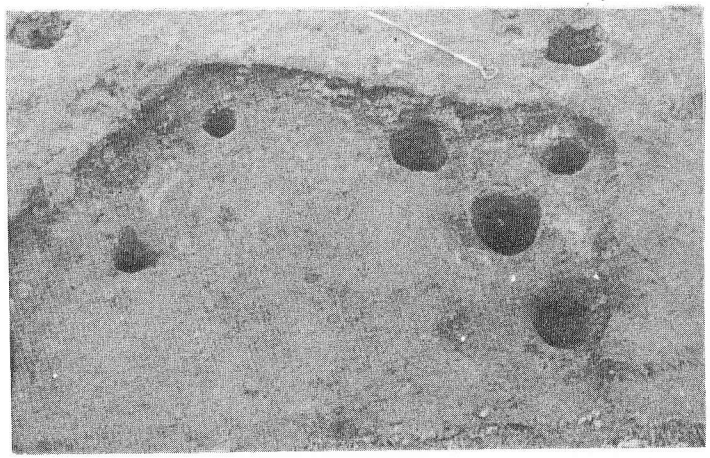
第１号竪穴住居跡

PL.8

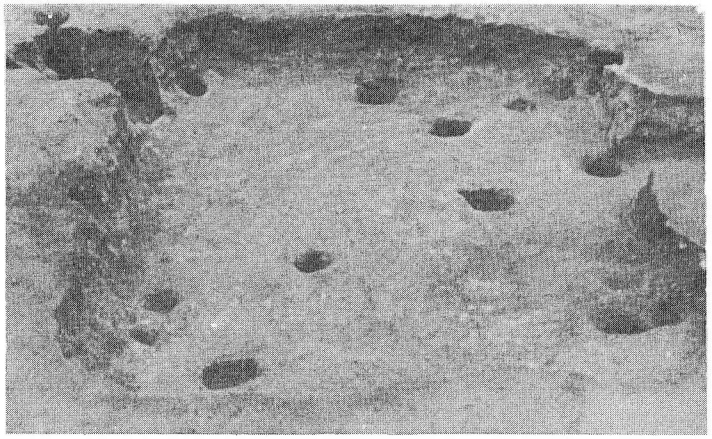
ピット群



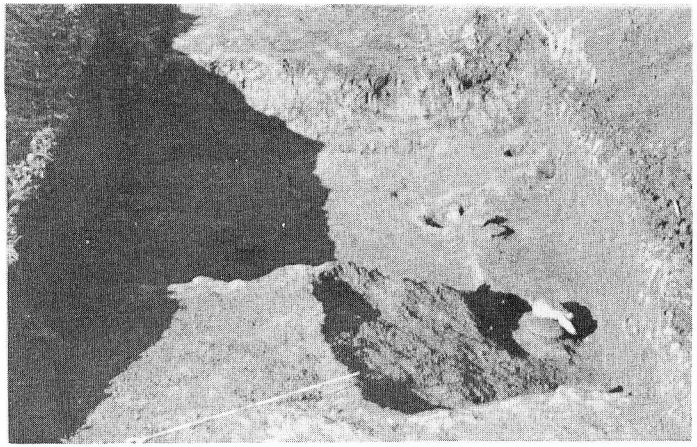
第29a，29b竪穴遺構



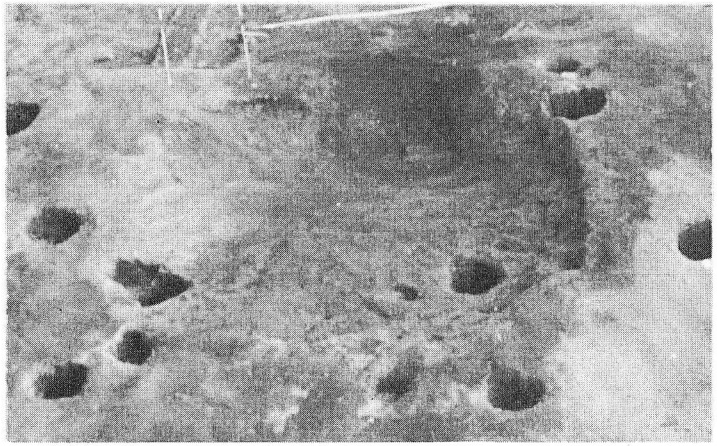
第28号竪穴遺構



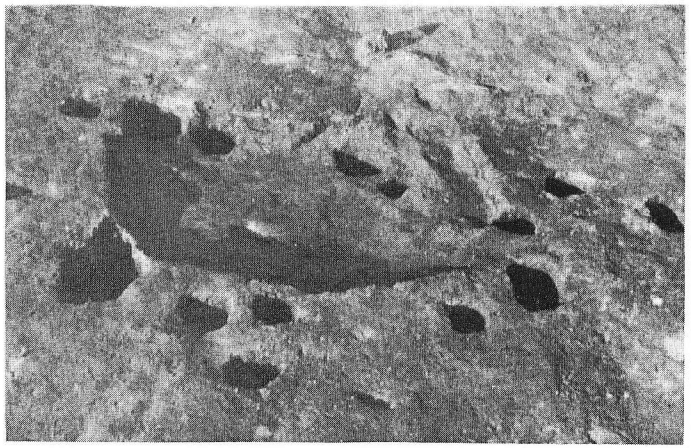
PL.9　第30号竪穴遺構



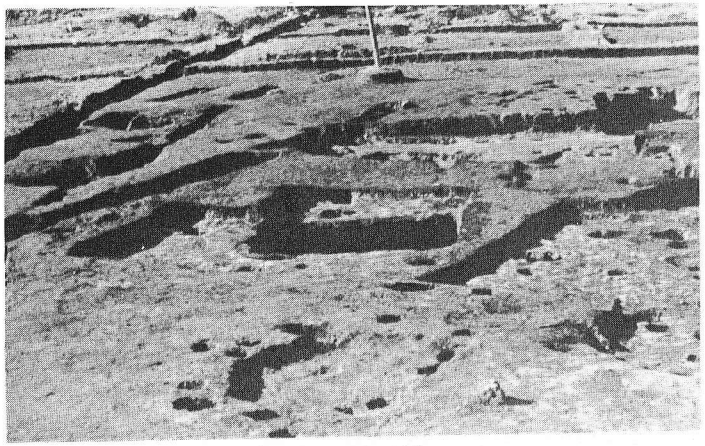
第33，34竪穴遺構



カ マ ド 遺 構

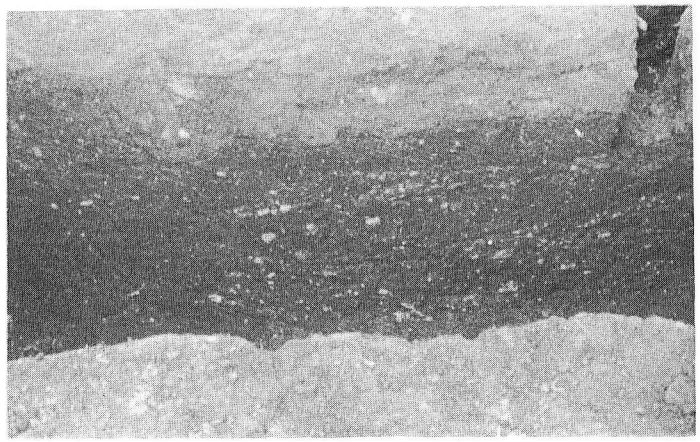


第 2 号 土 拡

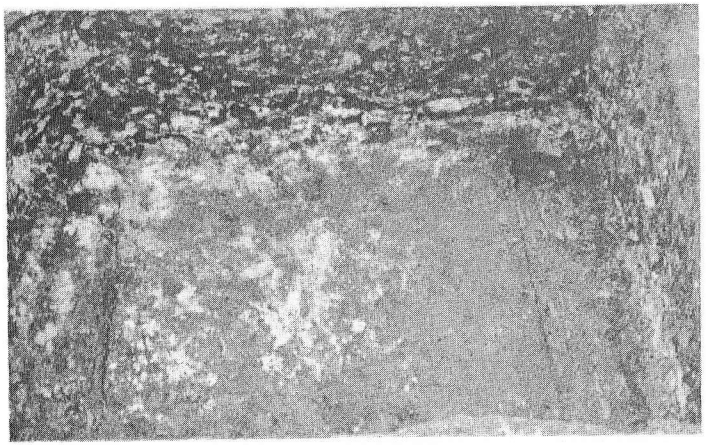


室 状 遺 構

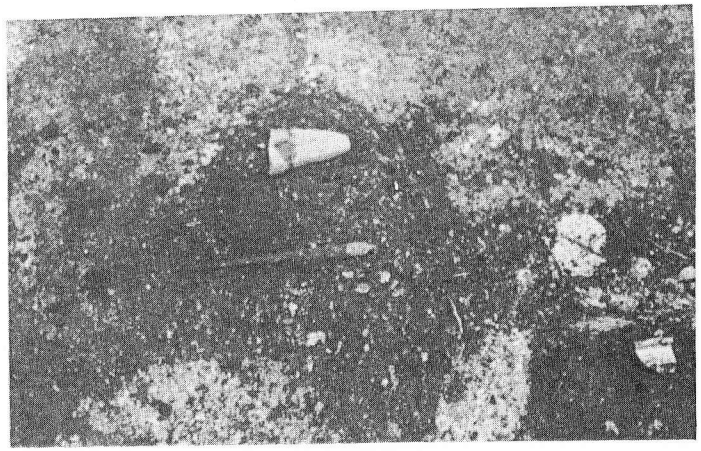
PL. 10



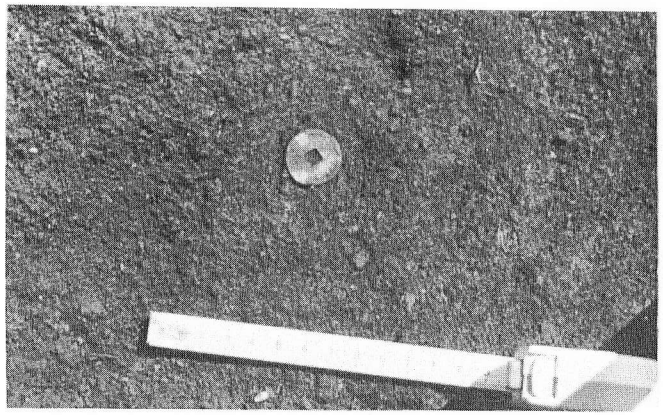
室状遺構土層



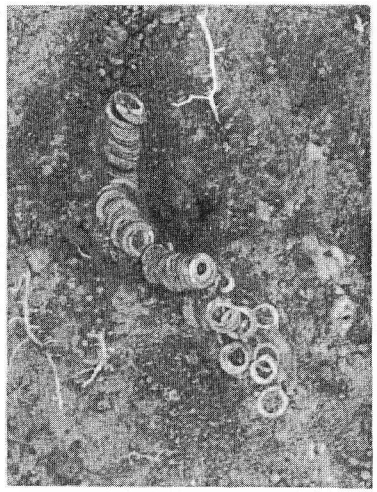
室状遺構底面



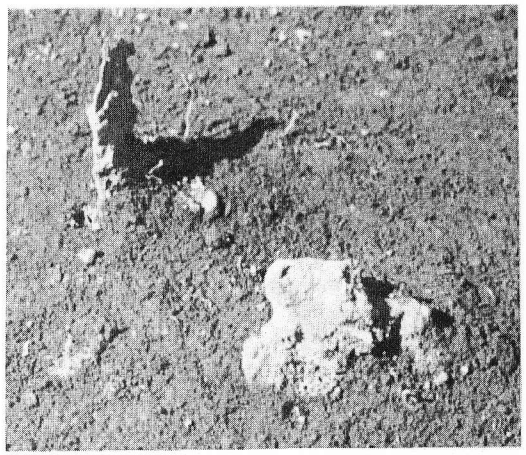
室状遺構遺物出土状況



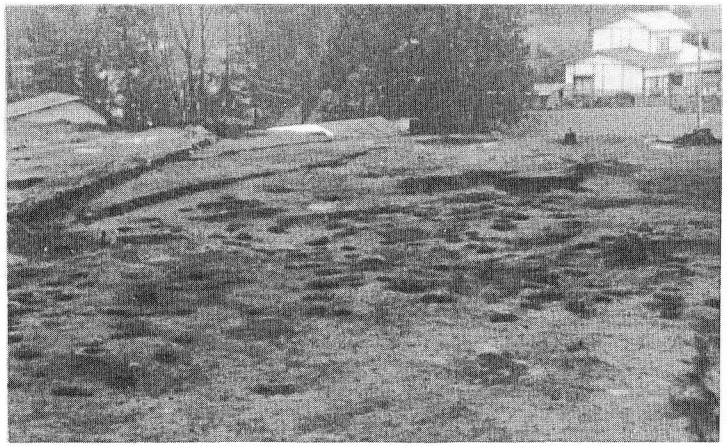
PL. 11　古銭出土状況（D-6グリッド，Ⅰ層）



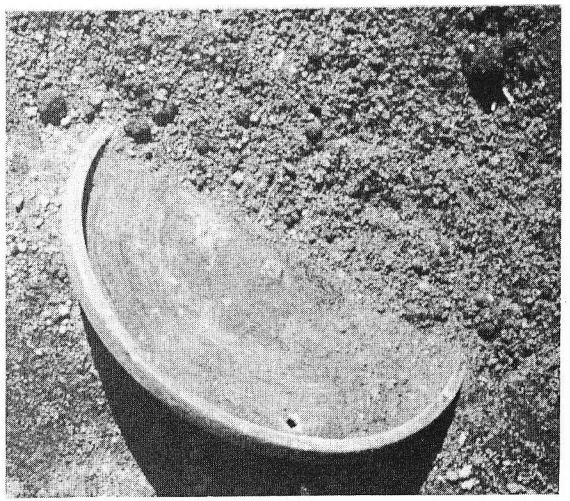
私鋳銭出土状況
（B-7グリッド，Ⅰ層）



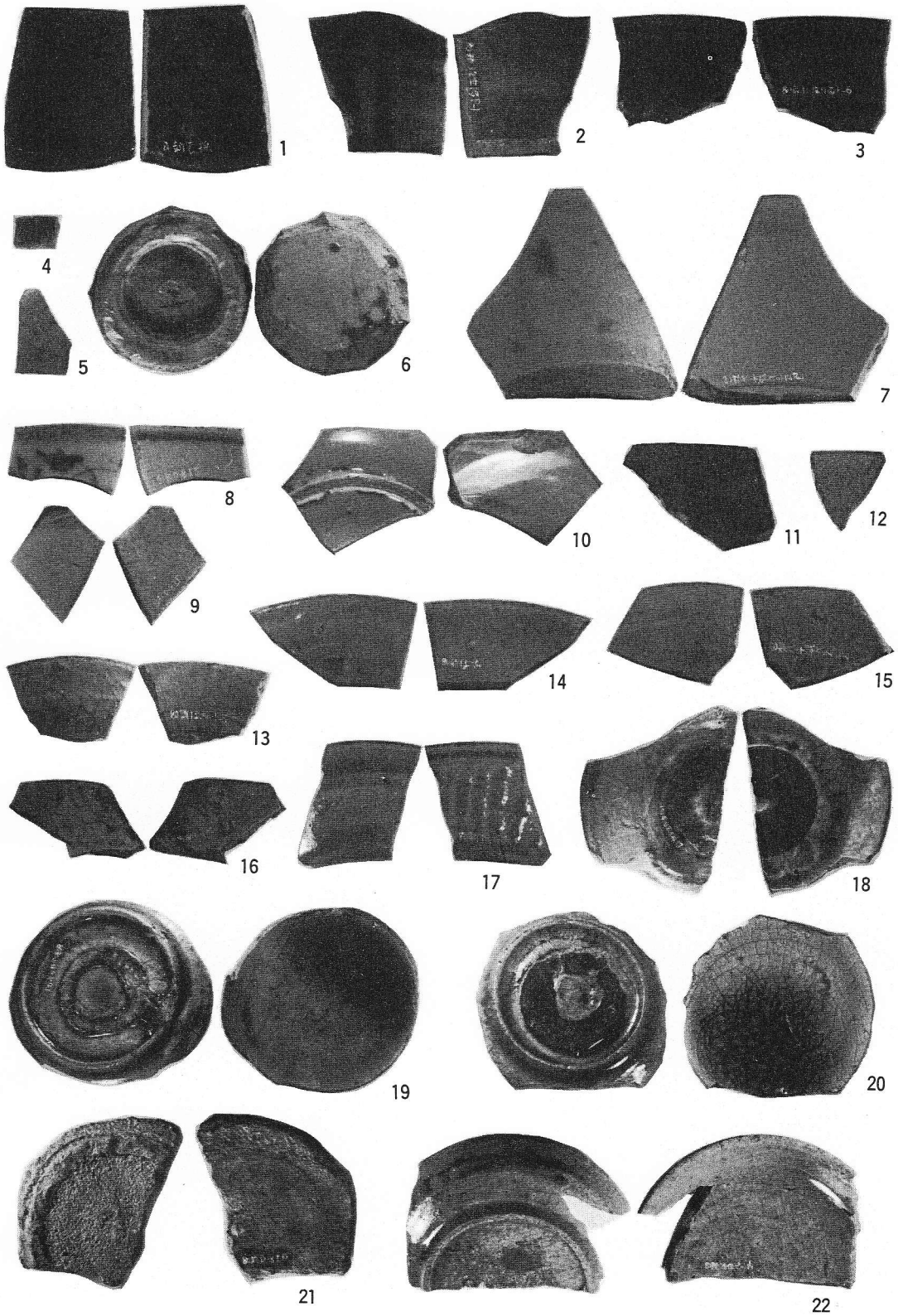
小刀出土状況（B-7グリッド，Ⅰ層）



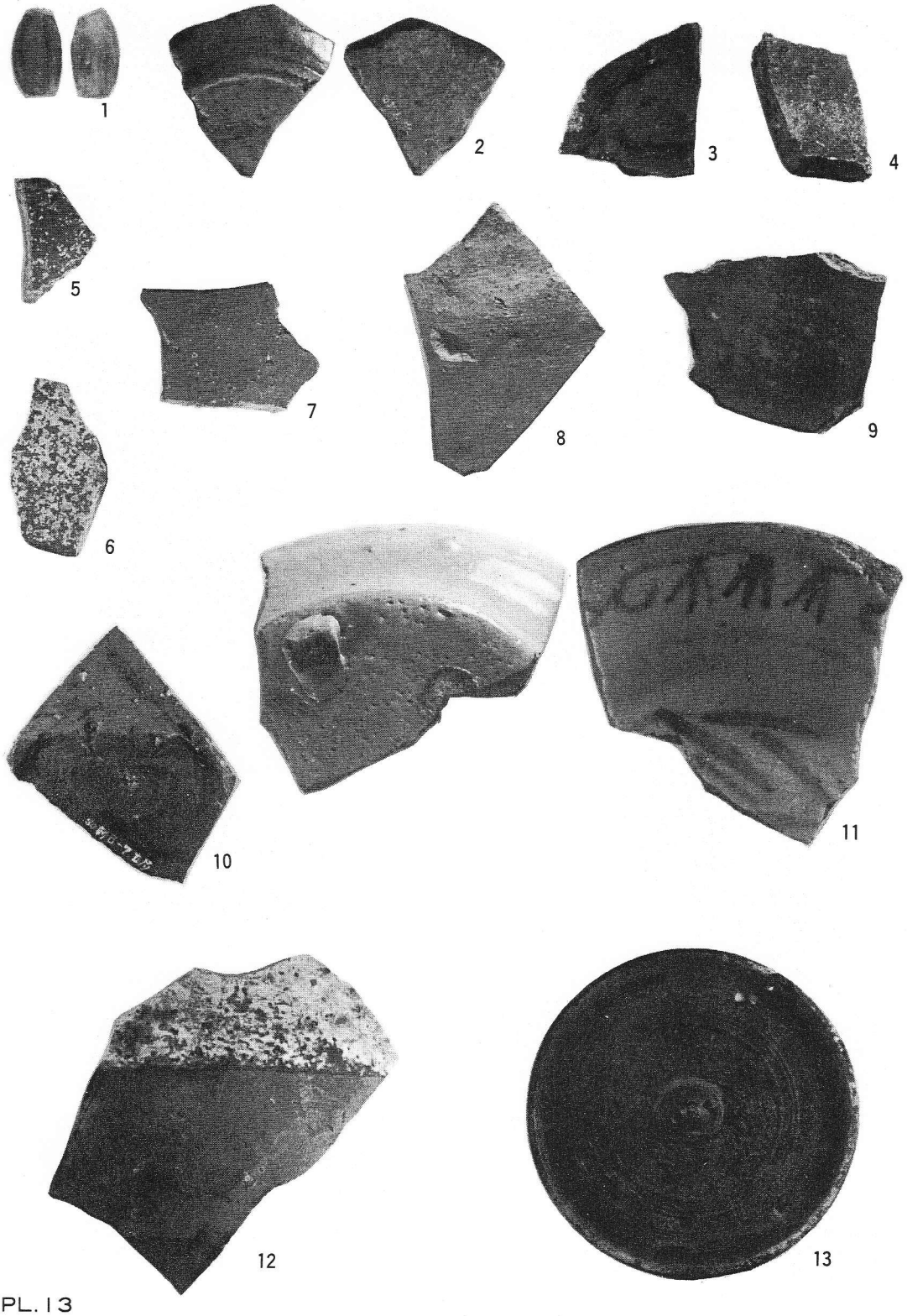
ピット群



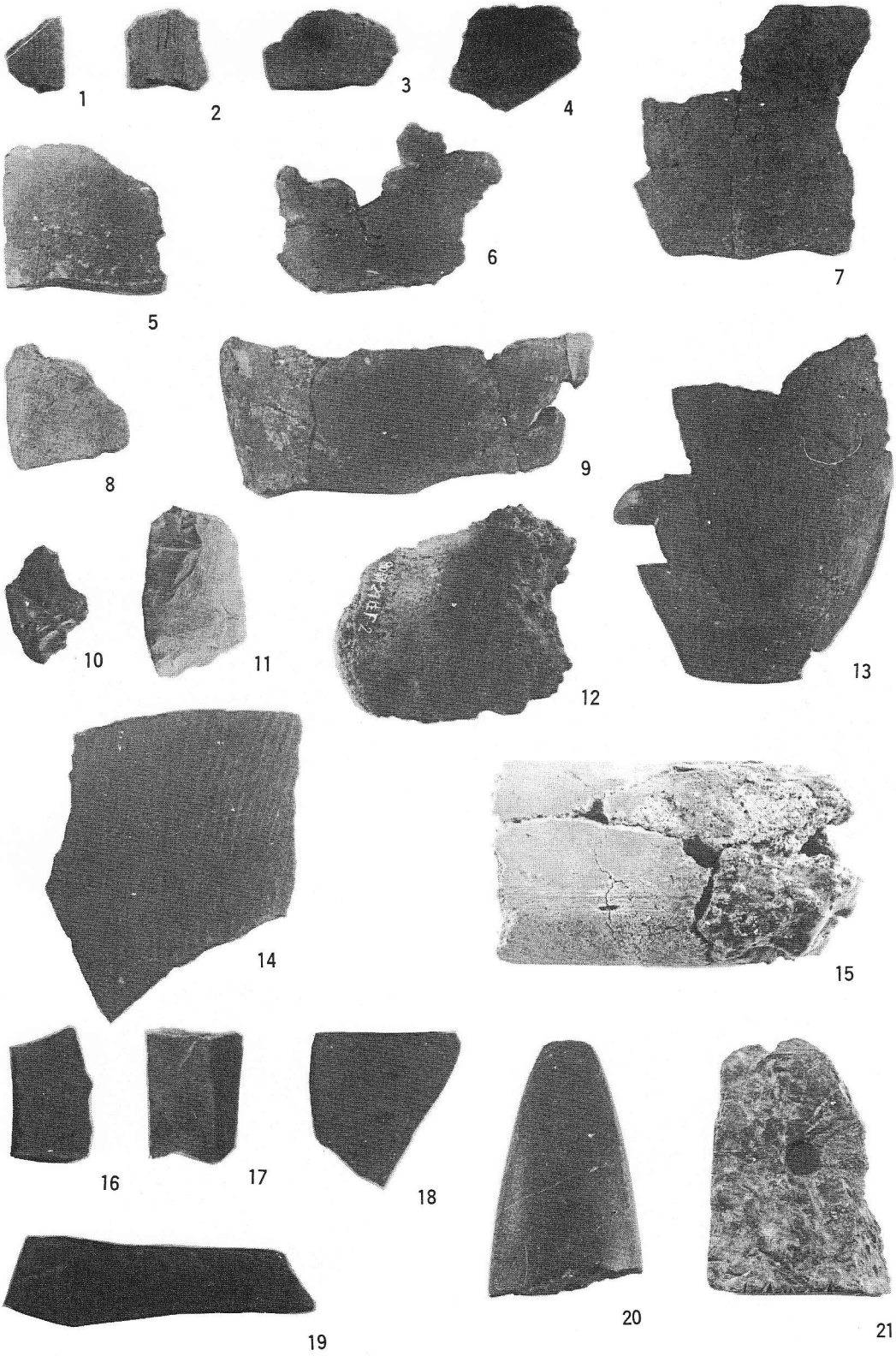
銅鏡出土状況（B-9グリッド，Ⅱ層）



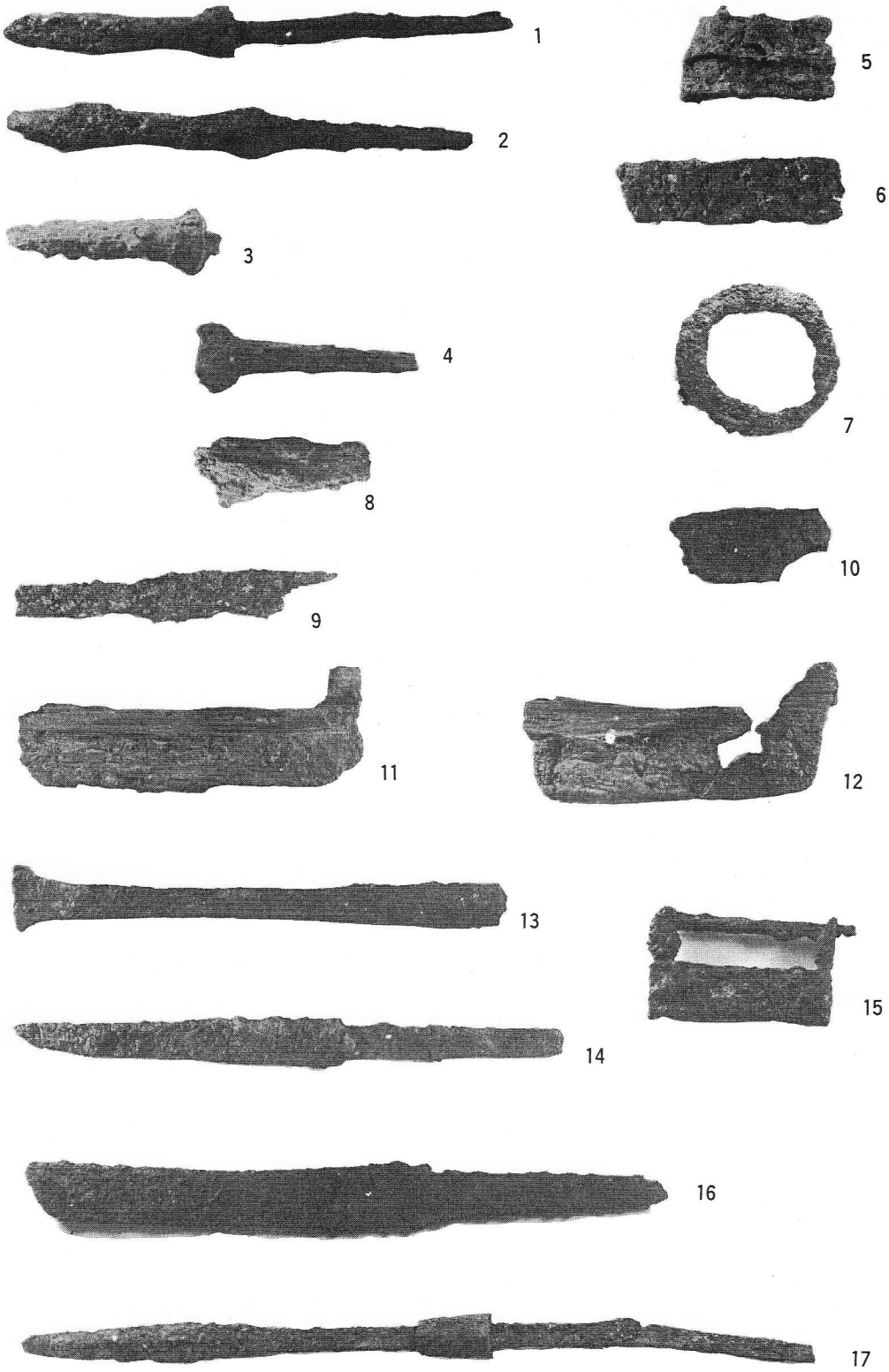
PL. 12



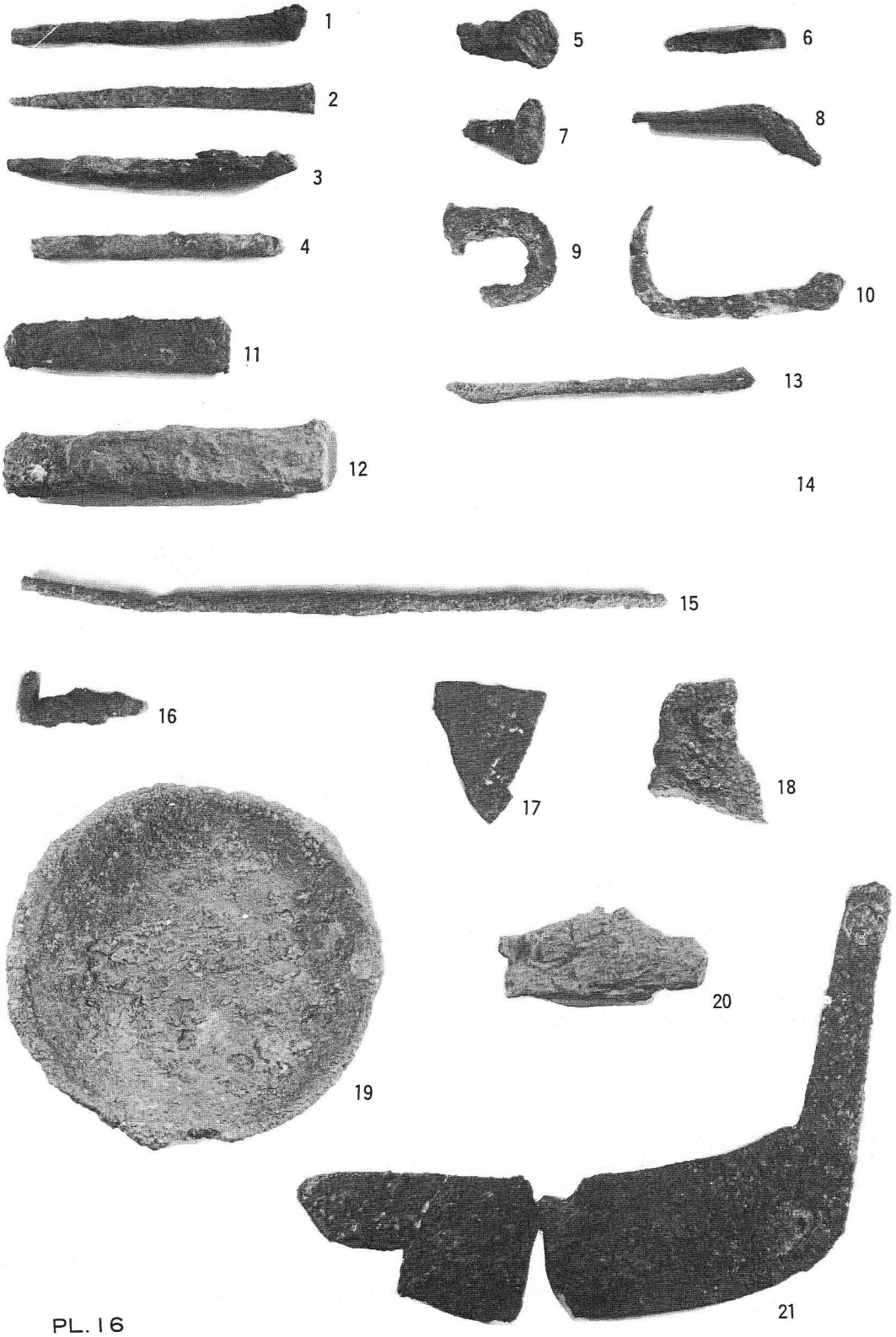
PL. 13



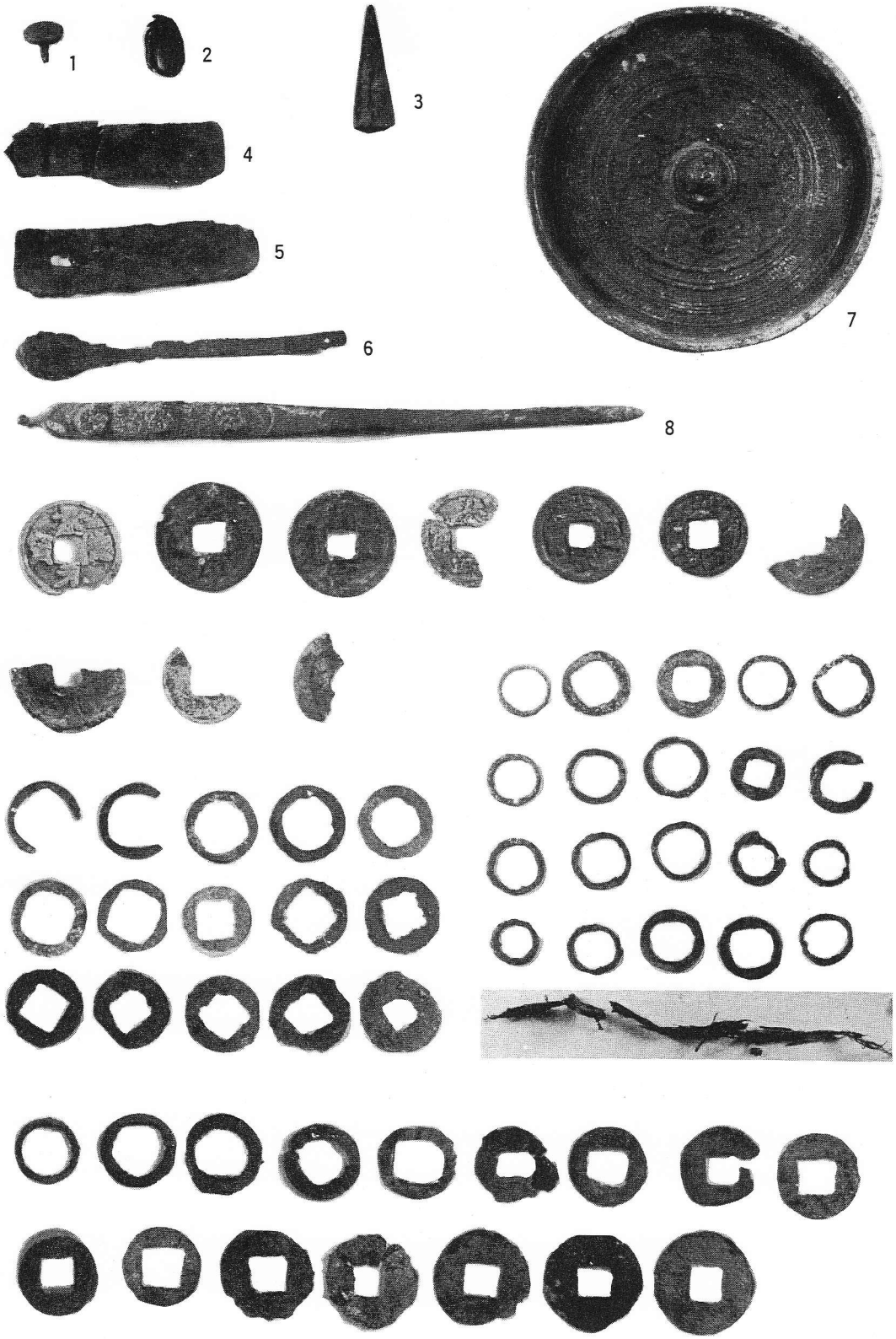
PL. 14



PL. 15



PL. 16



PL. 17

鹿角市文化財調査資料　16

鹿角市新斗米館跡第Ⅱ次発掘調査報告書

発行年月日　　昭和56年３月31日

発　行　所　　鹿角市教育委員会
〒 018―53
秋田県鹿角市十和田毛馬内字上陣場19の５
TEL　01863―５―4011

印　刷　所　　大 館 孔 版 社